

# 二十四の瞳

壺井栄

青空文庫



# 一 小石先生

十年をひと昔むかしというならば、この物語の発端ほったんは今からふた昔半もまえのことになる。世の中できごといえ、選挙せんきよの規則きそくがあらたまつて、普通選挙法ふつうせんきよほうというのが生まれ、二月にその第一回の選挙がおこなわれた、二か月後のことになる。昭和三年四月四日、農山漁村のうさんぎよそんの名が全部あてはまるような、瀬戸内海かいべりの一寒村へ、若い女の先生が赴任ふにんしてきた。

百戸あまりの小さなその村は、入り江の海を湖みずうみのような形にみせる役をしている細長い岬みさきの、そのとつばなにあつたので、対岸

の町や村へゆくには小舟で渡わたつたり、うねうねとまがりながらつづく岬の山道をてくてく歩いたりせねばならない。交通がすごくふべんなので、小学校の生徒は四年までが村の分教場にゆき、五年になつてはじめて、片道五キロの本村の小学校へかようのである。手作てづくりのわらぞうりは一日でできた。それがみんなはじまんであつた。毎朝、新らしいぞうりをおろすのは、うれしかつたにちがいない。じぶんのぞうりをじぶんの手で作るのも、五年生になつてからの仕事である。日曜日、だれかの家へ集まつてぞうりを作るのはたのしかつた。小さな子どもらは、うらやましそうにそれをながめて、しらずしらずのうちに、ぞうり作りをおぼえてゆく。小さい子どもたちにとって、五年生になるといふことは、

ひとり立ちを意味するほどのことであつた。しかし、分教場もたのしかつた。

分教場の先生は二人で、うんと年よりの男先生と、子どものように若い女先生がくるのにきまつていた。それはまるで、そういう規則があるかのように、大昔からそうだつた。職員室しよくいんしつのとなりの宿直室しゆくちよくしつに男先生は住みつき、女先生は遠い道をかよつてくるのも、男先生が三、四年を受けもち、女先生が一、二年と全部の唱歌しょうかと四年女生の裁縫さいほうを教える、それも昔からのきまりであつた。生徒たちは先生を呼ぶのに名をいわず、男先生、女先生おなごといった。年よりの男先生が恩給おんきゆうをたのしみに腰こしをすえているのと反対に、女先生のほうは、一年かせいぜい二年する

と転任てんにんした。なんでも、校長になれない男先生の教師としての最後のつとめと、新米しんまいの女先生が苦勞のしはじめを、この岬みさきの村の分教場でつとめるのだという噂うわさもあるが、うそかほんとかはわからない。だが、だいたいほんとうのようでもある。

そうして、昭和三年の四月四日にもどろう。その朝、岬の村の五年生以上の生徒たちは、本校まで五キロの道をいそいそと歩いていた。みんな、それぞれ一つずつ進しんきゆう級きゆうしたことが心はずませ、足もとも軽かったのだ。かばんの中は新しい教科書にかわっているし、今日きょうから新らしい教室で、新らしい先生に教えてもらうたのしみは、いつも通る道までが新らしく感じられた。それというのも、今日は、新らしく分教場へ赴任ふにんしてくる女先生に、

この道で出あうということもあつた。

「こんどのおなご先生、どんなヤツじやろな」

わざとぞんざいに、ヤツよばわりをするのは、高等科——今の新制中学生にあたる男の子どもたちだ。

「こんどのもまた、女学校出え出えの卵じやいよつたぞ」

「そんなら、また半人前先生か」

「どうせ、岬みさきはいつでも半人前じやないか」

「貧乏村びんぼうむらなら、半人前でもしようがない」

正規の師範出しはんではなく、女学校出の準教員じゅん（今では助教じよきようと

いうのだろうか）のことを、口のわるい大人おとなたちが、半人前など

というのをまねて、じぶんたちも、もう大人になったようなつも

りでいつているのだが、たいして悪気はなかった。しかし、今日きょうはじめてこの道歩くことになった五年生たちは、目をぱちくりさせながら、今日仲間入りをしたばかりの遠慮えんりよさで、きいていゝる。だが、前方から近づいてくる人の姿をみとめると、まつさきにかんせい歡声をあげたのは五年生だった。

「わあ、おなご先生エ」

それは、ついこないだまで教えてもらっていた小林先生である。いつもはさつさとすれちがいがらおじぎを返すだけの小林先生も、今日は立ちどまって、なつかしそうにみんなの顔をかわるがわる見まわした。

「今日で、ほんとにおわかれね。もうこの道で、みんなに出あう

ことはないわね。よく勉強してね」

そのしんみりした口調くちように涙ぐんだ女の子もいた。この小林先生だけは、これまでの女先生の例をやぶって、まえの先生が病気でやめたあと、三年半も岬の村を動かなかった先生であった。だから、ここで出あった生徒たちは、いちどは小林先生に教おそわったことのあるものばかりだ。先生がかわるといふようなことは、本来ならば新学期のその日になってはじめて分かるのだが、小林先生は、かた破りに十日もまえに生徒に話したのである。三月二十五日の修しゅうぎ業ようしき式しきに本校へいった帰り、ちようど、いま、立っているこのへんで、別れのことばをいい、みんなに、キャラメルこぼこの小箱を一箱ずつくれた。だからみんなは、今日この道を新らし

い女先生が歩いてくるとばかり思っていたのに、それを迎<sup>むか</sup>えるまえに小林先生にあつてしまったのである。小林先生も、今日は分教場にいる子どもたちに、別れのあいさつにゆくところなのであらう。

「先生、こんどくる先生は？」

「さあ、もうそろそろ見えるでしょう」

「こんどの先生、どんな先生？」

「しらのよ、まだ」

「また女学校出え出え？」

「さあ、ほんとにしらの。でもみんな、性<sup>しょう</sup>わるしたら、だめよ」

そういつて小林先生は笑った。先生もはじめの一年は途<sup>とちゆう</sup>中の

道でひどく困こまらされて、生徒の前もかまわず泣いたこともあった。泣かした生徒はもうここにはいないけれど、ここにいる子の兄や姉である。若いのと、なれないのとで、岬みさきへくるたいいの女先生が、一度は泣かされるのを、本校通いの子どもらは伝でん説せつとして知っていた。四年もいた小林先生のためなので、子どもたちの好奇心こうきしんはわくわくしていた。小林先生と別れてからも、みんなはまた、こんどくる先生の姿を前方きんぱうに期待しながら、作戦をこらした。

「芋いも女じよオつて、どなるか」

「芋女でなかったら、どうする」

「芋女に、きまつとると思うがな」

口ぐちに芋女芋女といっているのは、この地方がさつま芋の本<sup>ほん</sup>場<sup>ば</sup>であり、その芋畑のまん中にある女学校なので、こんないたずらな呼びかたも生まれたわけだ。小林先生もその芋女出身だった。子どもたちは、こんどくる女先生をも芋女出ときめて、もうくるか、もう見えるかと、道がまがるたびに前方を見わたしたが、彼らの期待する芋女出え出えの若い先生の姿にはついにあわず、本村の広い県道に出てしまった。と同時に、もうおなご先生のことなどかなぐり捨てて、小走りになった。いつも見るくせになっている県道ぞいの宿屋の玄<sup>げん</sup>関<sup>かん</sup>の大時計が、いつもより十分ほどすすんでいたからだ。時計がすすんだのではなく、小林先生と立ち話をしただけおそくなったのだ。背中や脇<sup>わき</sup>の下で筆箱を鳴らし

ながら、ほこりを立ててみんなは走りつづけた。

そうして、その日の帰り道、ふたたび女先生のことを思いだしたのは県道から、岬みさきのほうへわかれた山道にさしかかってからである。しかもまた、向こうから小林先生が歩いてくるのだ。長い袂たもとの着物をきた小林先生は、その袂をひらひらさせながら、みょうに両手を動かしている。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

女の子はみんな走りだした。先生の笑顔えがおがだんだんはつきりと近づいてくると、先生の両手が見えない綱つなをひっぱっていることがわかって、みんな笑った。先生はまるで、ほんとに綱でもひき

よせているように、両手をかわるがわる動かし、とうとう立ちどまってみんなをひきよせてしまった。

「先生、こんどのおなご先生、きた？」

「きたわ。どうして？」

「まだ学校にいるん？」

「ああ、そのこと。舟できたのよ、今日は」

「ふうん。そいでまた、舟で去んだん？」

「そう、わたしにもいっしょに舟で帰ろうとすすめてくれたけど、先生、も一ぺんあんたらの顔みたかったから、やめた」

「わア」

女の子たちがよろこんでかんせい歓声をあげるのを、男の子はにやに

やして見ている。やがてひとりगतらずねた。

「こんどの先生、どんな先生ぞな？」

「いい先生らしい。かわいらしい」

小林先生はふつと思いだしたような笑顔をした。

「芋いも女じよ？」

「ちがう、ちがう。えらい先生よ、こんどの先生」

「でも、新しん米まいじやろ」

小林先生はきゆうにおこったような顔をして、

「あんたら、じぶんで教えてもらう先生でもないのに、どうしてそんなこというの。はじめっから新米でない先生で、ないのよ。

またわたしのときみたいに、泣かすつもりでしょう」

そのけんまくに、心の中を見すかされたと思つて目をそらすものもあつた。小林先生が分教場にかよいだしたころの生徒は、わざと一列横隊おうたいになつておじぎをしたり、芋女つとさけんんだり、穴があくほど見つめたり、にやにや笑いをしたりと、いろんな方法で新米の先生をいやがらせたものだった。しかし、三年半のうちにはもうどんなことをしても先生のほうで困らなくなり、かえつて先生が手出しをしてふぎけたりした。五キロの道のりでは、なにかなくてはやりきれなかつたのだらう。ころをみて、またひとりの生徒がたずねた。

「こんどの先生、何いう名前？」

「おおいし大石先生。でもからだは、ちっちゃあい人。小林でもわたし

はのっぽだけど、ほんとに、ちっちゃあい人よ。わたしの肩かたぐら  
い」

「わあ！」

まるで喜ぶようなその笑い声をきくと、小林先生はまたきつと  
なつて、

「だけど、わたしらより、ずっとずっとえらい先生よ。わたしの  
ように半人前ではないのよ」

「ふうん。それで先生、舟でかようんかな？」

ここが大問題だというようにきくのへ、先生のほうも、ここだ  
なという顔をして、

「舟は今日だけよ。明日あしたからみんな会あえるわ。でも、こんどの先

生は泣かんよ。わたし、ちやんといつといたもの。本校の生徒と行きしもと戻りに出あうけど、もしもいたずらしたら、さぐる猿が遊んでると思つときなさい。もしもなんかいつてなぶつたら、からす鳥が鳴いたと思つときなさいって」

「わあ」

「わあ」

みんないつせいに笑つた。いっしよに笑つて、それで別れて帰つてゆく、小林先生のうしろ姿が、つぎの曲がり角に消えさるまで、生徒たちは口ぐちにさけ叫んだ。

「せんせえ」

「さよならあ」

「嫁よめさーん」

「さよならあ」

小林先生はお嫁にゆくためにやめたのを、みんなはもう知っていたのだ。先生が最後にふりかえって手をふって、それで見えなくなる、さすがにみんなの胸には、へんな、もの悲しさがのこり、一日のつかれも出てきて、もっそりと歩いた。帰ると、村は大きわぎだった。

「こんどのおなご先生は、洋服きとるど」

「こんどのおなご先生は、芋いも女じよとちがうど」

「こんどのおなご先生は、こんまい人じゃど」

そしてつぎの日である。芋女出でない、小さな先生にたいして、

どきどきするような作戦さくせんがこらされた。

こそこそ、こそこそ

こそこそ、こそこそ

道みちささやきながら歩いてゆく彼らは、いきなりどぎもをぬかれたのである。場所もわるかった。見通みとおしのきかぬ曲がり角の近くで、この道にめずらしい自転車が見えたのだ。自転車はすうつと鳥のように近づいてきたかと思うと、洋服をきた女が、みんなのほうへにこつと笑いかけて、

「おはよう！」

と、風のように行きすぎた。どうしたってそれは女先生にちがいなかった。歩いてくるとぼつかり思っていた女先生は自転車を

とぼしてきたのだ。自転車にのった女先生ははじめてである。洋服をきた女先生もはじめて見る。はじめての日に、おはよう！

とあいさつをした先生もはじめてだ。みんな、しばらくはぽかんとしてそのうしろ姿を見おくっていた。全然これは生徒の敗<sup>ま</sup>けである。どうもこれは、いつもの新<sup>しん</sup>任<sup>にん</sup>先生とはだいぶようすがちがう。少々のいたずらでは、泣きそうもないと思つた。

「ごついな」

「おなごのくせに、自転車にのつたりして」

「なまいきじやな、ちつと」

男の子たちがこんなふう<sup>ひひよう</sup>に批評<sup>ひひよう</sup>している一方<sup>いつぽう</sup>では、女の子はまた女の子らしく、少しちがった見方で、話<sup>わ</sup>がはずみだしてい

る。

「ほら、モダンガールいうの、あれかもしれんな」

「でも、モダンガールいうのは、男のように髪をここのとこで、  
さんぱつしとることじゃろ」

そういつて耳のうしろで二本の指を鋏はさみにしてみせてから、

「あの先生は、ちゃんと髪ゆうとつたもん」

「それでも、洋服きとるもん」

「ひよつとしたら、自転車屋の子かもしれんな。あんなきれいな  
自転車にのるのは。ぴかぴか光つとつたもん」

「うちらも自転車にのれたらええな。この道をすうつと走りる、  
気色きしよくがええじゃろ」

なんとしても自転車では太刀打ちできない。しよい投げをくわされたように、みんながっかりしていることだけはまちがいなかった。なんとか鼻をあかしてやる方法を考えだしたいと、めいめい思っているのだが、なに一つ思いつかないうちに岬の道を出はずれていた。宿屋の玄関げんかんの柱時計は今日もまた、みんなの足どりを正直にしめして八分ほどすぎている。それ、とばかり背中と脇わきの下の筆入れはいっせいに鳴りだし、ぞうりはほこりを舞まいがらせた。

ところが、ちようどその同じころ、岬みさきの村でも大きわぎだった。昨日は舟にのつてきたとかで、気がつかぬうちにまた舟で帰ったのをきいた村のおかみさんたちは、今日こそ、どんな顔をして道

を通るかど、その洋服をきているという女先生を見たがつていた。ことに村の入り口の関所せきしよとあだ名のあるよろずやおかみさんときたら、岬の村へくるほどの人は、だれよりも先にじぶんが見る権利けんりがある、とでもいうように、朝のおきぬけから通りのほうへ気をくばっていた。だいぶなが永らく雨がなかつたので、かわいた表通りに水をまいておくのも、新らしい先生を迎えるむかにはよかるうと、ぞうきんバケツをもつて出てきたとき、向こうから、さあつと自転車走ってきたのだ。おやつと思うまもなく、

「おはようございます」

あいそよく頭をさげて通りすぎた女がある。

「おはようございます」

返事をしたとたん、はつと気がついたが、ちようど下り坂になつた道を自転車はもう走りさつていた。よろずやおかみさんはあわてて、となりの大工さん<sup>だいく</sup>とこへ走りこみ、井戸ばたでせんたくものをつけているおかみさんに大声でいった。

「ちよつと、ちよつと、いま、洋服きた女が自転車にのつて通つたの、あれがおなご先生かいの？」

「白いシャツきて、男みたような黒の上着きとつたかいの」

「うん、そうじゃ」

「なんと、自転車でかいの」

昨日入学式に長女の松江<sup>まつえ</sup>をつれて学校へいった大工のおかみさんは、せんたくものを忘れて、あきれた声でいった。よろずやの

おかみさんは、わが意を得たという顔で、

「ほんに世もかわつたのう。おなご先生が自転車にのる。おてんばといわれせんかいな」

口では心配しんぱいそうにいったが、その顔はもうおてんばときめている目つきをしていた。よろずやの前から学校までは自転車で二、三分であろうが、すうつと風をきつて走つていつて十五分もたたぬうちに、女先生の噂うわさはもう村中にひろまっていた。学校でも生徒たちは大きわぎだった。職員室の入り口のわきに置いた自転車をとりまいて、五十人たらずの生徒は、がやがや、わやわや、まるで雀すずめのけんかだった。そのくせ女先生が話しかけようとして近づくと、やっぱり雀のようにぱあつと散ちつてしまう。しかたなく

職員室にもどると、たったひとりの同僚どうりようの男先生は、じつにそつけない顔でだまつている。まるでそれは、話しかけられるのは困りますとでもいつているふうに、机つくえの上の担当箱たんとうばこのかけにうつむきこんで、なにか書類を見ているのだ。授業じゆぎようのうちあわせなどは、きのう小林先生との事務ひきつきですんでいるので、もうことさら用事はないのだが、それにしてもあんまり、そつけなさすぎると、女先生は不平だったらしい。しかし、男先生は男先生で、困っていたのだ。

——こまつたな。女学校の師範科しはんを出た正教員せいきよういんのぱりぱりは、芋いも女じよ出え出えの半人前の先生とは、だいぶようすがちがうぞ。からだこそ小さいが、頭もよいらしい。話があうかな。昨日、

洋服をきてきたので、だいぶハイカラさんだとは思っていたが、自転車にのつてくるとは思わなんだ。困ったな。なんで今年ことしにかぎって、こんな上等じょうとうを岬みさきへよこしたんだろう。校長も、どうかしとる。――

と、こんなことを思つて気をおもくしていたのだ。この男先生は、百ひゃく姓くしやうの息子むすこが、十年がかりで検けん定てい試し験けんをうけ、やつと四、五年前に一人前の先生になつたという、努力型の人間だった。いつも下駄げたばきで、一枚かんばんの洋服は肩かたのところがやけて、ようかん色にかわつていた。子どももなく年とつた奥さんと二人で、貯ちよきん金きんだけをたのしみに、儉けん約やくにくらしているような人だから、人のいやがるこのふべんな岬みさきの村へきたのも、つきあいが

なくてよいと、じぶんからの希望であつたという変り種<sup>かわだね</sup>だつた。靴<sup>くつ</sup>をはくのは職員<sup>しよくいんかいぎ</sup>会議<sup>かいぎ</sup>などで本校へ出むいてゆくときだけ、自転車などは、まださわつたこともなかつたのだ。しかし、村ではけつこう氣にいられて、魚や野菜に不自由はしなかつた。村の人と同じように、垢<sup>あか</sup>をつけて、村の人と同じものを食べて、村のことばをつかっているこの男先生に、新任の女先生の洋服と自転車はひどく氣づまりな思いをさせてしまった。

しかし、女先生はそれを知らない。前任の小林先生から、本校通学の生徒のいたずらについては聞いていたのだが、男先生についてはただ、「へんこつよ、氣にしないで」とささやかれただけだつた。だが、へんこつというよりも、まるでいじわるでもされ

そんな気がして、たった二日目だというのに、うっかりしている  
と、ためいきが出そうになる。女先生の名は大石久子<sup>ひさこ</sup>。湖のよう  
な入り江の向こう岸の、大きな一本松のある村の生まれである。  
岬の村から見ると一本松は盆<sup>ぼんさい</sup>栽<sup>さい</sup>の木のように小さく見えたが、そ  
の一本松のそばにある家ではお母さんがひとり、娘のつとめ<sup>むすめ</sup>ぶり  
を案じてくれている。——と思うと、大石先生の小さなからだは  
思わず胸をはって、大きく息をすいこみ、

「お母さん！」

と、心の底から呼びかけたくなる。ついこのあいだのこと、

「岬<sup>みさき</sup>は遠くて気のどくだけど、一年だけがまんしてください。一  
年たったら本校へもどしますからな。分教場の苦勞<sup>くろう</sup>は、さきしと

いたほうがいいですよ」

亡なくなつた父親と友だちの校長先生にそういわれて、一年のしんぼうだと思つてやつてきた大石先生である。歩いてかようにはあまりに遠いから、下宿げしゆくをしてはとすめられたのを、母子おやこいっしょにくらせるのをただ一つのたのしみにして、市の女学校の師範科しはんの二年を離はなれてくらしていた母親のことを思い、片道八キロを自転車でかよう決心をした大石先生である。自転車は久子としたしかつた自転車屋の娘の手づるで、五か月月賦げつぷで手にいれたのだ。着物がないので、母親のセルの着物を黒く染そめ、へたでもじぶんで縫ぬつた。それともしらぬ人びとは、おてんばで自転車にのり、ハイカラぶつて洋服をきていると思つたかもしれぬ。なに

しろ昭和三年である。普通選挙ふつうせんきよがおこなわれても、それをよそごとに思っているへんぴな村のことである。その自転車が新らしく光っていたから、その黒い手縫いのスウツあかに垢あかがついていなか  
ったから、その白いブラウスがまっ白であつたから、岬の村の人  
にはひどくぜいたくに見え、おてんばに見え、よりつきがたい女  
に見えたのであろう。しかしそれも、大石先生にはまだなつとく  
のゆかぬ、赴任ふにん二日目である。ことばの通じない外国へでもやつ  
てきたような心細さで、一本松のわが家のあたりばかりを見やつ  
ていた。

カッ  
カッ  
カッ  
カッ

始業を報じる板木ばんぎが鳴りひびいて、大石先生はおどろいて我れにかえった。ここでは最高の四年生の級きゅう長ちやうに昨日きのうえらばれたばかりの男の子が、背のびをして板木ばんぎをたたいていた。校庭に出ると、今日はじめて親の手をはなれ、ひとりで学校へきたきお気負いと一種の不安をみせて、一年生のかたまりだけは、独特どくとくな、無言のざわめきをみせている。三、四年の組がさつさと教室へはいつていったあと、大石先生はしばらく両手をたたきながら、それにあわせて足ぶみをさせ、うしろむきのまま教室へみちびいた。はじめてじぶんにかえったようなゆとりが心にわいてきた。席せきにおさまると、出席簿しゅつせきぼをもったまま教壇きやうだんをおり、

「さ、みんな、じぶんの名前をよばれたら、大きな声で返事するんですよ。——岡田磯吉くん！」

おかだいそきち

背の順にならんだので一番前の席にいたちびの岡田磯吉は、まっさきにじぶんが呼ばれたのも気おくれのしたもとであったが、生まれてはじめてクンといわれたことでもびっくりして、返事がないのどにつかえてしまった。

「岡田磯吉くん、いないんですか」

見まわすと、いちばんうしろの席の、ずぬけて大きな男の子が、びっくりするほど大声で、答えた。

「いる」

「じゃあ、ハイって返事するのよ。岡田磯吉くん」

返事した子の顔を見ながら、その子の席へ近づいてゆくと、二年生がどっと笑いだした。本ものの岡田磯吉は困って突っ立っている。

「ソンキよ、返事せえ」

きようだいらしく、よくにた顔をした二年生の女の子が、磯吉にむかって、小声でけしかけている。

「みんなソンキっていうの？」

先生にきかれて、みんなは一ようにうなずいた。

「そう、そんなら、磯吉のソンキさん」

また、どっと笑うなかで、先生も一しよに笑いだしながら鉛筆を動かす、その呼び名をも出席簿しゅつせきぼに小さくつけこんだ。

「つぎは、竹下竹たけしたたけいち一くん」

「ハイ」りこうそうな男の子である。

「そうそう、はつきりと、よくお返事できたわ。——そのつぎは、

とくだきちじ  
徳田吉次くん」

徳田吉次がいきをすいこんで、ちよつとまをおいたところを、

さつき、岡田磯吉のとき「いる」といった子が、少しいい気になつた顔つきで、すかさず、

「キツチン」

と、叫さけんだ。みんながまた笑いだしたことで相沢仁太あいざわたというそ

の子はますますいい気になり、つぎに呼んだ森岡正もりおかただしのときも、

「タンコ」とどなった。そして、じぶんの番になると、いつそう

大声で、

「ハイ」

先生は笑顔のなかで、少ししたしなめるように、

「相沢仁太くんは、少しおせっかいかいね。声も大きすぎるわ。こんどは、よばれた人が、ちゃんと返事してね。——川かわもとまつえ本松江さん」

「ハイ」

「あんたのこと、みんなはどういうの？」

「マツちゃん」

「そう、あんたのお父さん、大工だいくさん？」

松江はこつくりをした。

「西にしぐち口ミサ子さん」

「ハイ」

「ミキちゃんていうんでしょ」

彼女もまた、かぶりをふり、小さな声で、

「ミイさん、いうん」

「あら、ミイさんいうの。かわいらしいのね。——つぎは、かがわ香川

マスノさん」

「ハイ」

思わずふきだしそうになるのをこらえこらえ、先生はおさえた  
ような声で、

「ハイは、すこしおかしいわ。ハイっていいみましょうね、マスノ  
さん」

すると、おせつかいの仁太がまた口をいれた。

「マアちやんじや」

先生はもうそれを無視して、つぎつぎと名前を呼んだ。

きのしたふじこ

「木下富士子さん」

「ハイ」

やまいしきなえ

「山石早苗さん」

「ハイ」

返事のたびにその子の顔に微笑をおくりながら、

「加部小ツルさん」

急にみんながわいわいさわぎだした。何ごとかとおどろいた先生も、口ぐちにいつていることがわかると、香川マスノのヘイよ

りも、もつとおかしく、若い先生はどうとう笑いだしてしまった。みんなはいつているのだった。カベコツツル、カベコツツル、カベコツツル、壁かべに頭をかベコツツル。

かちき 勝気らしい加部小ツルは泣きもせず、しかし赤い顔をしてうつ

むいていた。そのさわぎもやつとおさまつて、おしまいの片桐かたぎり

コトエの出席をとつたときにはもう、四十五分の授業時間はたつてしまつていた。加部かべ小ツルがチリリンヤこし（腰にリンをつけて、

用足しをする便利屋べんりや）の娘むすめであり、木下きのした富士子ふじこが旧家きゆうかの子ども

であり、ヘイと返事をした香川かがわマスノが町の料理屋の娘であり、

ソッキの岡田おかだ磯吉いそきちの家が豆腐屋とうふやで、タンコの森岡もりおか正ただしが網あみも

とむすこ元もとの息子と、先生の心のメモにはその日のうちに書きこまれた。

それぞれの家業は豆腐屋とよばれ、米屋とよばれ、網屋とよばれ  
 てはいても、そのどの家もめいめいの商売だけでは暮しがたたず、  
 ひやくししょう  
 百姓もしていれば、片手間には漁師もやっている、そうい  
 う状態は大石先生の村と同じである。だれもかれも寸暇をお  
 しんで働かねば暮しのたたぬ村、だが、だれもかれも働くことを  
 いとわぬ人たちであることは、その顔を見ればわかる。

この、今日はじめて一つの数から教えこまれようとしている小  
 さな子どもが、学校から帰ればすぐに子守りになり、麦搗きを手  
 つだわされ、網曳きに行くというのだ。働くことしか目的がな  
 いようなこの寒村の子どもたちと、どのようにしてつながってゆ  
 くかを思うとき、一本松をながめて涙ぐんだ感傷は、恥ずか

しきでしか考えられない。今日はじめて 教壇きょうだんに立った大石先生の心に、今日はじめて集団生活につながった十二人の一年生の瞳ひとみは、それぞれの個性にかがやいてことさらに印象ぶかくうつつたのである。

この瞳を、どうしてにごしてよいものか！

その日、ペタルをふんで八キロの道を一本松の村へと帰ってゆく大石先生のはつらつとした姿は、朝よりもいっそうおてんばらしく、村人の目にうつつた。

「さよなら」

「さよなら」

「さよなら」

出あう人みんなにあいさつをしながら走つたが、返事をかえす人はすくなかった。時たまあつても、だまつてうなずくだけである。そのはずで、村ではもう大石先生批判ひはんの声があがっていたのだ。

——みんなのあだ名まで帳面につけこんだそうなの。

——西口屋のミイさんのことを、かわいらしいというたそうなの。

——もう、はやのこめから、ひいきしよる。西口屋じゃ、なんぞ持つていってお上じょうず手したんかもしれん。

なんにも知らぬ大石先生は、小柄こがらなからだをかるやかにのせて、村はずれの坂道にさしかかると、少し前ごみになって足に力をくわえ、このはりきつた思いを一刻も早く母に語ろうと、ペタル

をふみつづけた。歩けばたいして感じないほどのゆるやかな坂道は、往ゆきにはこころよくすべりこんだのだが、そのこころよさが帰りには重い荷物となる。そんなことさえ、帰りでよかつたでありがたがるほどすなおな気持であつた。

やがて平へい坦たんな道にさしかかると、朝がた出あつた生徒の一団も歸つてきた。

——大石 小石

——大石 小石

幾いくにん人もその声のたばが、自転車の速度につれ大きく聞こえてくる。なんのこともか、はじめは分からなかつた先生も、それがじぶんのことと分かると思わず声を出して笑つた。それがあだ名にな

つたと、さとつたからだ。わぎと、リリリリとベルを鳴らし、すれちがいながら、高い声でいった。

「さよならア」

わあつと喚かんせい声があがり、また、大石小石！ と呼びかける声が遠のいてゆく。

おなご先生のほかに、小石先生という名がその日生まれたのである。からだが小つぶなからでもあるだろう。新らしい自転車みさきに夕陽ゆうひがまぶしくうつり、きらきらさせながら小石先生の姿は岬の道を走っていった。

## 二 魔法の橋

とつばなまで四キロの細長い岬のまん中あたりにも小さな部落ぶらくがある。入り海にそつた白い道は、この小部落にさしかかるとともに、しぜんに岬を横ぎつて、やがて外海そとうみぞいに、海を見おろしながら小石先生の学校のある岬村へとのびている。この外海ぞいの道にさしかかる前後に、本校へかよう生徒たちと出あうのが、毎日のきまりのようになつていて、もしも、少しでも場所がちがうと、どちらかがあわてねばならぬ。

「わあ、小石先生きたぞう」

急に足ばやになるのはたいいてい生徒のほうだが、たまには先生のほうでも、入り海ぞいの道で行く手に生徒の姿を見つけ、あわ

ててペタルに力を入れることもある。そんなとき、生徒のほうの、よろこぶまいことか。顔をまっかにして走る先生にむかつて、はやしたてた。

「やあい、先生のくせに、おくれたぞオ」

「月給、ひくぞオ」

そして、わざと自転車の前に法度はつとする子どもさえあつた。そんなことがたびかさなると、その日家へ帰つたときの先生は、お母さんにこぼした。

「子どものくせに、月給ひくぞオだつて。勘かんじょう定じょうだかいのよ。  
いやんなる」

お母さんは笑いながら、

「そんなこと、おまえ、気にする馬鹿ばかがあるかいな。でもまあ、一年のしんぼうじゃ。しんぼう、しんぼう」

だが、そういつてなぐさめられるほど、苦痛は感じていなかった。なれてくると、朝はやく自転車をとばす八キロの道のりはあんがいたのしく、岬みさきを横よこぎるころにはスピードが出てきて、いつのまにか競きょうそう争そうをしていた。それがまた生徒の心へひびかぬはずがなく、負けずに足が早くなった。シーソーゲームのように押しつ押しされつ、一学期も終ったある日、用事で本校へ出むいていた男先生はみようなことをきいてかえった。この一学期間、岬の生徒は一度もちこくしないというのだ。片道五キロを歩いてかよう苦勞くろうはだれにもわかつていることで、昔から、岬の子どもの

ちこくだけは大目に見られていたのだが、逆に一度もちこくがな  
いとなると、これは当然ほめられねばならぬ。もちろん、一大事  
件としてほめられたのだ。男先生はそれを、じぶんの手柄てがらのよう  
に思つてよろこび、

「なんしろ、今年の生徒んなかには、たちのよいのがおるからな  
あ」

五年生のなかにたったひとり、本校の大ぜいのなかでも群ぐんをぬ  
いてできるよい女の子がいることで、岬みさきからかよっている三十人  
の男女生徒がちこくしなかつたようにいった。だがそれは、じつ  
は女先生の自転車のためだったのだ。しかし、女先生だとて、そ  
うとは気がつかなかつた。そして、たびたび、この岬の村の子ど

もらの勤きんべん勉さに感心し、いたずらぐらいはしんぼうすべきことだと思つた。そう思いながら、心の中ではじぶんの勤勉さをも、ひそかにほめてやつた。

——わたしだって、途とちゆう中でパンクしたときにちこくしただけだわ。わたしは八キロだもの——などと。そして窓の外に目をやり、じぶんをいつもはげましてくれるお母さんのことを思つた。おだやかな入り海はいかにも夏らしくぎらぎら光つて、母のいる一本松の村は白い夏雲の下にかすんで見えた。あけつぴろげの窓から、海風が流れこんできて、もうあと二日で夏休みになるよるこびが、からだじゆうにしみこむような気がした。だが、少し悲しいのは、なんとしても気をゆるさぬような村の人たちのことだ。

それを男先生にこぼすと、男先生は奥歯おくばのない口を大きくあけて笑い、

「そりやあ無理なちゆうもん注文ちゆうもんじゃ。あんたが、なんぼ熱心に家庭訪

問してもですな、洋服と自転車がじやましとりますワ。ちつとばかりまぶしくて、気がおけるんです。そんな村ですからな」

女先生はびっくりしてしまった。顔を赤らめ、うつむいて考えこんだ。

——着物きて、歩いてかよえというのかしら。往復四里（十六キロ）の道を……。

夏休み中にもなんだかそれについて考えたが、決心のつかぬうちに二学期がきた。暦こよみのうえでは九月といつても、永ながい休みのあ

とだけに暑さは暑さ以上にこたえ、女先生の小さなからだは少しやせて、顔色もよくなかった。その朝家を出かけるとき、先生のお母さんはいったのである。

「なんじやかんじやというても、三分の一は過すぎたでないか。しんぼう、しんぼう。もうちよつとのしんぼう」

手つだつて自転車を出してくれながら、なぐさめてくれた。しかし、先生でもお母さんの前では、ちよつとわがままをいつてみたくなることは、ふつうの人間と同じである。

「あーあ、しんぼ、しんぼか」

腹でも立てているように、さあつと自転車をとばした。しばらくぶりに風をきつて走るころよさが身にしみるようだったが、

今日きょうからまた、自転車でかようことを思うと気が重くなった。休み中みさきなんどか話がでて、岬みさきで部屋でも借りようかといつてもみたが、けつきよくは自転車をつづけることになったのである。自転車も、朝はよいけれど、焼けつくような、暑しよ熱ねつのてりかえす道を、背中に夕陽ゆうひをうけてもどつてくるときにつらさは、ときに呼吸いきもとまるかと思うこともある。岬の村は目の前なのに、日がない毎日馬鹿念をいれて、入り海をぐるりとまわつてかようことを考えると、くやしくてならない。しかも自転車は岬の人たちの気にいらぬというのだ。

あんちきしよ！

口に出してはいわぬが、目の前に横たわる岬みさきをにらまえると、

思わず足に力がいいる。めずらしく波のざわめく入り江の海を右にへだてて、岬に逆ぎやっこう行して走りながら、ああ、と思つた。今日は二百十日なのだ。そうと気がつくのと、なんとなくあらしをふくんだ風が、じゃけんに頬ほおをなぐり、潮しおつぽい香かおりをぞんぶんにただよわせている。岬の山のとつぺんがかすかにゆれ動いている。ようなのは、外海の波の荒さを思わせて、ちよつと不安にもなつた。途とちゆう中で自転車をおりねばならないかもしれぬからなのだ。そうなると自転車ほどじやまものはない。しかし、だからといって今おりるわけにはもうゆかないのだと考えながら、いつしか、空想は羽のある鳥のように飛びまわっていた。

…風よ凪なげ！ アリババのようにわたしが命令をくだすと、  
風はたちまち力をぬいて、海はうそのように静まりかえる。ま  
るで、いま眠ねむりからさめたばかりの湖みずうみのような静かさです。橋  
よかかれ！ さつとわたしが人さし指を前にのぼすと、海の上  
にはたちまち橋がかかる。りっぱな、虹にじのようにきれいな橋で  
す。わたしだけに見える、そして、わたしだけがとおれる橋な  
のです。わたしの自転車は、そつとその橋の上にさしかかりま  
す。わたしはゆつくりとペダルをふみます。あわてて海におち  
こむと大へんですから。こうして七色のそり橋をゆつくりと渡わた  
りました。いつもより四十五分も早く岬の村へつきました。  
さあ大へんです。わたしの姿を見た村の人たちは、いそいで時

計の針を四十五分ほどすすめるし、子どもたちときたら、見るも気のどくなほどあわてふためいて、食べかけの朝飯あさめしをのどにつめ、あとはろくに食べずに家をとびだしました。わたしが学校につくと、いま起きだしたばかりの男先生はおどろいて井戸ばたにかけつけ、手水ちようずをつかいはじめるし、年とつた奥さんは奥さんで、ねまきも着かえるまがなく七輪しちりんをやけにあおぎながら、片手で衿えりもとを合わせ合わせ、きまりわるそうなていさい笑いをし、そつと目もとや口もとをこすりました。目のわるい奥さんは、朝おきるといつも目やにがたまっているのです……

「ここだけはほんとのことなので、思わずくすつと笑ったとき、  
空想くうそうは霧きりのように消えてしまった。ゆく手から、風にみだされ  
ながらいつもの声こゑがきこえたのである。

「小石せんせえ」

ひと月ぶりの声をきくと、ぐつとからだに力がはいり、「はい」と答えたものの、風はその声をうしろのほうへもつていったようだ。思ったとおり、外海の側は大きく波が立ちさわいでいて、いかにも厄日やくびらしいさまを見せている。

「おそいのね、今日きょうは。四十五分ぐらいおくられているかもしれないわよ」

それをきくと、なつかしそうに立ちどまって、何か話しかけそ

うにした子どもたちは、本気にして走りだした。先生のほうも、風にさからつて、いつそう足に力をいれた。ときどき方向のきまらぬような舞まい舞い風がふいてきて、何度も自転車をおりねばならなくなったりした。まったく、四十五分ほどおくれそうだ。海べの村でも一本松はいつも岬みさきにまもられているかたちで、厄日にそとうみもたいしたことはないのにくらべると、細長い岬の村は、外海側の半分がいつも相当の害をうけるらしい。木々の小枝のちぎれてとびちった道を、自転車も難なんじゆう渋しぶしながら進んだ。押おして歩くほうが多かったかもしれぬ。こうして、ほんとうにずいぶんおくれて村にさしかかったのであったが、村中が一目で見えるところまできて、先生は思わず立ちどまって叫さけんだ。

「あらッ」

村のとつっきの小さな波止場はとばでは、波止場のすぐ入り口で漁船がてんぷくして、鯨くじらの背のような船底ふなぞこを見せているし、波止場にはいれなかったのか、道路の上にも幾いくせき隻かの船があげられていた。海から打ちあげられた砂利じやりで道はうずまり、とうてい自転車などとおれそうもないほど荒れているのだ。まるで、よその村へきたような変りかただった。海べりの家ではどこもみな、屋根やねがわらをはがされたらしく、屋根の上に人があがっていた。だれひとり先生にあいさつをするゆとりもないらしいなかを、先生もまた、道に打ちあげられた石をよけながら、自転車を押してやつと学校にたどりついた。門をはいってゆくと、どつと一年生が走

つてきて、とりまいた。そのどの顔にも、生き生きとした目の光があつた。それは、昨夜のあらしのおとずれを、よろこんででもいるように元気なのだ。うわずった声の調子で、口ぐちに話しかけようとするのを、少し出しやばりの香川マスノが、わたしが報ほ告うこくの役だともいうふうに、その声の高さでみんなをおさえ、「せんせ、ソンキのうち、ぺっちゃんこにつぶれたん。蟹かにをたたきつけたように」

マスノのうすいくちびるから出たことばにおどろき、だんだん大きく目をみひらいた先生は、顔色さえも少しかえて、

「まあ、ソンキさん、うちの人たち、けがしなかつたの？」

見まわすと、ソンキの岡田磯吉おかだいそきちは、びっくりしたのがまださ

めないようなようすで、こつくりをした。

「せんせ、わたしのうちは、井戸のはねつるべの棹さおがまつ二つに折れて、井戸ばたの水がめがわれたん」

やっぱりマスノがそういった。

「大へんだったのね。ほかのうち、どうだったの」

「よろずやの小父おじさんが、屋根のかこいをしよって、屋根から落ちたん」

「まあ」

「ミイさんここでさえ、雨戸をとばしたんで。なあミイさん  
気がつくと、マスノがひとりでしゃべっている。

「ほかの人どうしたの。なんでもなかったの？」

やまいしぎなえ  
山石早苗と目があうと、内気うちきな早苗はあかい顔をしてこつく

りした。マスノは先生のスカートをひっぱって、じぶんのほうへ  
注意をひき、

「せんせせんせ、それよりもまだ大騒動おおそうどうなんよ。米屋の竹一  
家は、ぬすつとにはいられたのに、なあ竹一。米一俵びょう、とられた  
んなあ」

同意をもとめられて竹一は、うんとうなずき、

「ゆだんしとつたんじや。こんな雨風あめかぜの日はだいじょうぶだ  
と思うたら、今朝けさんなって見てみたら、ちゃんと納屋なやの戸があいと  
つたん。ぬすつとの家まで、米つぶがこぼれとるかもしれん  
て、お父つあんがさがしたけど、こぼれとらなんだん」

「まあ、いろんなことがあったのね。——ちよつとまって、自転  
車おいてくるから、またあとでね」

いつものとおり職員室のほうへ歩いてゆきながら、ふつと、い  
つもとちがった明かるさを感じて立ちどまった先生は、そこでま  
たおどろかされてしまった。井戸の屋根がふつとんで、見おぼえ  
のトタン屋根のあたりが空くうはく白になり、そのあたりの空に白い雲  
がとんでいた。走りまわっていたらしいうしろはちまきの男先生  
が、いつもに似合わずあいそのよい顔で、

「やあ、おなご先生、どうです。ゆうべは、だいぶあばれました  
な」

たすきがけの奥さんも出てきて、頭の手ぬぐいをぬぎながら久

しぶりのあいさつをし、

「一本松が、折れましたな」

「え、ほんとですか」

先生はとびあがるほどおどろき、じぶんの村のほうに目をやった。一本松はいつものところにちゃんと立っているが、よくみると少しちがった姿をしている。たいした暴風ぼうふうでもなかったのに、年をへた老松ろうしょうは、枝をはったその幹みきの一部を風にうばわれたものらしい。それにしても、入り海をとりかこんだ村むらにとつて、大昔から何かにつけて目じるしにされてきた名物めいぶつの老松が難なんにあつたのを、地元なつとのじぶんが気づかずなにいたのが恥はずかしかつた。しかも今朝がたは、ごうまんにもいい気になって、一本松

の下から人さし指一本で魔法まほうの橋をかけ、波をしずめたのだ。村の時計を四十五分も進めさせることで、村中の人を大きわぎさせたのに、きてみればそれどころでない大きわぎなのだ。男先生はあわてて手ちようず水をつかつているどころでなく、はだしになって働いている。奥さんは七輪しちりんなどつくにすまして、きりりとしたたすきがけで働いていてはないか。

ああ、二学期第一日は出発からまちがっていた、と女先生はひそかに考えた。家を出るときのお母さんにたいしてのぶあいそを悔くいたのである。三時間目の唱歌しょうかのとき、女先生は思いついて、生徒をつれ、災難さいなんをうけた家へお見舞みまいにゆくことにした。いちばん学校に近い西口ミサ子の家へより、見舞いのことばをの

べた。なんといつても家がぺっちゃんこになつたソソキの家が被害の第一番だとみんながいうので、つぎには荒神様の上にあるソソキの家へむかつた。マスノが今朝いつた、蟹をたたきつけたようだというのを思いだし、それは大人の口まねだろうと思ひながら、へんに実感をともなつて想像された。だが家はもう近所の人たちの手だすけであらかた片づいていた。別棟の豆腐納屋のほうがあつたので、その土間にじかに畳をいれて、そこへ家財道具をはこんでいた。一家七人が今夜からそこに寝るのかと思つと、氣のどくさですぐにはことばも出ないでいるのを、手つだい人のなかから川本松江の父親が口をだし、大工らしいひょうきんさで、しかしいくぶんかの皮肉をまじえていつた。



「ね、みんなで、これから道路の砂利掃除じやりそうじをしようか」

「うん、うん」

「しよう、しよう」

子どもたちは大よろこびで、くもの子が散るようにかけだした。あらしのあとらしい、すがすがしさをともなつた暑すさにつつまれて、村は隅すみずみまではつきりと見えた。

「よいしょっと！」

「こいつめ！」

「こんちきイ」

めいめいの力におうじた石をかかえては、道路のはじから二メートルばかり下の浜へ落とすのである。二人がかりでやつと動く

ような大きな石ころもまじえて、まるで荒磯あらいそのように石だらけの道だった。今はもう、ただ静かにたたえているだけのような海の水が、昨夜はこの高い道路の石垣いしがきをのりこえて、こんな石まですで打ちあがるほどあれるつたのかと思うと、そのふしぎな自然の力におどろきあきれられるばかりだった。波は石をはこび、風は家をたおし、岬みさきの村はまったく大騒動の一夜であったのだ。同じ二百十日も、岬みさきの内と外ではこうもちがうのかと思ひながら、先生は抱えた石をどしんと浜になげ、すぐそばで、なれたしぐさで石をけとばしている三年生の男の子にきいた。

「時化しけのとき、いつもこんなふうになるの？」

「はい」

「そして、みんなで石掃除いしそうちするの？」

「はい」

ちようど、そこを香川マスノの母親がとおりかかり、

「まあま先生、ごくろうでござんすな。でも、今日はざつとにしたほうがよろしいですわ。どうせまた、うしろ七日や二百二十日がひかえとりますからな」

本村のほうで料理屋と宿屋をしているマスノの母は、わが子このいる岬へようすを見にきたということであつた。マスノがとんできて、母親の腰こしにかじりつき、

「お母さん、おそろしかつたんで、ゆうべ。うち、ごつげな音がして、おばあさんにかじりついて寝ねたん。朝おきたら、はねつる

べの棹さおが折れとつたんで。水がめがわれてしもたん」

今朝けさきいたことをマスノはくりかえして母に語っていた。ふんふんといちいちうなずいていたマスノの母親は、半分は先生にむかつて、

「岬じゃあ船がながされたり、屋根がつぶれたり、ごつそり壁かべが落ちて家の中が見とおしになった家もあると聞いたもんですからな、びっくりしてきたんですけど、つるべの棹さおぐらいでよかったですよかったです」

マスノの母親がいつてから、

「マアちゃん、ごつそり壁かべが落ちたつて、だれのうち？」

マスノはかかえていた石を、すてるのをわすれたように、得意とくい

の表情になつて、

「仁太<sup>にた</sup>んとこよ先生。壁が落ちて押入れ<sup>おしい</sup>ん中ずぶぬれになつてもたん。見にいったら、中がまる見えじゃつた。ばあやんが押入れ<sup>れん</sup>中でこないして天<sup>てん</sup>井<sup>じょう</sup>見よつた」

顔をしかめてばあやんのまねをしたので、先生は思わず吹きだしたのである。

「押入れが、まあ」

そういつたあとで、笑いはこみあげてきて、ころころと声に出ってしまった。なぜそんなに先生が笑いだすのか生徒たちにはわからなかつたが、マスノはひとり、じぶんが先生をよろこばしたよ  
うな気になつて、きげんのよい顔をした。みんなはいつかよろず

やのそばまでできていた。よろずやおかみさんはすごいけんまくを顔に出して走りよつてきて、先生の前に立った。肩かたでいきをしなから、すぐにはものもいえないようだ。きゆうに笑いを消した先生は、すぐおじぎをしなから、

「あら、失礼いたしました。しけで大へんでしたなあ。今日は石ころ掃除そうじのお手つだいをしていますの」

しかし、おかみさんはまるで聞こえないようなようです、

「おなご先生、あんたいま、なにがおかしいて笑うたんですか？」

「……………」

「人が災さい難なんに会あうたのが、そんなおかしいんですか。うちのお父さんは屋根から落ちましたが、それもおかしいでしょう。みんな

ごと大<sup>たい</sup>した怪我<sup>けが</sup>は、しませなんだけんど、大怪我でもしたら、な  
お、おかしいでしょう」

「すみません。そんなつもりはちつとも——」

「いいえ、そんならなんで人の災難を笑うたんです。おていさい  
に、道掃除<sup>みちそうじ</sup>などしてもらいますまい。とにかく、わたしの家の  
前はほつといてもらいます。——なんじゃ、じぶんの自転車が走  
れんからやってるんじゃないか、あほくさい。そんなら、じぶん  
だけでやりやあよい……」

あとのほうはひとり言<sup>ごと</sup>のようにつぶやきながら、びつくりして  
二<sup>に</sup>の句もつげないでいる先生をのこして、ぷりぷりしながら引き  
かえすと、となりの川本<sup>かわもと</sup>大工<sup>だいく</sup>のおかみさんに、わざとらしい大

声で話しかけた。

「あきれた人もあるもんじやな。ひとの災難を聞いて、けらけら笑う先生があろうか。ひとつ、ねじこんできた」

やがてそれは、また尾ひれがついて村中に伝わってゆくにちがいない。じつと突つ立つて、二分間ほど考えこんでいた先生は、心配しんぱいそうにとりまいている生徒たちに気がつくど、泣きなそうな顔で笑つて、しかし声だけは快活かいかつに、

「さ、もうやめましょう。小石先生しっぱいの巻だ。浜で、歌でもうたおうか」

くるつときびすをかえして先に立つた。その口もとは笑つているが、ぽろんと涙なみだをこぼしたのを、子どもたちが見のがすわけは

ない。

「先生が、泣きよる」

「よろずやのばあやんが、泣かしたんど」

そんなささやきがきこえて、あとはひっそりと、ぞうりの足音だけになった。ふりかえって、泣いてなんかいないよう、と笑ってみせようかと思つたとたん、また涙がこぼれそうになつたので、だまつた。このさい笑うのはよくないとも思つた。さつき笑つたのも、よろずやのおかみさんがいうように、人の災難を笑つたというよりも、ほんとうのところは、マスノの身ぶりがおかしく、それにつづいて、押入れおしいの連想れんそうは、一学期のある日の、仁太にたを思ひだして笑わせたのであつた。

「天皇陛下はどこにいらつしやいますか？」

ハイ ハイ と手があがったなかで、めずらしく仁太がさされ、  
「はい、仁太くん」

仁太はからだじゅうからしぼり出すような、れいの大声で、

「天皇陛下は、押入れの中におります」

あんまりきばつな答えに、先生は涙を出して笑った。先生だけ

でなく、ほかの生徒も笑ったのだ。笑いは教室きょうしつをゆるがし、

学校のそとまでひびいていったほどだった。東京、宮城みやぎ、な

どという声こゑがきこえても、仁太はがてんのゆかぬ顔かほをしていた。

「どうして、押入れおしいに天皇陛下てんのうへいかがいるの？」

笑いがやまってからきくと、仁太は少々自信じしんをなくした声で、

「学校の、押入れん中にかくしてあるんじゃないんかいや」

それでわかった。仁太がいうのは天皇陛下の写真だったのだ。

ほうあんてん  
奉安殿のなかつた学校では、天皇陛下の写真は押入れにかぎをかけてしまつてあつたのだ。

仁太の家の押入れの壁が落ちたことは、それを思い出させたのであつた。若い女先生は、思ひだすたびに笑わずにいられなかつたのであるが、そんな言いわけをよろずやおかみさんに聞いてもらえず、だまつて歩いた。涙がこぼれている今でさえ、その話はおかしい。しかしそのおかしさを、よろずやおかみさんのことばは、差し引きしてつりをとつたのである。浜にでて歌でも

うたわぬことには、先生も生徒も気持のやりばがなかった。浜におりると先生はすぐ、両手をタクトにして、歌いだした。

はるははよからかわべのあしに

「あわて床屋<sup>とこや</sup>」である。みんながとりまいて、ついて歌う。

かにが みせだし とこやでござる

チヨツキン チヨツキン チヨツキンナ

歌っているうちに、みんなの気持は、いつのまにか晴れてきて

いた。

うさぎやおこるし かにやはじよかくし

しかたなくなく あなへとにげる

おしまいまで歌っているうちに、失敗した蟹かにのあわてぶりが、じぶんたちの仲間ができたようなおもしろさで思いだされ、いつかまた、心から笑っている先生だった。「このみち」だの「ちんちん千鳥」だの、一学期中におぼえた歌をみんな歌い、「お山の大将」でひとやすみになると、生徒たちはてんでに走りまわり、おとなしく先生をとりまいてるのは一年生の五、六人だけだった

た。手入れなどめつたにしない乱れた髪かみの毛けを、うしろでだんごにしている女の子もいるし、いがぐりが耳の上までのびほうだいの男の子もあった。床屋とこやのない村では学校のバリカンがひどく役に立ち、それは男先生のうけもちだった。髪かみの毛けをだんごだんごにして、いる女の子のほうは、女先生が気をくばって、水銀軟膏すいぎんなんこうをぬりこんでやらねばならない。さつそく、明日あしたはそれをやろうと思いなながら先生は立ちあがり、

「さ、今日はこれでおしまい。帰りましょう」

はたはたとスカートスカートの膝ひざをはらい、一足うしろにさがったとたん、きやあつと悲鳴ひめいをあげてたおれた。落とし穴あなに落ちこんだのだ。いっしょに悲鳴ひめいをあげたもの、げらげら笑いながら近づいて

くるもの、手をたたいてよろこぶもの、おどろいて声をのんでい  
るもの、そのさわぎのなかから、先生はなかなか立ちあがろうと  
しなかった。横なりに、くの字にねたまま、砂の上に髪かみの毛けをじ  
かにくつつけている。笑ったものも、手をたたいたものも、だま  
りこんでしまった。異様いようなものを感じたのだ。つぶった両の目か  
ら涙なみだが流れているのを見ると、山石やまいしさなえ早苗が急に泣きだした。そ  
の泣き声にはげまされでもしたように「だいじょうぶ」といいな  
がらやつと半身をおこした先生は、そうつと穴の中の足を動かし、  
こわいものにさわるようなようすで、靴くつのボタンをはずし右の足  
くびにふれたと思うと、そのまままた横になってしまった。もう  
起きあがろうとはしない。やがて、目をつぶったまま、

「だれか、男先生、よんできて。おなご先生が足の骨折って、歩かれんて」

蜂の巣はちすをつついたような大きわぎになった。大きな子供たちがどたばたかけだしていったあとで、女の子はわあわあ泣きだした。まるで半鐘はんしようでも鳴りだしたように、村中の人がとびだして、みんなそこへかけつけてきた。まっさきに来た竹一の父親は、うつむいてねている女先生に近よって、砂の上にひぎをつき、

「どうしました、先生」

と、のぞきこんだ。しかし、先生は顔をしかめたまま、ものはいえないらしい。子どもたちからきかされて、足のけがだとわかると、少し安心したようすで、

「くじいたんでしよう。どれどれ」

足もとの方にまわり、靴をぬがせにかかると、先生は、うつと声を出してますます顔をしかめた。靴のあとをくつきりとつけて、先生の足くびは、二倍もの太さになったかと思うほどはれていた。血は出ていなかった。

「冷<sup>ひ</sup>やすと、よかろうがな」

もう大ぜい集まってきている人たちにいうと、徳田<sup>とくだきちじ</sup>吉次のお父つあなが、いそいでよごれた腰<sup>こし</sup>の手ぬぐいを潮<sup>しおみず</sup>水にぬらしてきた。

「いたいんですかい、ひどく？」

かけつけた男先生にきかれて、女先生はだまってうなずいた。

「歩けそうにないですかい？」

また、うなずいた。

「一ぺん、立ってみたら？」

だまつている。西口ミサコの家からミサ子の母親が、うどんこ  
と卵をねったはり薬ぐすりぬのを布にのばしてもつてきた。

「骨は、折れとらんとしますが、早く医者いしやにかかるか、もみり  
ようじしたほうがよろしいで」

「もみ医者なら中町の草加くさかがよかろう。骨つぎもするし」

「草加より、橋本外科はしもとげかのほうが、そりやあよかろう」

口ぐちにいろんなことをいったが、なにをどうするにも岬みさきの村  
では外科の医者も、もみりようじもなかった。たった一つはつき

りしていることは、どうしても先生は歩けないということだった。あれこれ相談のけつか、舟で中町までつれてゆくことになった。

漁師りようしの森岡正もりおかただしの家の舟で、加部小ツルのお父さんと竹一の

兄がこいでゆくことに話がきまった。男先生はついてゆくことになり、女先生をおんぶして舟にのつた。坐すわらせたり、おぶったり、ねかせたりするたびに、女先生のがまんした口から思わずうなり声が出た。

舟が渚なみぎさをはなれだすと、わあつと、女の子の泣き声がかたまつてとんできた。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

声をかぎりにさげぶものもいる。小石先生は身動きもできず、目をつぶったまま、だまつてその声におくられた。

「せんせえ」

声はしだいに遠ざかり、船は入り海のまん中に出た。朝、魔法まほうの橋をかけた海を、先生は今、痛さをこらえながら、かえつてゆく。

### 三 米五合豆一升

十日すぎても、半月たつても女先生は姿を見せなかつた。職員しよく室いんしつの外の壁かべにもたせてある自転車にほこりがたまり、子ども

もたちはそれをとりまいて、しよんぼりしていた。もう小石先生はこないのではないかと考えるものもあつた。本校がよいの生徒にしてもそうだ。先生の自転車がどれほど毎日のはげみになつていたか、めいめいが、長い道中どれほど小石先生の姿をまつていたか、小石先生にあわなくなつてから、そう思つた。村の人にしても同じだつた。だれがどうというのではなく、不当ふとうにつらくあつていたことを、ひそかに悔くいているようだつた。なぜなら、小石先生の評ひょう判はんがきゆうによくなつたのだ。

「あの先生ほど、はじめから子どもにうけた先生は、これまでになかつたらうな」

「早うなおつてもらわんと、こまる。みさき岬の子どもが、先生をちん

ばにして、てなことになると、こまるもん。あとへ来手がなかつたりすると、なおこまる」

「ちんばになんぞ、ならにやえいがなア。若い身空で、ちんばじや、なおつても、かようにこまるじやろな」

こんなふうになん先生の噂をした。どうしてももういちど岬の学校へきてもらいたい気持ちがふくまれていた。きてもらわないと、ほんとに困るのだ。直接に、もつとも困ったのは男先生だった。小さな村の小学校では、唱歌は一週一度だった。その一時間を、男先生はもてあましたのだ。女先生が休みだしてから、はじめのうちは、ならった歌を合唱させたり、じょうずらしい子どもに独唱させたりした。そうしてひと月ほどはすんだが、い

つまでもごまかすわけにもゆかず、そこで男先生はとうとうオルガンのけいこをはじめ、そのために汗あせを流した。先生は声をあげて歌うのである。

ヒヒヒフミミミ イイイムイ——

ドドドレミミミ ソソソラソ——と発音するところを、年よりの男先生はヒヒヒフミミミ——という。それは昔、男先生が小学校のときにならったものであった。

ミミミミフフフ ヒヒフミヒ——

唱歌<sup>しょうか</sup>は土曜日の三時間目ときまっている。うれしくたのしく

歌ってわかれて、日曜日をむかえるという寸法の時間割であったのが、子どもにとっても先生にとっても、きゆうにおもしろくない土曜日の三時間目になってしまった。男先生にとっては、なおのことである。木曜日ごろになると、もう男先生は土曜日の三時間目が気になりだし、そのために、きゆうに気短かになって、ちよつとのことで生徒にあたりちらした。わき見をしたといつては叱<sup>しか</sup>りつけ、わすれものをしてきた生徒をうしろに立たせた。

「男先生、このごろ、おこりばかりするようになったな」

「すかんようになったな。どうしたんじやろな」

子どもたちがふしぎがるそのわけを、一ばんよく知っている男先生の奥おくさんは、ひそかに心配して、それとなく男先生を助けようとした。金曜日の夜になると、奥さんは内職の麦稈ばつかん真田さなだをやめてオルガンのそばに立ち、先生をはげました。

「わたしが生徒になりますわ」

「うん、なつてくれ」

豆ランプが、ちろちろゆらぎながら、オルガンと、二人の年ふうふり夫婦の姿ををてらしているところは、もしも女の子がこれを見たら、ふるえあがりそうな光景こうけいである。やみと光りの交錯こうさくのなかで先生と奥さんは歌いかわしていた。

ヒヒヒフ ミミミ イイイムイ

奥さんだけが歌い、それにオルガンの調ちようし子があうまでにはだ  
いぶ夜もふけた。村はもう一軒いっけんのこらず寝ねしずまっていること  
で、かえって気がねでもしているように、奥さんは豆ランプを消  
してから足さぐりで部屋にもどりながら、ほうつとため息をし、  
ひそやかに話しかけた。

「おなご先生も、えらい苦勞くろうかけますな」

「うん。しかし、むこうにすりやあ、もつと苦勞じやろうて」

「そうですとも、あんたのオルガンどころじゃありませんわ。足  
一本折られたんですもん」

「もしかしたら、大石先生はもう、もどつてこんかもしれんぞ。

先生よりも、あの母親のほうが、えらいけんまくだったもんな。

かけがえのない娘むすめですさかい、二度とふたたび、そんな性しょうわるの

村へは、もうやりとうありません、いうてな」

「そうでしょうな。しかし、こられんならこられんで、代りかわの先

生がきてくれんと困りますな」

人にきかれたら困るとでもいうようにならないしよ声でいつて、うらめしそうに、ちらりと海のむこうを見た。一本松の村も静かにねむっているらしく、星くずのような遠い灯ひがかすかにまたたいている。こんな夜ふけに、こんな苦勞をしているのはじぶんたちだけだと思つと、女先生がうらめしかった。

あれ以来、奥<sup>おく</sup>さんもまたひと役かつて、四年生五人の裁縫<sup>さいほう</sup>をうけもつていたのだ。しかし、雑<sup>ぞうきん</sup>巾さしの裁縫はちつとも苦勞ではなかつた。まるで手まりでもかがるように、ていねいにさすのを、一時間のあいだ、かわるがわるにみてやればそれですむ。だが、唱<sup>しょうか</sup>歌だけは、なんとしてもオルガンがむつかしい。オルガンは、裁縫するようには手が動かないからだ。それを一生けんめい、ひきこなそうとする男先生の勉強ぶりは、奥さんにとって、神々<sup>こうごう</sup>しいようできえあつた。十月だというのに、男先生は、たらたら汗<sup>あせ</sup>を流していた。外へきこえるのをはばかり、教室の窓はいつもしめてあつたから、汗はよけい流れた。

先生ならばオルガンぐらいひけるのがあたりまえなのだが、な

にしろ、小学校を出たきり、努力ひとつで教師になった男先生としては、なによりもオルガンがにが手であった。田舎いなかのこととて、どこの学校にも音楽専任の先生はいなかった。どの先生もじぶんの受けもちの生徒に、体操も唱歌も教えねばならない。そんなこともいやで、じぶんからたのんで、こんなへんぴな岬みさきへきたのであったのに、今になってオルガンの前で汗を流すなど、オルガンをたたきつきたいほど腹はらが立った。

しかし、今夜はそうではなかった。奥さんひとりの生徒にしろ、ひき手と歌い手の調子が合うところまでいったのだ。そんなわけで、男先生のほうは、わりとごきげんだった。そこで奥さんにむかって、少し鼻をたかくした。

「おれだって、ひく気になればオルガンぐらい、すぐひけるんだよ」

奥さんもすなおにうなずいた。

「そうですとも、そうですとも」

大石先生が休みだしてから、明日は六回目ぐらいの唱歌の時間になる。男先生にとっては、明日の唱歌の時間がたのしみにさえなってきた。

「きつと生徒が、びっくりするぞ」

「そうですね。男先生もオルガンがひけると思っていて、見なおすでしょうね」

「そうだよ。ひとつ、しゃんとした歌を教えるのも必要だからな。



「ちんびきのいわは、おんもからずウ——」

「しっ、人がきいたら、気がいとおもう」

奥おくさんはびっくりして手をふった。

そして、いよいよあくる日、唱歌の時間がきても、生徒はのろ

のろと教室にはいった。どうせ、今日きょうもまた、オルガンなしに歌

わされるのだと思つて、はこぶ足もかくなかつたのだらう。小

石先生だと、土曜日の二時間目が終ると、そのままひとり教室に

のこつて、オルガンを鳴らしていたし、三時間目の板木ばんぎが鳴ると

ともに行進曲にかわり、みんなの足どりをひとりでに浮き立たせ

て、しぜんに教室へみちびいていた。どんなにそれがたのしかつ

たことか、みんな、心のどこかにそれを知っていた。口ではいえ

ない、それはうれしきであつた。だから、小石先生がこなくなつた今、口ではいえないものたりなさが、みんなの心のどつかにあつた。それを、気づくというほどでなく、みんなには気づいていたのだ。

「先生は聞き役しとるから、みんなすきな歌うたえ」

オルガンなど見向きもせず、男先生はそういうのだ。歌えといわれても、オルガンが鳴らぬと歌はすぐには出てこなかつた。出てきても調子つばずれだつたりする。

ところが、今日は少しちがう。教室にはいると男先生はもう、オルガンの前にちゃんと腰こしかけてまっていた。女先生とは少し調子がちがうが、ブブーと、おじぎのあいずも鳴つた。みんなの顔

に、おや？ といういろが見えた。二枚の黒板には、いつも女先生がしていたように、右側には楽譜がくふが、左側には今日ならう歌が立てがきに書かれていた。

ちびき  
千引の岩いわ

ちびき  
千引の岩いわは重おもからず

こっか  
国家こっかにつくす義ぎは重おもし

こと  
事ことあるその日ひ、敵てきあるその日ひ

ふりくる矢やだまのただ中なかを

おかしてすすみて国くにのため

つくせや男児だんじの本分ほんぶんを、赤心せきしんを

漢字には全部ふりがながうつてある。男先生はオルガンの前からきょうだん教壇きょうだんにきて、いつものじゆぎよう授業じゆぎようのときのようにな、ひつちく竹の棒ぼうの先で、一語一語を指さししめしながら、この歌の意味を説明しはじめた。まるでしゅうしん修身しゅうしんの時間のようだった。いくらくりかえして、この歌の深い意味をとき聞かしても、のみこめる子どもは幾いくにん人もいなかった。一年生がまっさきに、二年生がつづいて、がやがや がやがや。三年生と四年生の中にも、こそこそこそこそ ささやき声がおこった。と、とつぜん、ぴしっ！とひつちく竹が鳴った。教壇の上の机をはげしくたたいたのである。とたんに、ざわめきはやみ、鳩はとのような目がいつせいに男先生の

顔をみつめた。男先生はきびしく、しかし一種のやさしさをこめて、

「大石先生は、まだどうぶん学校へ出られんちゆうことだから、これから、男先生がしょうか唱歌もおしえる。よくおぼえるように」

そういったかと思うと、オルガンのほうへゆき、うつむきこんでしまった。まるでそれを恥ずかしがってでもいるようにみえた。しかもその姿勢しせいで男先生は歌いだしたのである。

「ヒヒヒフミミミ イイイムイ はいッ」

生徒たちはきゆうに笑いだしてしまった。ドレミハを、男先生は昔流に歌ったのである。しかし、いくら笑われても、今さらドレミハにして歌う自信が男先生にはなかった。そこでどうとう、

ヒフミヨイムナヒ（ドレミの音階おんかい）からはじめて、男先生流に教えた。そうなるとなつたで、生徒たちはすっかりよろこんだ。

——ミミミミフフフ　ヒヒミヒー　フーフフフヒミイ　イイイ  
イムイミ……

これでは、まるで気持ちが笑つたり怒つたりしているようだ。たちまちおぼえてしまつて、その日から大はやりになつてしまつた。だれひとり、その勇壮ゆうそう活発かつぱつな歌詞かしをうたつて男先生の意図いとに添そおうとするものはなく、イイイイ　ムイミーと歌うのだつた。

それからまた、何度目かの土曜日、やつぱり「千引の岩」をうたわされての帰り道であつた。一年生の香川かがわマスノは、ませた口

ぶりで、いつしよに歩いてた山石やまいしさをなえ早苗にささやいた。

「男先生の唱歌、ほんすかん。やっぱりおなご先生の歌のほうがすきじゃ」

そういつてからすぐ、女先生におそわったのを歌い出した。

やまの かーらーすウが もつてエキイたア——

早苗も、小ツルもいつしよにつづけてうたった。

あかい ちいさーな じょうぶくろ……

お昼きりの一年生の女の子ばかりがかたまっていた。

「おなご先生、いつんなつたら、くるんじやろなあ」

マスノの目が一本松のほうへむくと、それにさそわれてみんなの目が一本松の村へそそがれた。

「おなご先生の顔、見たいな」

そういつたのは小ツやんの加部かべ小ツルである。通りかかったソ

ンキの岡田磯吉おかだいそきちと、キツチンの徳田吉次とくだきちじが仲間にはいつてきて、

口まねで、

「おなご先生の顔、みたいな」

いつしか、それは実感になってしまったらしく、立ちどまっていつしよに一本松のほうを見た。

「おなご先生、入院しとるんど」

ソんキが聞いたことを聞いたとおりにいうと、小ツやんが横どりして、

「入院したのは、はじめのことじゃ。もう退院したんど。うちのお父つあん、昨日道で先生に会うたいよつたもん」

それで小ツルは、だれよりもさきに顔が見たいと思いついたらしい。チリリンヤの彼女の父親は、船と陸と両方の便利屋だった。昨日は大八車をひいて町までいったのである。すくなくも一日おきぐらいに、入り江をとりまく町や村をたのまれた用たしでぐるぐるまわってくるチリリンヤは、船や車にいろんな噂話もいっしよに積みこんでもどつてきた。大石先生のけががアキレス腱

がきれたということも、二、三か月はよく歩けまいということも、それらはみんな、腰こしに鈴すずをつけて歩きまわっているチリリンヤが聞いてきたものだった。

「そんなら、もうすぐに、先生くるかしらん。早うくるとええけんどな」

早苗さなえが目をかがやかすと、小ツルはまたそれを横どりして、

「こられるもんか。まだ足が立たんのに」

そして小ツルは、少し調子にのつて、

「おなご先生くん家へ、いってみるか、みんなで」

いっておいて、ぐるつと、ひとりひとりの顔を見まわした。竹た

けいけいちちも、タンコの森岡もりおか正ただしも、仁太にたもいつのまにか仲間入りし

ていた。しかし、だれひとり、すぐには小ツルの思いつきにさんせいするものはなかった。ただだまつて一本松の方を見ているのは、そこまでの距離きよりが、自分たちの計算では見当けんとうがつかなくかつたからだ。片道八キロ、大人のことばで二里おとなという道のりは、一年生の足の経験でははかりしれなかつた。とほうもない遠さであり、海の上からは一瞬いっしゆんで見わたす近さでもある。ただ氏神うじがみさまより遠いということは、少しこわかつた。彼らはまだ、だれひとり一本松まで歩いていったものがないのだ。その途中とちゆうにある本村の氏神さまへは、毎年まつりの祭に、歩いたり、船にのつたりしてゆくのだが、そこから先がどのくらいなのか、だれも知らない。たつたひとり仁太が、ついこないだ一本松より一つ先の町へいっ

たことがある。しかしそれは、氏神さまの下からバスにのって、一本松のそばを通つたというだけのことだつた。それでもみんなは、仁太をとりまいた。

「仁太、氏神さまから一本松まで、何時間ぐらいかかった？」  
すると仁太は、得意とくいになつて、あおばなをすすりもせず、

「氏神さまからなら、すぐじやつた。バスがな、ぶぶうつてラツパ鳴らしよつて、一本松のとこ突つ走つたもん。まんじゅう一つ食うてしまわんうちじやつたど」

「うそつけえ、まんじゅう一つなら、一分間でくえらア」

竹一がそういうと、川本松江が西口ミサ子に、「なあ」と同意をもとめながら、

「なんぼバスが早うても、一分間のはずがないわ、なア」

みんなの反対にあうと、仁太はむきになり、

「そやってぼく、氏神さまのところで食いかけたまんじゅうが、バスをおりてもまだ、ちやんと手に持つとったもん」

「ほんまか？」

「ほんまじゃ」

「ゆびきりじや、こい」

「よし、ゆびきりするがい」

それで、みんなは安心をした。仁太にたが生まれてはじめてのつたバスのめずらしさに、まんじゅうを食べるのも忘れて、運転手の手もとを見ていたなど、だれも考えなかった。ただ、ともかくも

仁太だけがバスにのったことと、一本松のまだつぎの町でおりるまで、まんじゅう一つを食べるまがなかつたことと、この二つからわりだして、うじがみ氏神さまから一本松までの遠さを、たいしたことではないと思つた。たとえ自転車にのつてとはいえ、女先生は毎日、あんなに朝早く、一本松からかよつていたではないか。と、そんなことも遠さとしてより、近さとしてみんなの頭に浮うかんだらしい。そんな気持の動いているときに、たいがん対岸の海ぞい道にバスが走っているのが見えたからたまらない。小さく小さくみえるバスは、まったく、あつというほどのまに走つて林の中へ姿を消した。

「ああ、行きた！」

マスノがとんきように叫んだ。なんとということなく男の子にさえ力をもっているマスノの一声である。

「いこうや」

「うん、いこう」

正と竹一がさんせいした。

「いこう、いこう。走って行って、走ってもどろ」

「そうじゃ、そうじゃ」

小ツルと松江まつえがとびとびして勇みたった。だまっているのは早苗なえと、片桐かたぎりコトエだけである。早苗はもちまへの無口からであったが、コトエのほうは複雑ふくざつな顔をしていた。家のことを思いだしていたのであろう。

「コトやん、いかんの？」

小ツルがとがめだてるようにいうと、コトやんはますます不安な表情になり、

「祖母おぼんに、問うてから」

その小さな声には自信がなかった。一年生のコトエをかしらに五人きようだいの彼女は、背中にいつも子どもものいないことがなかつた。数え年かぞ五つぐらいから彼女は子守り役を引きうけさせられていたのだ。家へ帰つて相談そうだんすれば、とてもゆるされる見こみはなかつた。そしてまた、それは早苗や松江や小ツルも同じであつた。みんな、しゅんとして顔を見あつた。数え年十歳さいになるまでは遊んでもよいというのが、昔からの子どもおきての掟おきてのようにな

っていたが、遊ぶといつても、それはほんとうに自由に遊ぶのではなく、いつも弟や妹をつれたり、赤ん坊をおんぶしてのうえでのことだった。ほんとに、すき勝手に遊んでよいのはひとりっ子のマスノとミサ子だけだ。

コトエの一言はみんなにそれを思いださせたが、しかし、思いとどまることはできない空気だった。

「めし食べたなら、そうつとぬけだしてこうや」

小ツルが、乗りかかった船だともいうように、みんなをけしかけた。

「そうじゃ、みんなうちの人にいうたら、行かしてくれんかもしれん。だまっていこうや」

竹一が知恵をめぐらしてそう決断した。こうなるともう、だれひとり反対するものはなく、秘密で出かけることがかえってみんなをうきうきさせた。

「そうつとぬけだしてな、波止の上ぐらいからいっしょになろう」  
正がそういうと、総帥格のマスノはいっそうこまかく頭をつ

かい、

「波止の上は、よろずやのばあやんに見つかるとうるさいから、藪のところぐらいにしようや」

「それがえい。みんな、畑の道とおつてぬけていこう」  
めいめい、きゆうにいそがしくなった。

「ほんまに、走って行って、走ってもどらんかな」

念をおしたのはコトエである。みんなが走って帰ってゆくあとから、コトエは考え考え歩いた。どう考えても、だまってぬけだす工夫くふうはないように思えた。じぶんだけはやめようか。しかしそれはできない。そんなことをしたら、明日からだれも遊んでくれないかもしれぬと思った。のけものになるのはいやだ。だまってぬけさせたとしても、あとでおばんやお母さんに叱しかられるのもいやだ。

赤んぼなんぞ、なければよかった。

そう思うと、いつもはかわいい赤ん坊のタケシの顔がにくらしくなり、一日ぐらい、ほったらかしたくなつた。彼女の足はきゆうにあともどりをし、畑のほうへ歩いていった。藪やぶが見えだすと

走った。だれかに見つかりそうで、どきどきした。

二時間後のことである。子どもについてまっさきに心配しだしたのはコトエのおばんであった。

「腹もへろうのに、なにこそしよるやら」

はじめはひとり言をい<sup>こと</sup>った。もどればタケシをコトエの背中にくくりつけておいて、おばんは畑へ二番ささげをつみにゆく手はずになっているのに、コトエは帰らないのだ。学校へ見<sup>ゆわ</sup>にいったところで、今ごろいるはずもないと思い、赤ん坊と結<sup>ゆわ</sup>いひもをもつて、いちばん仲よしの早苗のところへのぞきにいった。てつきりそこで遊びほうけていると思つたのだ。

「こんにちは。うちのコトは、きとらんかいの？」

もちろんいるわけがない。それどころか早苗もまだ帰らないというのだ。かえりに荒こうじん神さまをのぞいてみたが、杉の木かげに遊んでいたのはコトエより少し大きい子や、小さい子ばかりだった。だれにともなく大声で、

「おまえら、うちのコト、知らんかいの？」

「しらんで」

「一ぺんも、今日は見んで」

「早苗さん家くとちがうか」

いろんな返事が矢つぎ早にとんできた。それはみな腹の立つ返事ばかりだった。

「しよのないやつじや、ほんまに。見つけたら、すぐもどれいよつたと、いうておくれ」

おぼんは、ひよいと投げるようにして赤ん坊を背中にやり、まだわかりもしない赤ん坊に話しかけた。

「姉ねえやんは、どこへうせやがったんじやろな。コトのやつめ、もどつてきたら、どやしつけてやらんならん」

しかし、昼ひるめし飯もまだなのを思うと、少し心配になった。心配しいしい土間どまでぞうりを作っていると、川本大工だいくのおかみさんが、気ぜわしそうな足どりでやってきた。

「こんちは、えいお天気で。うちのマツを見にきたんじやけんど、見えんなあ」

それを聞くと、コトエのおばんはぞうり作りの手をおいて、

「マツちゃんもかいな。昼飯も食べんと、どこをほつつき歩きよんのかしらん」

「うちのマツは昼飯はたべにもどったがいな。箸はしおいて、用ありげに立って行って、すぐもどるかと思や、もどってきやせん」

コトエのおばんはきゆうに心配になってきた。もうぞうりどころでなかった。大工のおかみさんが、さがしてくるといつて帰ったあとも、心配はだんだんひろがってくるばかりだった。出たり入ったり、立ったり坐すわったり、おちつかなかった。

——無理もない。あそびたいさかりじゃもん。毎日子守りばかりじゃあ、謀反むほんもおこしたかろう……

ほとんど涙なみだが落ちた。その涙でかすんだ目に、小さいときから子守りばかりさせたためか、出ちりつ尻ちりになつてしまつた幼いコトエのかわいそうな姿が浮かんできて消えなかつた。

——それにしても、どこで、なにをしているのかしらん。今日きょうは若いもんまでがおそいなあ……

外あきに出て沖あきをながめた。鱒あじり漁ように出ているコトエの両親たちの帰りまでが、今日はとくべつおそいように、おぼんには思えた。

「まだ、もどつてこんかえ」

大工のおかみさんの三度目の声がかかるまでに、小ツルの姉と、早苗の弟と、富士子の母親とが、めいめいの家の娘をあんじてみ  
にきた。まもなく一年生の全部がいないとわかり、やがて本校帰

りの生徒のひとり、八幡堂という文房具屋ぶんぼうぐのそばでみんなを見かけたというのをきいて、やっと心配は半分になった。それだけに噂うわさは村中にひろがり、てんでにかつてなことをいいあつた。

「芝居しばいがきたというから、行つたんじやないかな」

「銭ぜにもないのに、どうして」

「のぼりやかんばんでも、口あけて見よるかもしれん」

「子どもつちや、ものずきなことやの」

一年生の家の者も今は半分笑顔で話しあつた。

「いんま、腹へらして、足に豆こしらえて、もどつてくるわいの」

「どんな顔して、もどつてくるかしらん。阿呆あほうくらいが」

「もどつたら、おこつたもんかいの、おこらんほうがよかろうか」

「ほめるわけにや、いくまいがのう」

こんなのんきそうなことがいえたのも、ソんキの兄や、仁太や富士子の父親たちが迎<sup>むか</sup>えに出むいた安心からであった。それにしても、だれひとり大石先生を思いださなかつたとは、なんとしたうかつさだつたろう。

三人の出迎え人は、本村にさしかかると、これはと思う人に行きあうたびにたずねた。

「ちよつとおたずねですがな、お昼すぎごろに、七八つぐら<sup>な</sup>いの子どもらが十人ほど通つたのを、見ませなんだかいな」

同じことを何ぶんくりかえしたろう。

そこで、子どもたちはどうしていたろう。

藪やぶの上へまっさきについたのは、いうまでもなくコトエだった。コトエはそこで、草むらに学校の包つつみをかくして、みんなをまつた。吉次とソンキが先をあらそうように走ってきた。つづいて竹一と正と。いちばんおくれたきたのは富士子と仁太であった。仁太は用心ぶかく、シャツやズボンの四つのポケットを、そら豆の煎いったのでふくらましていた。家にあっただけみんな持ってきたのだという。それを気前よくみんなに少しずつ分けてやりながら、いちばんうれしそうな顔をしていた。ぽりぽりいり豆をかみながら一いっ行こうは出発した。

「おなご先生、びっくりすると」

「おう、よろこぶど」

コトエひとりとは先頭に立ってみんなをふりかえった。走って行って走って帰るはずなのに、だれもかれものんびりと歩いていると思った。行けばわかるのに、みんな口ぐちに女先生のことばかりいっている。

「おなご先生、ちんばひいて歩くんど」

「おなご先生の足、まだ痛いんかしらん」

「そりや痛いから、ちんばひくんじやないか」

するとソンキは、ちよこちよこと前にすすみ、

「な、みんな。アキレスはここじやど。この太い筋が、切れたんど」

じぶんのアキレス腱けんのあたりをさすってみせ、

「こんなところがきれたんじやもん、痛うのうて」

ようやくみんなの足は早くなつていった。子どもたちだけでこの道を歩くのは、はじめてだった。山ひだを一つすぎることらしい眺めなががあらわれて、あきなかつた。岬みさきを横ぎり、入り海ぞいの道にかかると、一本松の村はななめうしろに遠のく。それだけ近くなつているのが、うそのような気がして心細くなつたが、だれも口には出さない。やがて、はるかかなたに本校がえりの生徒のかたまりがみえた。みんな、はつとして顔を見あわせた。

「かくれ、かくれ。大いそぎで」

マスノの一声は、あとの十一人を猿さるのようにすばしこくさせ、

萱<sup>かやま</sup>山の中へ走りこませた。がさがさと音がして萱がゆれた。

「じつとして！ 音さしたらいかん」

マスノがうすいくちびるをそらして、少しつった切れ長の目にものをいわせると、竹一や正までが声もからだもひそめてしまった。みんなの背の倍もありそうな笹<sup>ささ</sup>萱<sup>がや</sup>の山は、十二人の子どもをかくしてさやさやと鳴った。しかし気づかれずに大きな生徒たちをやりすごせたのは、じつにマスノの機<sup>きてん</sup>転であつた。彼女にらまれると、みんなは猫<sup>ねこ</sup>のようにおとなしくなるのだ。

<sup>みさき</sup>

岬の道を出て、いよいよ本村にはいるころから、みんなはしぜんと小声にしゃべっていた。一本松の村までには幾<sup>いく</sup>つかの町や村の、たくさんの部<sup>ぶ</sup>落<sup>らく</sup>があつた。大小のその村むらをすぎては迎<sup>むか</sup>え、

すぎてはまた迎え、あきるほどそれをくりかえしても、一本松はなかなかこなかった。岬の村からみれば、あんなに近かった一本松、目の前に見えていた一本松、それが今は姿さえも見せない。

八キロ、大人のいう二里の遠さを足の裏から感じだして、だんだんだまりこんでいった。行きあう人の顔も、見おぼえがなかった。まるで遠い国へきたような心細さが、みんなの胸の中にだんだん、おもし重石のようにしずんでいく。

もう一つ、はなをまわれば一本松は目の前にながめられることを、だれもしらないのだ。きいてもらちのあかぬ仁太にきくことも、もうあきらめてしまつて、ただ前へ前へとひと足でも進むよりほかなかつた。竹一とミサ子はまつさきにぞうりをきらし、き

れぬ片方をミサ子にやって、竹一ははだしになつていた。吉次も正もあやしかつた。だれも一いっせん銭ももつていないのだ。ぞうりは買えるわけがない。はだしで帰らねばならないだろうことは、歩いてきた道の遠さと考えあわせて、ぞうりのきれかけたものの気持はよけいみじめだつた。

とつぜん、コトエが泣きだしてしまつた。昼めしぬきの彼女は、つかれかたもまたはやかつたろうし、がまんできなくなつたのだらう。道ばたにしゃがんで、ええん ええん と声を出して泣いた。すると、ミサ子と富士子がさそわれて、しくしくやりだした。みんなは立ちどまつて、ぽかんとした顔で泣いている三人を見ていた。じぶんたちも泣きたいほどなのだ。元気づけてやることば

など、出てこなかった。きびすをかえせばよいのだ。もう帰ろうや、と、だれかがいえばよいのだ。しかしだれも、それさえいいだす力がなかった。マスノや小ツルさえ、こんわく困惑の色を浮かべていた。彼女たちにしても、泣きだしたかったのだ。しかし泣けなかった。いつそ、みんなで泣き出せば、どこからか救いの手がのべられるだろうが、それにも気がつかなかった。

初秋の空は晴れわたって、午後の陽ひざしはこの幼おさない一いち団だんを、白くかわいた道のまん中に、異様さをみせてうしろから照てらしていた。家へ帰りたいた気持はしぜんにあらわれて、知らず知らず歩いてきた道のほうを向いて立っていたのである。その前方から、けいてき警笛とともに、銀色の乗のり合あいバスが走ってきた。瞬しゅん間、十

二人は一つの気持にむすばれ、せまい道ばたの草むらの中に一列によけてバスを迎えた。<sup>むか</sup>コトエさえももう泣いてはいず、一心にバスを見まもっていた。もうもうと、<sup>けむり</sup>煙のように白い砂ぼこりをたてて、バスは目の前を通りすぎようとした。と、その窓から、思いがけぬ顔がみえ、

「あら、あら！」

といったと思うと、バスは走りぬけた。大石先生なのだ。

わあッ！

思わず道へとびだすと、<sup>かんせい</sup>歓声をあげながらバスのあとを追って走った。新しい力がどこからわいたのか、みんなの足は早かった。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

とちゆう

途中でバスがとまり、女先生をおろすとまた走っていった。

まつばづえ

松葉杖によりかかって、みんなをまつていた先生は、そばまでくるのをまたずに、大きな声でいった。

「どうしたの、いったい」

走りよつてその手にすがりつきもならず、なつかしさと、一種のおそろしさに、そばまでゆけず立ちどまったものもあつた。

「先生の、顔みにきたん。遠かつたあ」

仁太が口火をきつたので、それでみんなも口ぐちにいいだした。

「みんなでやくそくして、だまつてきたん、なあ」

「一本松が、なかなか来んのので、コトやんが泣きだしたところじやった」

「せんせ、一本松、どこ？ まだまだ？」

「足まだ痛いん？」

笑っている先生の頬ほおなみだを涙がとめどなく流れていた。なんのことはない、一本松も先生の家も、すぐそこだとわかると、またかんせ歓声いがあがった。

「ほたつて、一本松、なかなかじやったもんなあ」

「もう去いのうかと思たぐらい遠かったな」

松葉杖をとりまいて歩きながら先生の家へゆくと、先生のお母さんもすっかりおどろいて、きゆうにてんてこまいになった。か

まどの下をたきつけるやら、何度も外に走りだすやら、そうして  
一時間ほど先生の家にいただろうか。そのあいだにキツネうど  
んをごちそうになり、おかわりまでするものもいた。先生はよろ  
こんで、記念の写きねん真をとろうといい、近きんじよ所の写真屋さんをたの  
んで、一本松まで出かけた。

「もつと、みんなの顔みていたいけど、もうすぐ日がくれるから  
ね。うちの人、心配してるわよ」

帰りたがらぬ子どもらをなだめて、やっと船にのせたのは四時  
を過ぎていた。短かい秋の日はかたむいて、岬みさきの村は、何ごとも  
なかったかのように、夕ぐれの色の中に包まれようとしていた。

「さよならア」

「さよならア」

松葉杖で浜に立つて見おくつてゐる先生に、船の上からはたえまなく声がかかった。

三人の大人たちが町から村をさがしまわつてゐるとき、十二人の子どもは、思いがけぬ道を通つて村へもどつた。

わあい！

やあい！

時ならぬ沖おきあい合あひからの叫さけびに、岬みさきの村の人たちは、どぎもをぬかれたのである。叱しかつてはみても、けつきよくは大笑いになつて、大石先生の人気はあがつた。

その翌々日、チリリンヤの大八車には、めずらしい荷物が積み

こまれた。あんまりこまかいので、チリリンヤはそれをリンゴの空箱あきぼこにまとめて村を出ていった。道みち、いろんな用たしをしなから一本松までくると、リンゴの箱をそのままかついで歩きだした。腰こしの鈴すずがリリンリリンと、足をかわすごとに鳴りつづけ、やがて、リツと鳴りやんだのが、大石先生の家えんさきの縁先である。チリリンヤのリンの音は、どこかから、なにかが届けられるときのあいさつである。いいわけは、あまり必要でなかった。

「はい。米五合の豆しょう一升。こいつは軽いぞ煮干にぼしかな。ほい、もう一つ米一升の豆五合——」

小さな袋ふくろを幾いくつもとりだして縁側えんがわの板の間に積みかさねた。袋ふくろには名前が書いてある。それはみな、義理ぎりがたい岬の村から、

大石先生への見舞いみまの米や豆だった。

#### 四 わかれ

写真ができてきた。一本松を背景にして、松葉杖まつばづえによりかか  
った先生を十二人の子どもたちが、立ったり、しゃがんだりして  
とりまいている。磯吉、竹一、松江、ミサ子、マスノ、順々に見  
ていって仁太にたのところへくると、思わずふきだした。あんまり仁  
太がきばりすぎているからだった。つめている呼吸こきゅうが、いまにも、  
うううともれて、うなりだしそうにかたくなっている。気をつけ  
のその姿勢しせいは、だれが見たって笑わずにいられるものではなかつ

た。マスノとミサ子のほかは、生まれてはじめて写真をとったということで、だいたい、みんなかたくなっている。そのなかで仁太と吉次はとくべつであった。仁太とは反対に、身をすくめ、顔をそむけ、おまけに目をつぶっている吉次は、ふだんの小気さをそのまま映<sup>うつ</sup>しだされているようで、かわいそうにさえ思えた。

かわいそうにキツチン、こわかったんだらう、写真機の中から、なにがとびだすかと思っただらう……

ひとり写真をながめて笑っているところへ、本校の校長先生がきた。その声をきくと、こんどは大石先生のほうが、思わず気をつけのようになつて玄<sup>げん</sup>関<sup>かん</sup>に出ていった。松葉杖ははなれていたが、まだまだびつこの歩きぶりを見ると、校長先生はちよつと眉<sup>まゆ</sup>

をよせ、気のどくがった顔で見ている。

「ひどい目にありましたな」

「はあ、でも、ずいぶんよくなりました」

「いたいですか、まだ？」

返事にこまって答えられないでいると、校長先生がさいそくにくきたとも思ったらしく、お母さんがかわって答えた。

「いつまでもごめいわくをかけまして、すみません。もうずいぶんらしくなったようですけど、なんしろ、自転車にのれないものですから、いつまでもぐずぐずしておりました、はい」

しかし校長先生のほうはそんなつもりではなく、見舞みまいがたら吉報きつぽうをもってきたのであった。友人の娘むすめである大石先生のこと

も、今日きょうは名前なまえでよんで、

「久子さんきゆうさんも片足犠牲ぎせいにしたんだから、岬みさき勤きんめはもうよいでしよう。本校ほんこうへもどつてもらもらうことにしたんじやがな、その足じやあ、本校ほんこうへもまだ出でられられんでしような」

お母おぼさんはきゆうきゆうに涙なみだぐんで、

「それは、まあ」

といったぎり、しばらくあとが出でななかつた。思おもいがけない喜びであり、きゆうきゆうには礼れいのことばも出でてここななかつたのだ。それをごまかましでもするするように、さつきから、やっぱりだだままつてついる娘むすめの大石先生おおいしせんせいに気きがつくと、

「久子、久子、なんです。ぼんやりして。お礼おれいをいいなさいよ」

しかし、大石先生としては、せつかくのこの校長先生のはからいが、あんまりうれしくなかったのだ。これがもし、半年前のことならば、とびとびして喜んだろうが、今ではもう、そうかたんに、いかなない事情が生まれてきていた。だから、口について出たことばは、お礼ではなかった。

「あとう、もうそのこと、きまつたんでしようか。後任こうにんの先生のことも」

まるでそれは、とんでもないといわぬばかりの口調くちようである。

「きまりました。きのうの職員会議で。いけませんかい」

「いけないなんて、それは、そんなことけんりいう権利ありませんけど、でもわたし、やっぱりこまったわ」

そこにお母さんでもいたら、大石先生は叱りつけられたかもしれぬ。しかしお母さんは、茶菓子ちやがしでも買いにいったらしく、出ていったあとだった。校長先生はにこにこ笑って、

「なにが困るんですか？」

「あの、生徒と約束やくそくしたんです。また岬へもどるって」

「こりやおどろいた。しかし、どうしてかよいますかね。お母さんのお話だと、とうぶん自転車にもものれんということだったので、そうはからったんですがね」

もう、いいようがなかった。すると、岬の村がいつそうなつかしくなり、思わず未練みれんがましくいった。

「後任の先生は、どなたでしょう」

「後藤先生です」

「あら！」

お気のどくといいいそうになってあわててやめた。後藤先生こそ、  
どうしてかようだろうとあんじられたのだ。もうすぐ四十で、し  
かも晩婚ばんこんの後藤先生には乳呑ちのみ子ごがあつた。じぶんよりは少し  
岬みさきへ近い村の人とはいえ、一里半（六キロ）はあるであろう岬へ、  
寒さにむかつてどうしてかようだろうかと思うと、その気のどく  
さと、じぶんの心残りとがごつちやになって、急に眉まゆをあげた。  
「では、校長先生、こうしていただけませんでしょうか。わたし  
の足がすっかりなおりましたら、いつでも代りますから。それま  
で後藤先生にお願いすることにして……」

いかにもよい思いつきだと思つたのだが、校長先生の返事は思  
いがけなかつた。

「義理ぎりがたいこというなあ、久子さん。あんたがそないに気をつ  
かわんでも、ちようどよかつたんだから。後藤先生は、すすんで  
岬を希望したんだから」

「あら、どうしてですの？」

「いろいろ、あつてね。老朽ろうきゆうで来年はやめてもらう番になつ

ていたところを、岬へいけば、三年ぐらいのびるからね。そうい  
つたら、よろこんで、承知しょうちしましたよ」

「まあ、老朽！」

三十八や九で老朽とは？　まだ乳呑ちのみ子ごをかかえている女が老

朽とは。あきれたような顔をしてことばをきつた大石先生を、いつのまにか外から帰つてきたお母さんは、くだものなど盛もつた盆ぼんをさし出しながら、娘むすめのぶえんりよさに気が気でなく、

「久子、なんですか、せつかくの校長先生のご好意に、ろくろくお礼もいわないで。だまつてきいてりや、さつきからおまえ、へソ曲りなことばっかりいうて……」

そして校長先生の前に手をつき、

「どうもほんとに、わたしが行きとどきませんでな。つい、ひとりっ子であまえさせたらしく、失礼なことばっかり申しまして。

これでも、学校のことだけはあなた、寝てもさめても考えとりますふうで、早く出たい出たいと申しとりましたんです。おかげさ

まで、本校のほうにかわらしていただけたから、もう十日もしたら、バスにのつて、かよえると思います。こんな、気ままものですけど、どうぞもう、よろしゅうお願いいたします」

娘にいわせたいことを、ひとりでならべたてて、何度もぺこぺこ頭をさげた。そして、それとなく目顔であいずをしたが、大石先生はそしらぬ顔で、まだ後藤先生にこだわっていた。

「それで、もう後藤先生は、岬へかよつてるんでしょうか？」

校長先生もまた、この少しふうがわりの、あまのじやくみみたいな娘を相手にして、おもしろがつているようすで、

「そいつは、まだですがね。なんならもう一度職員会議をひらいて取り消してもよろしい。後藤先生は、がっかりするでしょうが

なあ」

お母さんひとり、気をもみつづけ、はらはらしていた。そのお母さんにむかつて、校長先生は、

「大石くんに、似たところがありますな。一徹居士いってつこじなどところ。なにしろ彼は、小学生でストライキをやったんだから、前代未聞ぜんだいみもんですよ」

あつはつはと笑った。その話は、まえにも聞いたことがあった。なんでも、小学校四年生の父が、受けもちの先生に誤解ごかいされたことをおこつて、級友をそそのかして一日ストをやったというのだ。同級生だった校長先生も、同情どうじょうして、みんなでいっしょに村役場へ押しかけていって、先生をとりかえてくれといったのだと

いう。今年の春、就職しゅうしょくをたのみにいったとき、はじめて父の少年時代のことをきいて、母と子はいっしょに笑ったのである。ただ思い出話として笑って語られる父のことが、今の大石先生には、ふしぎと、まじめにひびいた。

校長先生が帰ったあとも、ひとりで考えこんでいる大石先生を、お母さんはいたわるように、

「でもまあ、よかったではないか、久子」

しかし大石先生はだまっていた。そして晩ばんの御飯もいつもよりたべなかつた。夜おそくまで考えつづけたあげく、やっとお母さんにいった。

「よかったのかもしれないわ。わたしにも、後藤先生にも」

それは「よかつたでないか、久子」といわれてから四時間もあとのことであつた。お母さんはほつとした顔で、

「そうとも、そうともお前、万事都合よくいつたというものよ、ばんじつごう

久子」

すると先生はまた、ややしばらく考えてから、はつきりいった。

「そんなこと、ぜつたいたいにないわ。万事都合なんかよくなならない。

すくなくも後藤先生のためにはよ。だつて、老ろうきゆう朽なんて、失

礼よ」

この娘は気が立っているのだというふうに、お母さんはもうそれにさからおうとはしないで、やさしくいった。

「とにかく、もう寝ようでないの。だいぶふけたようじゃ」

その翌朝、思いたつた大石先生は、岬の村へ船で出かけた。船頭は小ツルの父親とおなじく、渡し舟をしたり、車をひいたりするのが渡世の、一本松の村のチリリンヤであつた。十月末の風のない朝だ。空も海も青々として、ひきしまるような海の空気は、両袖で思わず胸をだくほどのひやつこさである。

「おお寒ぶ。もう袷じやのう、おっさん」

「なに、陽があがりや、そうでもない。今が、いちばんえい季節じや。暑うなし、寒うなし」

珍らしく紺のセルの着物に、紫紺の袴をつけている大石先生だつた。ゴザをしいた船の胴の間に横いざりに坐つた足を、袴はう

まくかくして、深い紺こんじょう青の海の上を、船は先生の心一つをのせて、櫓音ろおとも規則ただしく、まっすぐに進んだ。二か月前に泣きながら渡った海を、今はまた、気おいたつ心で渡っている。

「なんせ、ひどい目をみたのう」

「はあ」

「若いものは、骨がやらい（やわらかい）から、折れてもなおりが早い」

「骨じゃないんで。筋ともちがう。アキレス腱けん、いうんじやがのう。骨よりも、むつかしいとこで」

「ほう、そんなら、なおいかん」

「でも、ひどい目にあわすつもりでしたんじやないさかい。怪我けがが

じやもん、しようがない」

「そんな目に　おうても　わかれの　あいさつとは　気のえいこつちやい。ゆんとん、さんじやい」

船頭せんとうさんは櫓ろにあわせて短かくことばをくぎりながら、「ゆんとん、さんじやい」で、いつそう力を入れてこいだ。大石先生もくつくつ笑いながら、それにあわせて、

「そんなこと　いうても　たったの　一年生が　親にも　ないしよで　見舞みまいに　きたんじやもん　いかんと　おれるかい　ゆんとん　さんじやい」

大石先生がきやつきやつと笑うと、船頭さんもいい気持らしく、「ぎりと　ふんどしや　かかねば　なるまい　そういう　もんじ

やよ ゆんどん さんかよ」

もう大石先生は腹をかかえて、思うぞんぶん笑った。海の上ではだれも気にするものはなく、その笑い声まで櫓の音でくぎられながら、船はしだいに沖おきにすすみ、やがて対岸の村へと近づいてゆく。まだ朝げの靄もやの消えきらぬ岬みさきのはなは、もうとつくに今日の出発がはじまったらしく、小さな物音がしきりにひびいてきた。今ごろ、あの子どもたちはどうしているだろうか。自転車であわっていたとき、よろずやの前まへにさしかかると、あわてて走りだしてきていた松江、よく、波止場はとばの上まで出てきて待ちうけていたソソキ、三日に一度はちこくする仁太にた、おしやまのマスノ、えんりよやの早苗さなえ、一学期に二度も教室で小便をもらった吉次、と、

ひとりひとりの上に思いをめぐらしながら、よくぞあのチビどもが、思いきつて一本松までこられたものだと思うと、あの日の、ほこりにまみれた足もとなど、思いだされて、いとしさに、からだがふるえるほどだった。

あときは、わたしのほうがおどろかさされたから、今日はひとつ、みんなをびつくりさせてやる……。だれにまつさきに見つかるだろうかと、たのしい空想をのせて船はすすみ、緑の木立ちや黒い小さな屋根をのせて岬はすべるように近づいてきた。二人の女の子が砂浜に立ってこちらを見ている。一年生ではないらしい。ふしぎそうにこちらから目をはなさない。変化にとぼしい岬の村では、海からの客も、陸からの客も見つけるに早く、好奇の目は

またたくまに集団をつくるのだった。立ちどまっている子どもが五人になり、七人にふえたと思うと、その姿はしだいに大きくなり、がやがや騒さわぎとともに、ひとりひとりの顔の見わけもつきだした。しかし、子どものほうではだれもまだ着物の先生に見けんとう当がつかぬらしく、ま顔で見つめている。笑いかけてもわからぬらしい。しびれをきらして思わず片手があがると、がやがやはきゆうに大きくなって、叫さけびだした。

「やっぱり、おなご先生じゃア」

「おなご せんせえ」

「おなごせんせが きたどオ」

浜べはもういつのまにか大人おとなまでがまじつての大かんげいにな

った。船頭せんどうさんのなげたと綱づなは歓呼かんこの声でたぐりよせられ、

力あまつて船は砂浜まで引きあげられるさわぎだった。ひとしきり笑いさざめいたあげく、ともかく学校へ向かった。途中とちゆうで出あう人たちは、いちいち見舞みまいのことばをおくった。

「怪我けがはどないでござんす。あんじよりました」

先生のほうもいちいちあいさつをかえした。

「ありがとうございます。そのせつは、お米をいただいたりしまして、すみませんでした」

「いいえ、めつそうな。ほんの心もちで」

すこしゆくと鍬くわをかついだ人が、はちまきをはずしかかっている。同じような見舞いを聞いたあと、

「こないだはどうも、きれいなそら豆をありがとうございました」  
すると、その人は少し笑つて、

「いやア、うちは、ごま胡麻をあげましたんじや」

じぶんの馬鹿ばかしようじき正直さに気がつき、これからは米とも豆ともいわないことにきめた。わずか一学期だけのことだったので、一年生の父兄のほかはよく顔もおぼえていなかったのだ。そのつぎに出あつた、漁師りようしらしい風体ふうていの人を見ると、魚をくれたのはこの人かと思ひ、用心しいしい、頭をさげた。

「こないだは、けつこうなお見舞いをありがとうございます」  
するとその人は、きゆうにあわてだし、

「いや、なに、ことづけようと思つたんですが、つい、おくれ

てしても、まにあいませなんだ」

先生のほうも同じようにあわてて、赤い顔になり、

「あら、どうも失礼しました。思いちがいましたの」

これが以前だったら、女先生は見舞いを催<sup>さいそく</sup>促したといわれるところだったろう。行きすぎると子どもたちが笑いだし、その中の男の子が、

「先生、清<sup>せいろく</sup>六<sup>ろく</sup>さん家は、人にもものやっただためしがないのに。もらうだけじゃ。山へ仕事に行<sup>い</sup>とってしようべんしとうなったら、どんな遠うても、わが家<sup>うち</sup>の畑<sup>はたけ</sup>までしにいく人じゃもん」

わあとみんなが笑った。その話はまえにもいちど聞いたことがあった。四年生にいるその息子<sup>むすこ</sup>が、組でひとりだけ、どうしても

音楽帳をもってこなかった、そのときである。いつも忘れてくるのかと思つてただすと、泣きそうになつてうつむいた。するとならんでいた生徒が、かわつて答えた。

「歌をなろうてもぜに銭もうけのたしにはならんいうて、買こうてくれんのじゃ」

つぎの唱しょうか歌うたのとき、清せいち一いちというその子に音楽帳をやると、

うれしそうに受けとつたことを思いだした。彼は、教科書まで全部、他人の使い古しをもらつていた。しかも村で二番目のしんしよ持ちだというのだ。そこに清一のいないことで、ほつとしている先生へ、

「せんせ足、まだ痛いん？」

まっさきにきいたのは仁太<sup>にた</sup>である。もう松葉杖ではなかつたにしろ、やっぱりびっこをひいているのを見ると、仁太はうたてかつたのであろう。

「せんせ、まだ自転車にのれんの？」

「こんどは小ツルだった。」

「そう、半年ぐらいしたら、のれるかもしれん」

「そんなら、これから、船でくるん？」

ソんキの質問にだまって顔をふると、コトエがおどろいて、

「へえ、そんなら、歩いて？ あんな遠い道、歩いてエ？」

コトエにとつては忘れられない二里の道だったのだらう。空<sup>くう</sup>

腹<sup>く</sup>と心配でまっさきに泣きだしたコトエである。仲間はずれに

なりたくないばかりに、本の包みを藪やぶにかくして出かけたコトエは、船で送りとどけられたときにも、ひとり気がふさいでいた。どんなに叱しかられるかと、びくびくしていたのだ。しかし、迎えむかに出ていたおぼんは、どここのの親たちよりもまつさきに、船にアユミのかかるのもまちきれず、じゃぶじゃぶと海の中へはいつてゆき、どの子よりもまつさきにコトエを船から抱だきおろしたのである。まるでがいせん将しょうぐん軍ぐんのように晴れがましくアユミをわたる子どもらとそれを迎える親たちのなかで、コトエとおぼんだけは泣いていた、藪やぶへまわって本包みをとつてもどりながら、もうそのときは二人ともふだんの顔になつて話しあつた。

「これからは、だまつてやこい行つたらいかんで。ちやんと、そ

ういうて行かにや」

「そういうたら、行かしてくれへんもん」

「そうじゃなア、ほんにそのとおりじゃ。ちがいない」

おぼんはふるえるような力のない笑い声でわらい、

「でもな、なにがなんでも飯だけはたべていかんと、からだに毒  
じゃ」

そういわれてコトエは、先生の家でごちそうになったキツネうどんを思い出した。思い出しただけでも唾つばが出てくるほどうまかつたキツネうどん。空腹はキツネうどんの味を数倍すうばいにしてコトエの味覚みかくにやきついていた。

その後も彼女は、何度かキツネうどんの話をしては、大石先生

を思いだし、先生を思いだしてはキツネうどんを思いうかべた。思いがけず先生がやってきた今、彼女はまた、あの遠い道とキツネうどんを思いだしながら、聞いたのである。あんな遠い道を、歩いてエ？ と。しかし、コトエでなくとも、子どもらは、今日の先生を、ふたたび学校へむかえたものと考えていた。だれもうたがおうとしない態度たいどを見ると、先生は、上陸じょうりく 第一歩で今日の目的をはつきりさせるべきだったと思つた。

お別れにきたのよう……

そう叫びさけながら船をおりたら、そくぎにそのような雰囲ふんいきが生まれたるうにと、くやみながら、コトエのことばにしがみつくようにして、ゆつくりといった。

「ね、遠い遠い道でしょ。そこを、ひよこたん ひよこたん と、ちんばひいて歩いてくると、日がくれるでしょ。それでね、だからね、だめなの」

それでも子どもたちにはさっしがつかなかつた。網元あみもとの森もりお

岡かた正ただしが、正らしい考えで、

「そんなら先生、船できたら。ぼく、毎日迎えにいつてやる。一本松ぐらい、へのかっぱじゃ」

正は近ごろ櫓ろがこげるようになり、それが自慢じまんなのであった。

先生も思わずにこにこして、

「そうお、それで夕方ゆうがたはまた、送ってくれるの?」

「うん、なあ」

あとをソソキにいったのは、少し不安でソソキにかせい加勢を求めたものらしい。ソソキも、うなずいた。

「そう、ありがとう、でも、困ったわ。もっと早くそれがわかってたらよかったのに、先生もう、学校やめたの」

「……………」

「今日は、だからお別れにきたの。さよなら、いいに」

「……………」

みんなだまっていた。

「べつのおなご先生が、すぐきますからね、みな、よくべんきよう勉強強

してね。先生、とつても岬を好きなんだけど、この足じやあ仕方

がないでしょ。また、よくなったら、くるわね」

みんな一せいにうつむいて先生の足もとを見た。早苗が目にはい涙なみだをため、それをこぼすまいとして、目を見ひらいたままきらきらさしている。感情をなかなかことばにしない早苗のその涙を見たとき、先生の目にも同じように涙がもりあがってきた。と思うと、きゆうに蜂はちの巣すにでもさわったように、わあつと泣きだしたのはマスノだった。するとコトエやミサ子や、気の強い小ツルまでが、しくしくやりだした。泣き声の合唱である。岬分教場の古びた門もんざつ 札のかかった石の門の両側に、大きな柳やなぎと松の木がある。その柳の木の下で、三十四、五人の生徒にとりまかれて、女先生もまたかまうことなく涙をこぼした。マスノの音頭おんどがあんまり大げさだったので、吉次や仁太まで泣きそうになり、それを

がまんしているふうだった。大きな生徒のなかにはおもしろそうに見ているものもいた。職員室の窓からその光景を見ていた男先生は、古ぐつの先<sup>さき</sup>革<sup>がわ</sup>だけをのこした上ばきをつっかけてとんできたが、わけをきくと、

「なんじゃあ、おなご先生がせっかくおいでたんだから、笑うてむかえんならんのに、みんなはでに泣くじやないか。さ、どいたどいた。おなご先生、早く中へおはいりなさい」

しかしだれひとり動こうとはせず、しくしくつぶけた。

「やれやれ、女子<sup>じょし</sup>と小<sup>しょう</sup>人<sup>じん</sup>はなんとかじゃ。泣きたいだけ泣いてもらおう。泣きたいものは、なんぼでも泣け泣け」

古ぐつの上ばきをぱつく、ぱつく音させて男先生が去りかける

と、はじめてみんなは笑いだした。泣け泣けといわれたのがおかしかったのだ。

始業の板木ばんぎが鳴りわたり、いよいよ今日の勉強もはじまるわけだ。そのはじめに別れのあいさつをして帰るはずの大石先生であったが、別れのことばをいったあと、なにかに引っぱられるようにして、一、二年の教室へはいった。久しぶりの女先生に、みんなうきうきした。

「じゃあ、この時間だけ、いっしょにべんきようしてお別れにしましょうね。算数だけど、ほかのことでもいいわ。なにしよう？」  
はい　はい　と手があがり、まだ名ざしをしないうちにマスノが、

「唱歌しょうか」

と叫んだ。歓声かんせいと拍手はくしゅがおこった。みんなさんせいらしい。

「浜で歌うたう」

わあつと、また、ときの声があがる。

「せんせ、浜で歌うたう」

マスノがひとりで音頭おんどをとっている。

「じゃあ、男先生にそいって、浜まで送ってきてね。船がまつて  
るから」

パチパチと拍手がおこり、机つくえががたがた鳴った。男先生に相談  
すると、それならみんなで送ろうということになった。びつこの  
大石先生をとりまくようにして十二人の一年生が先頭を歩いた。

一ばんしんがりの男先生は、怪<sup>け</sup>我<sup>が</sup>の日以来ほこりをかぶっている女先生の自転車を押していった。道で出あつた村の人も浜までついてきた。

「こんどは、泣きつこなしよ」

大石先生はひとりひとりの顔をのぞきながら、

「さ、指きり、マアちゃんも泣かないでね」

「はい」

「コトちゃんも」

「はい」

「早苗さんも」

「はい」

これだけが一ばん泣き虫だから、これだけ指きりしたから、もうだいじょうぶ——

ひとりひとりの小さな指にちかいながら、浜へくると、仁太が大声で、

「なに、歌うん？」

と、マスノの顔を見た。

「ほたるひかり蛍の光だ、そりやあ」

男先生がそういったが、一年生はまだ蛍の光をならっていないなかつた。

「そんなら一年生も知つとる歌、『学べや学べ』でもうたうかい」  
男先生はじぶんの教えた歌を聞いてもらいたかった。しかしマ

スノがいち早く叫んだ。

「山のからす」

彼女はよほど「山のからす」がお気にいりらしかった。そしてもう、まつさきに、うたいだしたのだ。

山のからすが もってきた

あかい小さな じょうぶくろ

まだやつと一年生なのに、彼女の音頭おんどとりはなれきっていた。天才とでもいうようなものであろうか。ちやんと、みんなをあとについて歌わせる力があつた。

あけてみたらば 月の夜に  
山がやけそろ こわくそろ

村の人も大ぜい集まってきた。あいさつをした。大石先生もい  
つしよに歌いながら、船にのりこんだ。

へんじかこうと 目がさめりや  
なんのもみじの 葉がひとつ

くりかえし歌って、いつかそれもやみ、しだいに遠ざかる船に

むかつて呼びかける声も細りながら、いつまでもつづいた。

「せんせえ——」

「また、おいでえ」

「足がなおつたら、またおいでえ」

「やくそく したぞオ」

「やくそく したぞオ」

最後に仁太の声で、あとはもう、ことばのあやもわからなくなつた。

「かわいらしいもんじやのう」

船頭せんどうさんに話しかけられて、はじめて我れにかえりながら、

しかし目だけは、まだ立ちさりかねている浜べの人たちからはな

さずに、

「ほんまに、みんな、それぞれ、えい人ばかりでとう」

「昔から、ひちむつかしい村じやとうけんどのう」

「そうよの。そんな村は、氣心がわかつたとなると、むちやくちやに人がようてのう」

「そんなもんじや」

つよい日ざしと海風に顔をさらしたまま、もう胡麻粒ごまつぶほどにし  
か見えない人の姿とともに、岬みさきの村を心の中にしみこませるよう  
に、いつまでも目をはなさなかつた。櫓ろの音だけの海の上で、子  
どもたちの歌声は耳によみがえり、つぶらな目の輝かがやきはまぶたの  
奥おくに消えなかつた。

## 五 花の絵

海の色も、山の姿も、そっくりそのまま昨日きのうにつづく今日きょうであった。細長い岬の道を歩いて本校にかよう子どもの群れも、同じ時刻じこくに同じ場所を動いているのだが、よく見ると顔ぶれの幾人いくにんかがかわり、そのせいでか、みんなの表情もあたりの木々の新芽しんめのように新鮮しんせんなのに気がつく。竹たけいち一いちがいる。ソんキの磯いそ吉きちもキツチンの徳田吉次とくだきちじもいる。マスノや早苗さなえもあとからきている。この新らしい顔ぶれによつて、物語のはじめから、四年の年月が流れさつたことを知らねばならない。四年。その四年間に「一い

ちおくどうほう

億同胞」のなかの彼らの生活は、彼らの村の山の姿や、海の色と同じように、昨日きのうにつづく今日であつたらうか。

彼らは、そんなことを考えてはいない。ただ彼ら自身の喜びや、彼ら自身の悲しみのなかから彼らはのびていった。じぶんたちが大きな歴史の流れの中に置かれているとも考えず、ただのびるままにのびていた。それは、はげしい四年間であつたが、彼らのなかのだれがそれについて考えていたろうか。あまりに幼いおさな彼らである。しかもこの幼い者の考えおよばぬところに、歴史はつくられていたのだ。四年まえ、岬みさきの村の分教場へ入学したその少しまえの三月十五日、その翌年彼らが二年生に進学したばかりの四月十六日、人間の解放を叫さけび、日本の改革を考える新らしい思想に

政府の圧迫あつぱくが加えられ、同じ日本のたくさんの人びとが牢獄ろうごくに封じこめられた。そんなことを、岬の子どもらはだれも知らない。ただ彼らの頭にこびりついているのは、不況ふききようということだけであつた。それが世界につながるものとはしらず、ただだれのせいでもなく世の中が不景氣になり、けんやくしなければならぬ、ということだけがはつきりわかつていた。その不景氣の中で東北や北海道の飢饉ききんを知り、ひとり一銭せんずつの寄付金きふきんを学校へもつていった。そうした中で満州事変まんしゅうじへん、上海事変シャンハイはつづいており、幾人いくにんかの兵隊が岬からもおくり出された。

そういうのはげしい動きのなかで、幼い子どもらは麦めしをたべて、いきいきと育そだつた。前途ぜんとに何が待ちかまえているかをしらず、

ただ成長することがうれしかった。

五年生になつても、はやりの運動靴うんどうぐつを買つてもらえないことを、人間の力ではなんともできぬ不況のせいとあきらめて、昔なむかしがらのわらぞうりに満まんぞく足し、それが新らしいことで彼らの気持はうきうきした。だからただひとり、森岡正のズツクを見つけると、みんなの目はそこにそそがれてさわいだ。

「わア タンコ、足が光りよる。ああばば（まぶしいこと）」

いわれるまえから正は気がひけていた。はいてこなければよかつたと後悔こうかいするほど恥ずかしかった。女のほうでは小ツルがひとりだった。靴は、足をかわずたびにぶかぶかとぬげそうになつた。小ツルはどうとうズツクを手にもつて、はだしになり、うら

めしそうに靴をながめた。六年生の女の子がじぶんのぞうりと取りかえてやりながら、大声で、

「わあ、ともんはん十文半じゃもん、わたしにでも大きいわ」

おそらく三年ほどもたせるつもりで買ってやったのだろうが、小ツルはもうこりこりしていた。ぞうりのほうがよっほど歩きよかつたのだ。ほつとしてゐる小ツルに、松江は笑いかけ、

「な、コツやん、べんどが、まだ、ここで、ぬくいぬくい」

そういつて腰こしのあたりをたたいてみせた。

「百合ゆりの花の弁当箱？」

小ツルが、いつ買ったのだ、という顔で問うのを、松江は気弱くうけ、

「ううん、それは明日<sup>あした</sup>お父<sup>とつ</sup>つあんが買<sup>こ</sup>うてきてくれるん」

そういつてしまつて、松江ははつとした。三日前のことを思いだしたのだ。ミサ子もマスノも、ふたに百合の花の絵のあるアルマイトの弁当箱を買つたと聞いて、松江は母にねだつた。

「マアちゃんも、ミイさんも、百合の花の弁当箱買<sup>う</sup>たのに、うちもはよ買<sup>う</sup>ておくれいの」

「よしよし」

「ほんまに、買<sup>う</sup>てよ」

「よしよし、買<sup>う</sup>てやるとも」

「百合の花のど」

「おお、百合<sup>きく</sup>なと菊<sup>きく</sup>なと」

「そんなら、はよチリリンヤへたのんでおくれいの」

「よしよし、そうあわてるない」

「ほたつて、よしよしばかりいうんじやもん。マツちゃん、チリリンヤへいってこうか」

それではじめて彼女の母はしんけんになり、こんどはよしよしといわずに、少し早口で、

「ま、ちよつとまつてくれ、だれがぜに銭はらうんじや。お父つあんにもうけてもろてからでないと、赤あかはじ恥かかんならん。それよか、お母さんがな、アルマイトよりも、もつと上等のを見つけてやる」

そういつてその場を流されたのだが、松江のためにやなぎこうりさがしだしてくれたのが、古い昔の柳行李やなぎこうりの弁当入れとわかると、松江は

がっかりして泣きだした。今どき柳行李の弁当入れなど、だれも持っていないことを、松江はしっていたのだ。世の中の不況ふきようは父の仕事にもたたって、大工だいくの父が、仕事のない日は、草とりの日ようにまでいつているほどだから、弁当箱一つでもなかなか買えないこともわかつていた。しかし松江は、どうしてもほしかったのだ。ここで柳行李をうけいれたら、いつまでたっても百合の花の弁当箱は買ってもらえまいということ、松江は感じて、ごねつづけ、とうとう泣きだしたのである。しかし母親もなかなかまけなかった。

「不景気なんだから、ちつとがまんしい。来月になって、景気がよかったら、ほんまに買おうじゃないか。なあ、マツはいちばん

大きいから、もつと聞き分けいでどうすりや」

それでも松江はしくしく泣いていた。いつやむともしれないほど、しんねり泣きつづけるのは、よほどの思いにちがいない。そのままつづけばいつやむともしれぬ泣きぶりであったが、やがて、泣くどころではないことがおこった。彼女の母は、きりつとした声でいった。

「マツ、弁当箱はきつと買うてやる。指きりしてもええ。そのかわりおまえ、産婆さんぼさんとこへ、ひとつ走りばしいつてきてくれや。大急ぎできてつかあされ、いうてな。行きしなに、よろずやのばあやんにも、ちよつときてもろてくれ。こんなはずないんじやけんど、おかしいな」

あとのほうはひとり言のようにいつて、納戸なんどにふとんをしきだした母親を見ると、さすがに松江も泣きやみあわてて家をとびだした。小さいからだをツブテのように走らせながら、彼女の心には一つのたのしみがふくらんできた。それは指きりしてもよいといった母のことばだった。産婆さんばさんの家は本村のつつきにあつた。帰りは途とちゆう中まで自転車にのせてくれ、少し上り坂のぼのところまでくると、年とつた産婆さんは自転車をとめ、

「おまえは、ここでおりてくれ。一刻も早ういかんならん」

松江はこつくりして、自転車のあとから走った。自転車はみるみる遠ざかり、すぐに山の中へ消えていった。大石先生の自転車いらい、女の自転車もようやくはやりだして、今ではもう珍めずらし

くはなかったが、それだけに走りきった産婆さんの自転車を見て、毎日朝早く起きて、てくてく、町まで歩いて仕事にゆく父親にも、自転車があれば、どれほど助かるかと、ふと思つた。

走つて帰ると、もう赤ん坊は生まれていた。いそがしたすきそうにたすき襷がけで水をくんでいたよろずやおばさんは、松江を見るなりいつた。

「マツちゃんよ、お前、えらかろうが、大いそぎでかま釜の下たいておくれ」

バケツのまま釜に水をあけてから、小声で、

「こんまい女の子じゃ。月たらずじゃといな。でも、ええじゃな  
いか、なあマツちゃん。また女でお父とつつあんはうんざりしようけ

んど、女の子はええ。忠義はできんけんど、十年もたつたら、マツちゃんじゃつて、どない出世するかしれたもんじやない」

なんの意味かよくわからぬまま、松江は釜の下をたきつづけた。母親になにかことがあると、年よりのいない松江の家では、小さいときから松江がかまどに立たねばならなかつた。

それから三日目、はじめて弁当をもつて本校へゆく松江は、納戸んどにねている母親に注意されながら、湯気ゆげの出ている御飯を釜から弁当箱につめた。

「お父つあんのは、両行李ごうりぎゆうぎゆうにつめこんであげよ。お前のは軽くいれてな、なにせ、大きい弁当箱じゃもん。梅干うめぼしは見えんほど御飯の中に押しこまにや、ふたに穴があくさかい」

血の道がおこりそうだといって、しかめ顔に、手ぬぐいではちまきをしてねている母を、幼い松江は気にもかけず、

「お母さん、百合の花の弁当箱、ほんまに買こうてよ。いつ買こうてくれるん？」

「お母さんが、起きれたら」

「おきれたら、その日に、すぐに？」

「ああ、その日に」

松江はうれしくて、今日借りてもってゆく父親のアルミの弁当箱の大きさも気にかからなかった。松江ぐらいの女の子なら、三人分はゆうにはいる大きな、深い弁当箱が、小学校の教室ではどれほどこっけいにみえるかを、彼女は考えなかった。柳やなぎ行李ごうりよ

りはそのほうがよいと思つたのだ。それどころか、からだにつたわつてくる弁当のぬくみは、彼女の心をほかほかと温めつづけていた。小ツルの問いに、思わず、明日あしたと答えたけれど、明日は買つてもらえない。しかし、あさつては買つてもらえるかもしれないと考えると、彼女はひとり笑えてきた。こんな、温かい気持ちで出かけていった松江であつた。松江にかぎらず、みんな何かしらうれしがつていた。マスノは新しいセーラー服をきて自慢じまんらしかつたし、コトエはおぼんの作つておいてくれたぞうりの鼻緒はなおに赤いきれのないこんでいるのがうれしうだつた。まるで大学生の着るようなこまかいさつまがすりの裕あわせをきせられている早苗は、赤いはっかけ（すそまわし）を気にして、ときどきうつむいて見

ている。じみなその着物を人に笑われないうちに、早苗の母はいったのである。

「なんと、じみすぎておかしいかと思うたら、赤いはっかけでひきたつこと。そんでまた、これが早苗に似合うというたら。この着物きたら、かしこげに見えるわ。裾すそにちろちろ赤いのも見えて、みごとい、みごとい。よかつたア」

これだけほめられると、早苗は正直にそれを信じこんだ。着物をきているのはコトエと二人ふたりだけで、コトエもまた母親のだったらしい黒っぽい、飛び模様のある綿めんめいせんをきていた。本裁ほんだちそのまますく、腰こしあげも肩かたあげももりあがっている。しかし彼女のじまは、先鼻緒さきばなおに赤いきれのついたぞうりの方だった。

藪やぶのそばの草むらを通るとき、コトエだけは、ふっと、大石先生を思いだし、一本松のほうを見た。

「小石先生！」

親したしく、心の中でよびかけたつもりなのに、まるでそれが聞こえたかのように、小ツルがよつてきた。

「小石先生のこと、知つとん？」

「なに？」

知らないとわかると、こんどは早苗に、

「知つとん？ 早苗さん」

小ツルは大声で、ぐるぐると見まわし、

「みんな、小石先生のこと、知つとるか？」

ニユースは、いつだつて小ツルからである。みんなは思わず小ツルをとりまいた。得意の小ツルは、れいのおり篠しので切つたよ  
うな細い目を見はり、見はつてもいつこうひろがらない目でみ  
なを見まわし、

「小石先生な、あのな、エイコトコトコトコンペイト」

そしてマスノの耳にくしやくしやとささやいた。二人だけの自じ  
慢まんにしよとしたのに、マスノはすつとんきように叫さけんだ。

「わあ、嫁よめさんにいったん！」

小ツルは、まだあるんだとばかりに、

「な、ほてな、あのな」と、わざとゆうゆうになり、「シンコン  
レンコン（新婚旅行）なあ、おしえてやろうか」

「うん」

「うん」

「こがつくところ。んがつくところ。ぴがつくところ。らがつくところ」

「わかった、こんぴらまいり」

「そう」

わあつと声があがった。百メートルほど先になった上級生の男の子たちがふりかえったが、そのままいつてしまうと、みんなもとつとと、そのあとを追いながら、口だけはやかましく小石先生の噂うわさをした。それはおとといのことで、昨日きのう小ツルの父が聞いてきた話だということもわかった。嫁よめにいったとすれば、小石先生はもう学校をやめるのではなからうかというのがマスノの意見

だった。小ツルがそれにさんせいし、小林先生も、嫁に行くのでやめたと、記憶きおくのよいところをみせた。そしてまた、やめてもらいたくないという希望をいち早く口に出したのもマスノであった。めずらしく早苗さなえとコトエがさんせいした。早苗がコトエに、

「小石先生、もーペンあいたいもんなあ」

「うーん。いつかしらん、うどん、うまかつたなあ」

コトエがいった。みんなはそれで、四年前のことをはつきり思いだした。その小石先生が、今日きょう学校がっこうにきているかどうかは、みんなにとって大問題だいもんだいになってきた。みんなの足は、知らずしらず早くなつた。なかば走りながらマスノは、

「かけしょうか、小石先生せいかいせんきとるか、きとらんか」

「しよう、なにかけるん？」

うてばひびく早さで、小ツルが応じた。

「まけたら、ええと、ええと、すつぺ（しっぺい）五つ」

森岡正がそういうと、マスノは右手を高くあげながら、

「すつぺ五つなら、まけてもええわ。うち、先生きーとる」

「うちも」

「うちも」

なんのことはない、みんな小石先生が来ているというのだ。とうとうかけはながれたまま、学校へ近づいた。さすがに新生生の五年生はきまじめな顔をして校門をくぐった。ひよいと見ると職員室の窓から小石先生がこちらを見ている。おいでおいでと手を

ふられると、みんなはそのほうへ走っていった。

「もうくるか、もうくるかと思つて、まつてたのよ。ちよつとま  
つて」

そういつて出てきた小石先生は、歩きながらみんなを土手<sup>どて</sup>のほうへつれていった。

ひとりひとりの顔を見ながら、

「大きくなつたじやないの。今に先生においつくわ。あら、小ツ  
やんなんか、追いかしそうだ」

小ツルに肩をならべ、

「へえ、まけた。でもしようがない、小石先生だもんね」

みんな笑つた。

「あんたらが小石先生といったもんで、いつまでたつても大石先生になれないじゃないの」

また笑った。笑いはするが、だれもまだ、なんともいわない。

「いやに、おとなしいのね。五年生になったら、こんな、おとなしくなったの」

それでもここにこしているだけなのは、小石先生が、なんだかまえと少しかわって見えたからだだった。色も白くなっているし、そばにくると、スミレの花のようにいいにおいがした。それは嫁よめさんのにおいだというのを、みんなは知っていた。

「せんせ」

マスノがやつと口をきった。

「先生、唱歌しょうかおしえてくれるん？」

「そう。唱歌だけじゃないわ。あんたたちの受けもちよ、こんど」

わあつと歡かんせい声があがり、きゆうにうちとけてしゃべりだした。

先生、先生とだれかが呼びつづける。呼びつづけながら岬みさきの村の

いろんなできごとが、その海の色や風の音までつたわつてくるよ

うにわかった。コトエのうちでは最近、おばあさんが卒そつちゆう中で

なくなり、ソんキのお母さんはリヨウマチで寝ねこんでいるという。

早苗のおでこのかすりきずは、ついこないだ、ミサ子と二人で肩

をくんでスキップで走っていて、道路から浜におちたときの怪け我が

だとわかったし、キツチンの家では豚ぶたが三匹も豚とんコレラで死んで

しまい、お母さんが寝こんだ、などと話はずきなかつた。

小ツルは、先生のからだをつかまえて、ゆすぶり、

「先生、仁太<sup>にた</sup>、どうしてこなんだか？」

「あ、それ聞こう聞こうと思ってたの。どうしたの。病気？」

すぐには答えず、みんな顔見あわせて笑っている。先生もつられて笑いながら、これはきつと仁太が、とつぴようしもないことをしでかしたにちがいないと、ふと思った。

「どうしたのよ。病気じゃないの？」

早苗の顔を見ていうと、早苗はだまってかぶりをふり、目を伏<sup>ふ</sup>せた。

「らくだい」

ミサ子が答えた。

「あら、ほんと？」

おどろいている先生を、笑わせようとしてもするように小ツルは、  
「いつも、はな、たらしとるさかい」

みんなは笑ったが、先生は笑わなかった。

「そんなことうそよ。はなたらして落第らくだいなら、みんな一年生の  
とき落第したわ。病気かなんかで、たくさん休んだんでしょ」

「でも、男先生がそういうた。はなたれもしいおくりというの  
に、仁太は四年生になってもはなたれがなおらんから、も一ぺん  
四年生だつて」

小ツルの話に、みんながツンツンはなをすすった。それには先  
生もちよつと笑ったが、すぐ、心配そうな顔になった。始業のか

ねが鳴ったので、みんなと別れた先生は、職員室しよくいんしつにもどりながら、仁太のときり考えていなかった。かわいそうにとつぶやいた。落第した仁太が、弟の三吉と同級生になってもう一度やりなおす四年生を思うと、気持がくもってきた。はなたれもしいおくりと、ほんとに男先生がいったとしたら、仁太を四年生にとどめることこそ、はなをたれっぱなしにさせておくことのように思ったのだ。あのからだの大きな仁太のむじやきさが、それで失われるとしたら、仁太の一生についてまわる不幸のように思えて、今日きょう、ひとりとり残された仁太のさびしさが、ひしひしとせまつてきて、またくりかえした。

はなたれも しだいおくり

はなたれも しだいおくり

仁太はどうしてとり残されたろう。

それを竹一にでももういちど聞こうと思った大石先生は、お昼休みの時間をまって、そとへ出た。運動場の見わたせる土手どてやなぎの柳の下に立つと、竹一は見あたらず、まつさきにとらえたのは松江だった。松江はなぜかひとり校舎の壁かべにもたれてしょんぼりしていた。まねくと土手の下まで走ってきて、そつくりそのまま母親に通じる目で笑った。手をのばすと、ますます母親似の顔をして、きまりわるそうに引っぱりあげられた。仁太のことをきこうとす

る先生ともしらず、松江は、じぶんひとりの気づまりさからのが  
れようとしてもするように、せつぱつまった声で呼びかけた。

「せんせ」

「なあに」

「あの、あの、うちのお母さん、女の子うんだ」

「あらそう、おめでとう。なんて名前？」

「あの、まだ名前ないん。おとつい生まれたんじゃもん。あした、  
あさって、しあさって」

と、松江は三本の指をゆつくりと折り、

「六日ぎり（名付日）。こんど、わたしがすきな名前、考えるん」  
「そう、もう考えついたの？」

「まだ。さつき考えよつたん」

松江はうれしそうにふつと笑い、

「せんせ」

と、いかにもこんどは別の話だというふうによびかけた。

「はいはい。なんだかうれしそうね。なあに」

「あの、お母さんが起きられるようになったら、アルマイトの弁当箱、買ってきてくれるん。ふたに百合ゆりの花の絵がついとる、べんと箱」

すうつとかすかな音をさせていきすを吸い、松江は顔いっぱいによろこびをみなぎらせた。

「あーら、いいこと。百合の花の絵がついとるの。ああ、赤ちや

んの名前もそれなの？」

すると松江は、はじ恥らいとよろこびを、こんどはからだじゅうで示すかのように肩かたをくねらせて、

「まだ、わからんの」

「ふーん。わかりなさいよ。ユリちゃんにしなさい。ユリコ？

ユリエ？ 先生、ユリエのほうがすきだわ。ユリコはこのごろた  
くさんあるから」

松江はこつくりうなずいて、うれしそうに先生の顔を見あげた。  
松江の目がこんなにもやさしいのを、はじめて見たような気がし  
て、先生はその長いまつ毛におおわれた黒い目に、じぶんの感情  
をそそいだ。仁太のことはもう、ひとまず流して、心はいつかな

ごんでいた。松江にとつてもまた、その数倍のよろこびだった。先生にいわなかったけれど、お昼の弁当のとき、松江は大きな父の弁当箱を、小ツルやミサ子から笑われたのである。それで、彼女はひとりみんなからはなれていたのだ。しかし今は、そのしよげた気持も朝露あさつゆをうけた夏草のように、元気をもりかえした。じぶんだけが、とくべつに先生にかまわれたようなうれしきで、これはないしよにしておこうと思った。だのにその日、帰り道で彼女はつい口に出してしまった。

「うちのねね、ユリエって名前つけるん」

「ユリエ？　ふうん、ユリコのほうが気がきいとら」

はねかえすように小ツルがいった。松江は胸をはって、

「それでも、小石先生、ユリエのほうがめずらして、ええつていうた」

小ツルはわざととびあがって、

「へえ、なんで小石先生が。へえ！」

なにかをさぐりあてようとしてもするような目で松江の顔をのぞきこみ、

「あ、わかった」

ならんでいたミサ子をうしろの方へ引っぱって行って、こそこそささやいた。富士子、早苗、コトエとじゅんじゅんにその耳に口をよせ、

「なあ、そうじゃな」

おとなし組の三人は小ツルの言い分にさんせいできないことを、  
氣弱きよわな無言であらわすばかりで、松江を孤立こりつさせようとした小ツ  
ルのたくらみはくずれてしまった。よく氣のあうマスノが、今日きょう  
は母の店によつて、ここにいないのが小ツルの弱さになっていた。  
彼女はみんなに、松江がひいきしてもらうために、ひとりで小石  
先生にへつらつたといつたのである。そのためにかえつてじぶん  
から孤立した小ツルは、ひとりふきげんにだまりこんで、とつと  
と先を歩いていった。みんなもそのあとからだまつてついていっ  
た。

一つはなをまがつたときである。前の小ツルがきゆうかんに立ちど  
まつて海のほうをながめた。先にたつものにならう雁かんのように、

みんなも同じほうを見た。小ツルが歩きだすとまた歩く。やがて、いつのまにかみんなの視線しせんは一つになって海の上にそそがれ、歩くのを忘れてしまった。

はじめから小ツルは知っていたのである。それともたつた今、みんなといっしょに気づいたのである。静かな春の海を、一そうの漁船が早櫓はやろでこぎわたっていた。手ぬぐいで、はちまきをしたはだかの男が二人、力いっぱいのかっこうで櫓ろを押ししている。二丁櫓にちようろのあとが、幅はばびろい櫓足ろあしをひいて、走るように対岸の町をさして遠ざかってゆくのだ。もうけんかどころでなかった。

なんじやろ？

だれのうちのできごとじやろう？

みんな目を見あわした。消え去りつつ新らしくひかれてゆく櫓足から、岬みさきの村に大事件が突とつ発ぱつしたことだけがわかった。急病人にちがいない。船の胴どうの間まにひろげたふとんが見られ、そこにだれかがねかされているとさっした。しかし、またたくまに船は遠ざかり、乗りこんでいる人の判はん別べつもつかなかった。まるでそれは、瞬しゆん間かんの夢ゆめのように、とぶ鳥のかげのようにすぎた。だが、だれひとり夢と考えるものはいなかった。一年に一度か二年に一度、急病人を町の病院へ運んでゆく岬みさきの村の大事件を、さかのぼって子どもたちは考えていた。かつて小石先生もこうして運ばれたのだ。怪我けがをしたか、急性の盲腸炎もうちようえんか。

なんじやろう？

だれぞ盲腸の人、おったかいや？

あとから追いついてきた男の子もいつしよにかたまつてひょうじ評ひょう

定ようした。女はだれも声をたてず、男の子がなにかいうたびにその顔に目をそそいだ。そんななかで松江はふと、今朝けさ家を出かけるときの母の顔を思い浮かべた。瞬間、黒いかげのさしたような不安にとらわれたが、そんなはずはないのだと、つよくうち消した。しかし、頭痛がすると顔をしかめ、手ぬぐいできつくきつくはちまきをした、その結び目のところの額ひたいによつていた、もりあがった皺しわを思い出すと、なんとなくはら払いきれぬ不安がせまつてきた。はじめに、今日きょうは父に休んでもらいたいといった母、しかし父は仕事を休むわけにはいかなかった。

「松江を休ませりや、ええ」

父が、そういうと、そんならええといい、松江にむかつて、

「学校、はじめてなのになア。だけんど、遊ばんともどつてくれなあ」

思いだして松江はどきどきしてきた。するといつのまにか足は、みんなの先を走りだしていた。ほかの子どももついて走った。足がもつれるほど走りつづけて、ようやく岬の家並やなみを見たときには、松江のひざはがくがくふるえ、肩かたと口とでいきをしていた。村のとつつきがよろずやであり、そのとなりのわが家に、おしめがひらひらしているのを見て、安心したのである。しかし、その安心で泣きそうになった彼女は、こんどは心臓がとまりそうになった。

井戸ばたにるのが母ではなく、よろずやのおばさんだと気がついたからだ。はずんだ石ころのように坂道をかけおりた松江は、わが家の敷居しきいをまたぐなり、走ってきたそのままの足のはこびで、母のねている納戸なんどにとびこんだ。母はいなかった。

「お母さん……」

ひっそりとしていた。

「おかあ、さん」

泣き声になった。よろずやのほうから赤ん坊の泣くのが聞こえた。

「うわあ、わあ、おかあさーん」

力のかぎり大声で泣き叫ぶさけ松江の声は、空にも海にもひびけと

ばかりひろがっていった。

## 六 月夜の蟹かに

五年生の教室は川つぷちに新らしく建たった校舎のとつつきであった。川にむかった窓からのぞくと、おくみ枉のような形の、せまい三角地をはさんで、高い石垣いしがきは川床かわどこまで直角に築かれていた。危険防止の土手どては地面から三尺ほどの高さでめぐらしてあったが、土手どてはあまり用をなさず、子どもらはわずかな遊び時間をもかつてに石垣をつたって、川の中へおりていった。おもに男の子だった。川上に家は一軒もなく、ちろちろの水はきれいだった。山か

ら流れてきてはじめて、ここで人の肌はだにふれる水は、おどろくほど、つめたく澄すみきつていた。子どもらにとつては、ただ手足をふれているだけで、じゆうぶん満足のできる、こころよい感かんしよ触くであつた。水はここではじめて人の手にふれ、せきとめられて濁にごつた。だれがいいだしたのか鰻うなぎがいるという噂うわさがたつてから、子どもたちの熱意は川底に集まり、毎日土手どての見物と川の漁師とのあいだで時ならぬやりとりがつづいた。川床かわどこの石をめくつては、まだ一度もとれたことのない鰻をさがしているのだが、出てくるのは蟹かにばかりである。それでもけっこうおもしろいらしく、漁師も見物もふえるばかりだつた。くるぶしをかくしかねるほどの水量は、遊び場としても危険はなく、だから小石先生もだまっ

て眺<sup>なが</sup>めていた。

「せんせ、ズガニ あげよか」

保<sup>ほご</sup>護<sup>しよく</sup>色<sup>いろ</sup>なのか泥<sup>どろ</sup>色<sup>いろ</sup>をして、足にあら毛のある蟹をつかま

えて、うで一ぱいさし出したのは森岡正だった。

「いらん、そんなもん」

「たべられるのに、せんせ」

「いやだ、そんなもんたべたら、足や手にヒゲがはえるもの」

川底と土手からどつと笑い声がおこった。窓ぎわの先生もちろん笑いころげたのだが、ついさっきまでの先生は、そんな笑いとは遠い気持で、窓の外にくりひろげられた風景を眺めていたのであった。川の中でも土手の上でも、岬<sup>みさき</sup>の子どもらは知らずし

ずかたまっていた。だが、そこに松江の姿は見る事ができない。その目に見えぬ姿が、ときどき先生の心を占せんり領りょうしてしまおうのだ。

母親がなくなつてから、松江は一度もこの教室に姿をあらわさなかつた。窓ぎわの、前から三番目の松江の席は、もう二か月もからつぽのままである。入学の日のことを思いだして、百合ゆりの花の絵のついた弁当箱をみやげに松江の家をたずねたのは、彼女の母親がなくなつてからひと月ぐらいたつていた。ちようど川本大だ工いくも家いにいて、男泣きに泣きながら、赤ん坊が死なないかぎり、松江を学校にはやれぬといった。あまりに事情が明めい白はくなので、それでも松江を学校によこせとはいえず、だまつて松江の顔のみ

た。小さな赤ん坊をおぶったまま、父親のわきにちよこんとすわつて松江もだまつていた。へんにまぶたのはれて見える顔は、頭のはたらきを失つたようにぼんやりしていた。その膝ひざの上へ、「マツちゃん、これ、百合の花の弁当箱よ。あんたが学校にこられるようになったら、つかいなさいね」

あまりうれしそうにもせず、松江はこつくりをした。

「早く、学校へこられるといいわね」

いってしまつて、はつとした。それは赤ん坊に早く死ねということになるのだ。思わず赤くなつたが、松江たち父子おやこには、はつきりひびかなかつたらしく、ただ感謝かんしゃのまなざしでうけとられた。

まもなく、赤ん坊がなくなつたと聞き、松江のためにほつとしたのだが、松江はなかなか姿を見せなかつた。マスノヤコトエたちにようすをきいてもらちがあかず、先生はどうとう手紙をかいた。十日ほどまえになる。

——松江さん、赤ちゃんのユリエちゃんは、ほんとに　かわいい  
　　そうなことをしましたね。でももう　それはしかたがありません  
　　んから、心の中でかわいがってあげることにして、あなたは元  
　　気をだしなさいね。学校へは、いつからこられますか。先生は、  
　　まい日マツちゃんのからっぽのせきを見ては、マツちゃんのこ  
　　とを考えています。

早くこい　こい　マツちゃん。早くきて　みんなといっしよに、  
べんきようしましょう。――

手紙は松江の家といちばん近いコトエにことづけた。しかしこの手紙が、松江にとってどれほど無理むりな注文であるかを先生は知っていた。赤ん坊のユリエはいなくなっても、松江にはまだ弟ていま妹いが二人あった。五年生になったばかりの彼女は、幼い頭脳ずのうと小さなからだで、むりやり一家の主婦の役をうけもたされているのだ。どんなにそれがいやでも、ぬけだすことはできない。父親をはたらきに出すためには、小さな松江がかまどの下をたき、すぎせんたくもせねばならぬ。ひよこのようにきようだい三人よ

りあつて、父親の帰りをまつているだろうあわれな姿が目の前にちらつく。法律ほうりつはこの幼い子どもおさなを学校にかよわせることを義務むづけてはいるが、そのために子どもを守る制度はないのだ。

翌日、コトエは先生の顔を見るなり報告した。

「先生、きのうマツちゃん家くへ手紙をもつていったら、知らんよその小母さんおぼがきとつた。マツちゃんおりますか、いうたら、おりませんいうたん。しかたがないから、これマツちゃんにわたしで、いうて、その小母さんにたのんできたん」

「そう、どうもありがとう。マツちゃんのお父さんは？」

「知らん。見えなんだ。——その小母さん、おしろいつけて、きれい着物きとつた。マツちゃん家くへ嫁よめにきたんとちがうかつて、

小ツルさんがいうんで」

コトエはちよつとはにかみ笑いをした。

「そうだと、マツちゃんも学校へこられていいけどね」

それからまた十日以上たつたが、松江は姿を見せない。手紙はよんだらうかと、ふと心にかげのさす思いで、窓の下を見ていたのだつた。ズガニを三匹とつた正は、それをあき缶かんに入れて得とくと々くとして石垣いしがきをのぼってきた。三角形の空地にある杏あんずの木は夏にむかつて青々としげり、黒いかげを土手どての上におとしている。そのま下にかたまつて、岬組みさきの女生徒たちはズガニの勇士を迎え、われがちにいった。

「タンコ、一ぴきくれなア」

「うちにも、くれなア」

「わたしにもな」

「やくそくど」

蟹は三匹かになのに希望者は四人なのだ。正は考えながらあがつてきて、

「食うか、食わんのか」

みんなの顔を見まわした。食うものにやろうと思つたのだ。いち早く小ツルが、

「食う食う。月夜の蟹は、うまいもん」

それをきくと、正はにやりとし、

「うそつけえ、蟹がうまいんは、やみ夜のこつちや」

「うそつけえ、月夜じゃないか」

「ああ聞いた、あ聞いた。月夜の蟹はやせて、うも（うまく）ないのに」

正が確かくしん信をもつていうと、小ツルもまけようとしなない。同じように正の口まねで、

「ああ聞いた、あ聞いた。月夜の蟹がうまいのに。ためしに食うてみる、みんなくれ」

「いや、こんな川の蟹でわかるかい。海の蟹じやのうて」

それをきくと女組がわあわあさわぎたて、窓の先生にむかつて口ぐちにきいた。

「せんせ、月夜の蟹とやみ夜の蟹と、どっちがおいしいん？」

「せんせ月夜じゃなあ」

マスノや小ツルやミサ子たちだった。

「さあ、ねえ。やみ夜のように思うけど……」

男組がわあつときた。

「ほらみい、ほらみい」

こんどは先生は笑いながら、

「でも、月夜のような気もする……」

女組が両手をあげ、とびとびしてよろこんだ。そうしてさわぐことがおもしろく、だれもそれを本気にして考えてはいなかったのだが、正だけは熱心に先生を見あげ、

「馬鹿ばかいな先生！」

すると女組がまた、わあつときた。

「先生を馬鹿じゃとい」

「ほう、タンコは先生を馬鹿じゃとい」

正は頭をかき、みんなのしずまるのをまっつて、やつぱりしんけんにいった。

「ほたつて先生、それにやわけがあるんじやもん。月夜になるとな、蟹は馬鹿じゃせに、わがの影法師かげぼうしをお化けばかと思つてびつくりして、やせるんじや。やみ夜になると、影法師がうつらんさかい、安心してみがつくんじやど。だから、月夜は蟹が網あみにかかつても逃がしてやるんじやないか。かすかすで、うまないもん。やみ夜までおくと、しこしこのみがついて、うまいんじや。ほん

まじやのに、せんせ。うそじや思うなら、ためしてみるとええ」

「じやあ、みんなでためしませうね」

じようだんにそういつて、その日はすんだのだが、翌々日、森岡正はほんとに月夜の蟹をもつてきた。一時間目の算数がはじまるまえ、ひようたん籠かごをつき出したのである。

「せんせ、蟹かに。月夜の蟹。やせて、うもない月夜の蟹」

それは今朝けさとれたばかりで、まだ生きていた。がさごそと音がしている。みんな笑った。

「ほんとにもつてきたの。タンコさん」

先生も笑つて、しかたなさそうに受けとつた。蟹は、この期ごになつてもまだじぶんの運命をなんとかして打開だかいしようともいう

ように、せまい籠かごの中をがさごそ這はいまわっていた。どういうわけか、二匹とも、大きな鋏はさみを片方だけでもぎとられたあわれな姿で、残った片方の鋏を上に向け、よらばはさむ構えで泡あわをふいている。

「かわいそうに、これ先生がたべるの？」

「うん、約束やくそくじゃもん」

「逃がしてやりましょうよ」

「いや、約束じゃもん」

正はうしろをふりむいて「なあ」とみんなのさんせいを求めた。男の子は手をたたいてよろこんだ。

「じゃあこうしましょう。あとで小使こづかいさんにこれをにてもらい、今日の理科の時間に研究しようじゃないの。それから、蟹かについで

う題で綴つづりかた方も書いてくるの」

「はい」

「はい」

大さんせいだった。籠は窓ベリの柱の釘くぎにかけられ、その時間中蟹はがさごその音を立てつづけてみんなを笑わせた。

時間がすむと、先生はひょうたん籠をはずし、じぶんで小使室のほうへ歩いていった。小ツルとコトエが用ありげについてきて、「せんせ」と呼びかけ、ふりむくのをまっつて、

「マツちゃんのこと」といった。

「マツちゃん？」

「はい。マツちゃん、ゆうべの船で、大阪へいったん」

「ええっ」

思わず立ちどまった先生の顔を見あげながら、コトエが、一生けんめいの顔で、

「しんるいの家へ、子にいったん」

「まあ」

「それで、マツちゃん家く、おっさんと男の子と残ったん」

「そう、マツちゃん、うれしそうだった？」

コトエは答えずに、かぶりをふった。小ツルがかわって、

「マツちゃん、行かんいうて、はじめ、庭の口の柱に抱えついて泣いたん。マツちゃん家くのお父さんがよわって、はじめはやさしげにすかしたけど、なかなかマツちゃんがはなれんで、あと

は頭にげんこつかましたり、背中をどづいたりしたん。マツちゃん、おいおい泣いてみんなが弱つとつた。よろずやのばあやんが、ようやつとすかして、得とくしん心さしたけんども、みんなもらい泣きしよつた。わたしも涙なみだが出てきて弱つた。途とちゆう中まで、みんなと見おくつていったけんども、マツちゃん一口もものいわなんだ。なあコトやん。そいで……」

きゆうにハンカチを顔にあてて、くつくつと泣きだした先生におどろいて、小ツルはだまつた。いつのまにか早苗やマスノもよつてきて、片手にひょうたん籠かごをもつたまま、うつむいてハンカチを目にあてている先生を、うたてげに見ていた。みんなの目にも、さそわれた涙がもりあがっていた。

そのあともしばらくは、窓ぎわの前から三番目の松江の席はあいたままおかれてあつたが、あるとき、その、松江のたつた一日すわつた席に先生はだまつて腰こしかけていた。そのあとすぐ席の組みかえがあつて、その列は男の子になつた。それきり松江の噂うわさは出なかつた。先生もきかず、生徒もいわず、松江からの便たよりもなかつた。もうみんなの心から、松江の姿は追いだされたのである。別れのあいさつにもこずに、どこかへいってしまった五年生の女の子。……

そして、もうすぐ六年生に進級するとういう三月はじめてあつた。春は目の前にきていながら珍めずらしく雪の降ふる中を、ひとバスおく

れた大石先生は、学校前の停留所ていりゆうじよから傘かさもささずに走つて、職員室にとびこんだたん、異様な室内いようしつないの空気に思わず立ちどまり、だれに話しかけようかというふうに十五人の先生たちを見まわした。みんな心配そうな、こわばった顔をしていた。

「どうしたの？」

同僚どうりょうの田村先生たむらにきくと、しつ というような顔で田村先生は奥おくまった校長室に、あごをふった。そして小さな声で、

「片岡先生かたおかが、警察にひっぱられた」

「えっ！」

田村先生はまた、しずかに、というふうにこまかく顔をふりながら、

「いま、警察がきてるの」

また校長室を目顔めがおでおしえ、つい今のさつきまで片岡先生の机をしらべていたのだとささやいた。全然、だれにもまだことの真相は分かっているいらしく、火鉢ひばちによりあつて、だまっていたが、始業のベルでようやく生きかえたように、廊下ろうかへ出た。田村先生と肩かたをならべると、

「どうしたの」

まっさきき大石先生はきいた。

「あかだつていうの」

「あか？ どうして？」

「どうしてか、しらん」

「だって、片岡先生があか？ どうして？」

「しらんわよ。わたしにきいたって」

ちようど教室の前へきていた。笑つて別れはしたが、二人とも心にしこりは残っていた。まだなんにも知らないらしい生徒は、雪に勢いづいたのか、いつもより元氣に見えた。ここに立つと、すべての雑念ざつねんを捨てねばならないのだが、教壇きょうだんにたつて五年間、大石先生にとつてこの時間ほど、永くなが感じたことはなかった。一時間たつて職員室にもどると、みんな、ほつとした顔をしていた。

「警察、かえつたよ」

笑いながらいったのは、若い独身の師範出しはんの男先生である。彼

はつづけて、

「正直にやると馬鹿みるつちゆうことだ」

「なんのこと、それ。もっと先生らしく……」

突っつかれて大石先生はいうのをやめた。突っついたのは田村先生だった。

教頭きょうとう

が出てきての説明では、片岡先生のは、ただ参考人というだけのことで、いま校長がもらいさげにいったから、すぐ帰ってくるだろうといった。問題の中心は片岡先生ではなく、近くの町の小学校の稲川いながわという教師が、受けもちの生徒に反戦思想を吹きこんだという、それだった。稲川先生が片岡先生とは師範学校の同級生だというので、一おうしらべられたのだが、なんの

関係もないことがわかったというのである。つまり、証拠しょうこになるものが出てこなかったのだ。そのさがしている証拠品しょうこひんというのは、稲川先生が受けもっている六年生の文集『草の実くさのみ』だというのである。それが、片岡先生の自宅にも、学校の机にもなかったのだ。

「あら、『草の実』なら見たことあるわ、わたし。でも、どうしてあれが、あかの証拠しょうこ」

大石先生はふしぎに思っしてきいたのだったが、教頭は笑わらって、「だから、正直者が馬鹿ばかみるんですよ。そんなこと警察に聞かれたら、大石先生だだってあかにせられるよ」

「あら、へんなの。だだってわたし、『草の実』の中の綴つづり方を、

感心して、うちの組に読んで聞かしたりしたわ。『麦刈り』<sup>むぎか</sup>だの、

『醤油屋の煙突』<sup>しょうゆや えんとつ</sup>なんていうの、うまかった」

「あぶない、あぶない。あんたそれ（『草の実』）稲川くんにも  
らったの」

「ちがう。学校あておくつてきたのを見たのよ」

教頭はきゆうにあわてた声で、

「それ、今どこにある？」

「わたしの教室に」

「とつてきてください」

とうしゃばん  
膳写版の『草の実』は、すぐ火鉢<sup>ひばち</sup>にくべられた。まるで、ペ

スト菌<sup>きん</sup>でもまぶれついているかのように、あわてて焼かれた。茶

色つぽい煙けむりが天てんじょう井いにのぼり、細くあけたガラス戸のあいだから逃げていった。

「あ、焼かずに警察へ渡せばよかつたかな。しかし、そしたら大石先生がひっぱられるな。ま、とにかく、われわれは忠君愛国でいこう」

教頭のことばが聞こえなかつたように、大石先生はだまつて煙のゆくえを見ていた。

翌日の新聞は、稲川先生のことを大きな見出しで「純真たましいなる魂たましいを蝕むしばむ赤い教師」と報じていた。それは田舎いなかの人びとの頭げんを玄げん翁うでどやしたほどのおどろきであつた。生徒の信しん望ぼうを集めていたという稲川先生は、一朝にして国賊こくぞくに転落てんらくさせられたの

である。

「あ、こわい、こわい。沈香じんこうもたかず、屁へもこかずにいるんだな」

つぶやいたのは年とつた次席訓導くんとうだった。ほかの先生はみな、意見も感想ものべようとはしなかった。そんななかでひとり大石先生は、大げさな新聞記事のなかの、わずか、四、五行のところから目がはなれなかった。そこには、稲川先生の教え子たちが、ひとり一つずつの卵をもちよつて、寒い留置場りゆうちじょうの先生に差し入れてくると、警察へ押しかけたことが書かれていたのだ。

今日きょうはもう出勤しゅつぎんした片岡先生はきゆうに英雄えいゆうにでもなつたように、引っぱりだこだった。どうだった？ の質問しつもんに答え

て、一日でげっそり頬ほおのおちた彼は、青いひげあとをなでながら、

「いや、どうもこうも、いま考えるとあほらしいんじゃないやけどな、

すんでのことにあかにならされるとこじやった。稲川は、君が会

合に出たのは四、五回じゃというがだの、小林多喜二こばやしたきじの本をよん

だろうとかつて。ぼくは小林多喜二なんて名前もしらん、いうた

ら、この野郎、こないだ新聞に出たじゃないかって。いわれてみ

りやあ、ほら、ついこないだ、そんなことが出ましたな。小説家

で、警察で死んだ人のことが」(ほんとうは拷問ごうもんで殺されたの

だが、新聞には心臓まひで死んだと報じられた)

「ああ、いたいた。赤い小説家だ」

若い独身の先生がいった。

「そのプロレタリヤ何とかいう本を、たくさんとられとりました。あの稲川は師範しはんにいるときから本好きでしたからな」

その日国語の時間に、大石先生は冒険ぼうけんをこころみてみた。生徒たちはもう『草の実』とその先生のことを知っていたからだ。

「家で、新聞をとってる人？」

四十二人のうち三分の一ほどの手があがった。

「新聞をよんでいる人？」

二、三人だった。

「あかつて、なんのことか知ってる人？」

だれも手をあげない。顔を見あわせているのは、なんとなく知っているが、はつきり説明できないという顔だ。

「プロレタリアって、知ってる人？」

だれも知らない。

「資本家は？」

「はい」

ひとり手があがった。その子をさすと、

「金もちのこと」

「ふーん。ま、それでいいとして、じゃあね、労働者は？」

「はい」

「はい」

「はい」

ほとんどみんなの手があがった。身をもって知っており、自信

をもつて手があがるのは、労働者だけなのだ。大石先生にしても、そうであった。もしも生徒のだれかに、答えを求められたとしたら、先生はいったろう。

「先生にも、よくわからんのよ」と。

まだ五年生にはそれだけの力がなかったのだ。ところがすぐそのあと、このことについては、口にすることをとめられた。ただあれだけのことがどこからもれたのか、大石先生は校長によばれて注意されたのである。

「気をつけんと、こまりまっそ。うかつにものがいえんときじやから」

校長とは、父の友人というとくべつの関係だから、それだけで

すんだらしい。だがこのことは、明かるい大石先生の顔をいつとなくかげらすもとなつた。たいして気にもとめていなかつた『草の実』のと同じく、消しがたいかげりをだんだんこくしていった。

六年生の秋の修学旅行は、時節じせつがらいつもの伊勢いせまいりを取りやめて、近くの金毘羅こんびらということにきまつた。それでも行けない生徒がだいぶいた。働きにくらべて儉約けんやくな田舎いなかのことである。宿屋にはとまらず、三食分の弁当をもつてゆくということ、よくやく父兄のさんせいを得た。それでも二組あわせて八十人の生徒のうち、行けるといふのは六割だつた。ことに岬みさきの村の子ども

らときたら、ぎりぎりの日まできまらず、そのわけを、おたがい  
にあげきだしては、内情をぶちまけた。

「先生、ソソキはな、ねしよんべんが出るさかい、旅行に行けん  
ので」

マスノがいう。

「だって、宿屋にはとまらないですよ。朝の船で出て、晩ばんの船で  
もどってくるのに」

「でも、朝の船四時だもん、船中でねるでしょう」

「ねるかしら、たった二時間よ。みな、ねるところでないでしょ  
うに。それよりマスノさんは、どうしてゆかんの」

「風邪かぜひくといかんさかい」

「あれあれ、大事なひとり娘むすめ」

「そのかわり、旅行のお金、倍にして貯金ちよきんしてもらうん」

「そうお、貯金はまたできるから、旅行にやってつて、いいなさいよ」

「でも、怪我けがするといかんさかい」

「あら、どうして。旅行すると、風邪かぜひいたり怪我したりするんなら、だれもいけないわ」

「みんな、やめたらええ」

「わあ、お話にならん」

先生はにが笑いをした。

「先生、ぼくはもう、金毘羅こんびらさんやこい、うちの網船あみぶねで、三べ

んもいったから、いきません」

森岡正がそういつてきた。

「あらそう。でもみんなといくの、はじめてでしょう。いきなさいよ。あんたは網元だからこれからだって毎年いくでしょうがね。先生いつとくから。修学旅行の金毘羅こんびらまいりが一ばんおもしろかった、とあとできつと思えますからね」

加部小ツルは、じぶんも行かないといいながら、やはり行かない木下富士子のことを、こんなふうにいった。

「せんせ、富士子くさん家、借しゃく銭せんが山のようにあつて旅行どころじゃないん。あんな大きな家でも、もうすぐ借銭のかたにとられてしまうん。家く中、もう、なんちや売るもんもないんで」

「そんなこと、いわんものよ」

かるく背中をたたくと、小ツルはぺろつと舌を出す。

「いやな子！」

そういいながら思いだすのは富士子の家だった。はじめて岬へ赴任したときでも、もう明日にも人手に渡りそうな噂だったその家は、蔵の白壁が北側だけごっそりはげていた。古い家に生まれた富士子は、いかにもその家柄を背負ったように落ちつきはらっていて、めつたに泣かず、めつたに笑わない少女だった。小ツルなどからあからさまなことをいわれても、じろりと冷たい目で睨みかえす度胸は、だれにもまねのできないものだ。「くさっても鯛」という彼女のあだ名は、彼女の父の口ぐせからきてお

り、彼女はそれに満足しているところがみえた。

そこへゆくと小ツルなどはさっぱりしたもので、人のこともいうが、じぶんのことをいわれても、べつに気にとめないふうだった。一家そろってはたらき、そのはたらきを おもてかんばん 表看板にして裏も表もなかった。たとえば小ツルのあだ名は「目つつり」といわれている。たいしたきずではないが、まぶたの上のおできのあとがひつつれていいるからだ。ふつうなら、ことに女の子は「目つつり」などとなぶられれば泣きたくなるだろうが、小ツルはちがっていた。まるで人ごとのようにわだかまりのないようすで、「目つつり目つつりと、やすやすいうてくれな。目つつりも、なろうと思うてなれる目つつりとちがうぞ」

それは彼女の母たちがそういつていたからであろう。旅行にゆけないわけをも、彼女はぎつくばらん<sup>く</sup>にいうのだ。

「わたしン家<sup>く</sup>なあ先生、こないだ頼<sup>たの</sup>母子講<sup>もしこう</sup>をおとして、大きい船を買うたん。だから、儉<sup>けん</sup>約<sup>やく</sup>せんならんの。こんぴらまいりは、じぶんで金もうけするようになってから、いくことにきめた」

それで他人のふところも遠<sup>えん</sup>慮<sup>りよ</sup>なくのぞきこんで、人のことはいうなといっても平気でいう。ミサ子が行かないのはよくばりだからだの、コトエや早苗はきょうだいが多くて、旅行どころでなかろうとかと。

ところが前々日になると、旅行志望者はきゆうにふえて、岬<sup>みさき</sup>ではマスノをのけてみんながゆくということになった。

そのきつかけは、だまりやの吉次が、山出しをしてもうけた貯ち金よきんをおろして申しこみをしたことにあるようだった。吉次がゆけば、どうしたってだまっていられないのがソソキであつた。磯い吉そきちは、じぶんも豆腐とうふや油あげを売り歩いてもらった歩金ぶきんを貯金ちきんしていたのだ。ソソキさえも行くとなると、どうしたって正や竹一がやめるわけにはゆかない。正も綱ひきで、もうけた貯金を思いいだすし、竹一も卵を売つてためた金でゆくといいだした。儉約な岬の村の子どもらは、こんなことで貯金をおろすことを思いつかなかつたのだ。正など、おろさなくてもよいといいわれながら、どうしてもおろすのだといいつて、竹一といいつしよにわざわざ郵便局へいいつたりした。

男の子のほうがそうになると、女の子のほうもだまっぺいられない。いちばん心配のないミサ子は、富士子をさそつた。二人の母親たちが仲がよかつたからだ。螺鈿らでんの硯すずりばこ箱が富士子には知らせずミサ子の家へゆき、それで富士子はゆけることになった。二人のことがわかると、じつとしていられなくなったのは小ツルである。彼女はさつそくさわぎでした。

「ミイさんも富士子さんも旅行に行くウ。うちも貧乏びんぼう質しちにおいて、やってくれエ」

小ツルはほんとうにそういつて、地だんだふんで泣いた。そのために彼女の細い目はよけい細く、はれぼつたくなつた。小ツルの母親は、小ツルとそつくりの目を糸のようにして笑いだし、む

つかしい問題を出した。

「ミイさんところは金もちじゃし、富士子さんところはおまえ、なんというたつて庄屋しようやじゃもん。あんな旦那衆だんなしゆうのまねはできん。じゃがな、もしもコトやんが行くんなら、小ツもやってやる。一ぺんコトやんと相談してこい」

とうていコトエはゆくまいと思つてそうだったのであろう。ところが、走つていった小ツルはにこにこしてもどつてきた。はあはあ肩かたでいきをしながら、

「コトやん、いくいうた」

「ほんまかいや」

「ほんま、ばあやんがおつてそういうたもん」

あまりのかんたんさに小ツルの母親はうたがいをもち、ききにいった。出しゃばりの小ツルがそんなふうにもつていったのではないかと思つたのである。

「うちの小ツが、しゃしゃり出たこといいにきたんじやないかえ」  
さぐるようにいうと、漁師なみに陽ひやけしたコトエの母は、まっ白くみえる歯を見せて笑い、

「一生に一ぺんのことじや、やってやりましょいな、こんなときこそ。いつも下子したこの子守りばかりさして、苦労さしとるもん」  
「そりや、うちの小ツも同じこつちや。しかし、なに着せてやるんぞな？」

「うちじやあ、思いきつて、セーラー買うてやろうと思う」

「はした金じゃ、買えまいがの」

「ま、そんなこといわんと、買うてやんなされ、下子したこも着るがいの」

「ふーん」

「早苗さんも、そうすることにしたぞな。小ツやんにもひとつ、ふんぱつしてあげるんじやな」

「そうかいの。早苗さんも、のう。そうなると、小ツもじつとしておれんはずじゃ。やれやれ。そんならひとつ、貧乏びんぼう質におこ  
うか」

「こないきさつがあつたのだ。ところが、当日になると、早苗は、風邪かぜぎみでゆけないといった。しかし早苗はのどが痛いので

も、鼻がつまっていたのでもない。痛かったり、つまったりしたのは、お母さんの財布さいふの口のほうで、早苗のために売りにいった珊瑚さんごの玉のついたかんざしは思う値ねで売れず、洋服を買うことができなかったのだ。人の足もとをみてからにと、早苗の母は、その古手屋（古物商）のことをいつまでもおこりながら、早苗にはやさしく、

「着物きて、いくか」

早苗が泣きそうな顔を見ると、

「姉ねえやんの、きれいな着物に腰こしあげして着ていくか」

「……………」

「おまえだけ着物きていくのがいやなら、やめとけ。そのかわり、

洋服を買おうや。どうする？」

「……………」

早苗はほろつと涙をこぼし、くいしばった口もとをこまかくふるわせていた。二つのうちどちらをとってよいか判断がつかなかったのだ。しかし母親のこまって泣きそうな顔に気づくと、きゆうに早苗の決心はついた。

「旅行、やめる」

こないきさつがあつたとは、だれもしらず、修学旅行は六十三人の一団で出発した。男と女の先生が二人ずつで、もちろん大石先生も加わっていた。午前四時にのりこんだ船の中ではだれも眠ろうとする者はなく、がやがやのさわぎの中で、「こんぴらふ

ねふね」を歌うものもいた。

そんななかで、大石先生はひとり考えこんでいた。その考えから、いつもはなれないのが早苗だった。

ほんとに、風邪かぜけだったのかしら。

早苗のほかにも、十幾じゅういくにん人かの子どもがそれぞれの理由で旅

行にこられなかったのだが、とくべつに早苗が気になるのは、岬みさきの生徒で、彼女ひとりが不参加だからかもしれない。六年になって

から、マスノはすっかり母たちの家へ移っていたので、もう岬の仲間ではなくなっていた。たったひとり、あの岬の道を学校へゆ

く今日きょうの早苗を思うと、今日を休みにしなかったことが、かわいそうに思えた。先生もいない教室でしょんぼり自習じしゅうしている生

徒たちを思うと早苗ばかりでなく、かわいそうだった。

こんぴらは多度津たどつから一番の汽車で朝まいりをした。また「こんぴらふねふね」をうたい、長い、石段をのぼってゆきながら汗あせを流しているものもある。そんななかで大石先生はぞくりとふるえた。屋島やしまへの電車の中でも、ケーブルにのってからも、それはときどき全身をおそった。膝ひざのあたりに水をかけられるような不気味さは、あたりの秋色をたのしむ心のゆとりもわかず、のろのろと土産物屋みやげにはいり、同じ絵はがきを幾組いくくみも買った。せめて残っている子どもたちへのみやげにと思ったのである。

屋島をあとに、最後のスケジュールになっている高松たかまつに出、栗林公園りつりんこうえんで三度目の弁当をつかったとき、大石先生は、大か

た残っている弁当を希望者にわけて食べてもらったりした。弁当までが心の重荷になっていたことに気づき、それでほっとした。夕やみのせまる高松の街を、築港ちっこうのほうへと、そろそろ歩きながら、早く帰って思うさま足をのばしたいと、しみじみ考えていると、

「大石先生、あおい顔よ」

田村先生に注意されると、よけいぞくりとした。

「なんだか、疲れましたの。ぞくぞくしてるの」

「あら、こまりましたね。お薬は？」

「さつきから清涼丹せいりょうたんをのんでますけど」といいさして思わず

ふっと笑い、

「清涼でないほうがいいのね。あつういウドンでも食べると……」  
 「そうよ。おつきあいするわ」

そうはいったが前にもうしろにも生徒がいる。それを棧橋さんばしの待合所までおくつてからのことにした。男先生たちに事情をいつて、一人ずつそつとぬけだし、目だたぬよう大通りをすぐ横町にはいった。そこでも土産物やたべものの店がならんでいた。軒のきの低い家並やなみに、大提灯おおちようちんが一つずつぶらさがっていて、どれにもみな、うどん、すし、さけ、さかななどと、太い字でかいてあつた。せまい土間の天井を季節の造花もみじで飾かざつてある店を横目で見ながら、

「大石先生、うどんや風ぐすりというのがあるでしょ、あれもら

「つたら？」

「そうね、と、返事をしようとしたとたん、

「てんぷら 一 丁 ツ！」

威勢いせいのよい少女の、よくひびく声が大石先生をはつとさせた。

あつと叫さけびそうになったほど、心にひびく声であった。このあたりにはめずらしい、縄なわのれんの店の中からそれはひびいてきたのだった。思わずのぞくと、髪かみを桃ももわれにゆったひとりの少女が、ビラビラかんざしといっしよに造花のもみじを頭にかざり、赤い前かけに両手をくるむようにして、無心な顔で往來おうらいのほうを向いて立っていた。それはどうしても、大石先生として見のがせぬ姿であった。立ちどまった先生たちを客と見たのか、少女はさつ

きと同じ声で叫んだ。

「いらつしやーい」

それはもう、じぶんの声にさえ、いささかも疑問をもたない叫びであった。日本髪に、ませたぬき衣紋えもんの変わった姿とはいえ、長いまつ毛はもう疑う余地もなかった。

「松江さん、あんた、マツちゃんでしょ」

はいつてきた客に、いきなり話しかけられ、桃われの少女はいきをのんで一足さがった。

「大阪へいったんじやなかったの。マツちゃん、ずっとここにいたの？」

のぞきこまれて松江はやつと思いだしでもしたように、しくし

く泣きだした。思わずその肩をかかえるようにして縄のれんの外につれ出すと、奥からあわただしい下駄げたの音といっしよに、おかみさんもとびだしてきた。

「どなたですか、だまってつれ出されたら、こまりますが」

うさんくさそうにいうのへ、松江ははじめて口をきき、おかみさんのうたがいを打ち消すように小声でいった。

「大石先生やないか、お母はん」

うどんはとうとう食べるひまがなかった。

## 七 羽ばたき

修学旅行から大石先生の健康けんこうはつまずいたようだった。三期にはいつてももなくのこと、二十日近く学校を休んでいる大石先生の枕まくらもとへ、ある朝一通のはがきがとどいた。

拝啓はいけい、先生の御病気はいかがですか。私は毎日、朝礼の時に  
なると、心配になります。大石先生がいないとせえがないと、  
小ツルさんや富士子さんもいつています。男子もそういつてい  
ます。先生、早くよくなつて、早くきてください。岬組みさきはみんな  
心配しています。小夜奈良さよなら。

岬組の生徒たちの真情にふれた思いで、ふと涙なみだぐんだ先生も、

最後の小夜奈良で、思わずふきだした。早苗さなえからだった。

「さよならを、ほら、こんなあて字がはやつてるんよ、お母さん」  
朝食をはこんできた母親に見せると、

「字もうまいでないか、六年生にしちやあ」

「そう、一ばんよくできるの。師範しはんへいくつもりのようにだけど、  
少しおとなしすぎる。あれで先生つとまるかな」

口ではなかなか意志表示いしひようじをしない早苗のことを心配していうと、  
「だけど、おまえ、久子だって六年生ぐらいまでは口数のすくない、愛嬌あいきようのない子だったよ。それがまあ、このせつはどうして、口まめらしいもの」

「そうかしら、わたし、そんなに口くち八丁ちちやう？」

「だって、教師が口が重たかったらこまるでないか」

「そうよ。だからわたし、この山石早苗という子が、きょうだん 教壇に

立ってものがいえるかしらと、心配なの」

「じぶんのこと忘れて。久子だって人の前じゃろくにしょうか 唱歌もう

たえなかつたじゃないか。それでもちやんと、いちにんまえ 一人前になつた

もの」

「ふーん。そうだったわ。いま唱歌すきななの、もしかしたら子ども  
ものときの反動かな」

「ひとりっ子のはにかみもあつたらうがね。そのはがきの子もひとりっ子かい」

「ううん。六人ぐらいのまん中よ。姉さんは赤十字のかんごふ 看護婦だそ

うよ。じぶんは先生になりたいって、それも綴つづりかた方に書いてあるの。きいたって口ではいわないくせに、綴方だと、すごいこと書くのよ。これからは女も職業をもたなくては、うちのお母さんのように、つらい目をする、なんて、よっぼどつらい目をみてるらしいの」

「おまえと同じじゃないか」

「でもわたしは、小さいときからちゃんと人にもいってたわ。先生になる、先生になるって。山石早苗ときたら、何にもいやしない。いつでもみんなのうしろにかくれているみたいなくせに、書かせるとちゃんとしてるの」

「いろいろ、たちがあるよ。こうしてはがきをよこしたりすると

ころ、なかなかうしろにかくれちやいないから」

「そうなの。そして、小夜奈良なんだもの、おもしろい」

はがき一枚につりこまれて思わずすすんだ朝食だった。そのあとも、まるで鏡にでも見入るようにそのはがきを見つめ、やがては子どもたちのことがつきつきと浮かんできた。川本松江はどうしたであろうか。

——てんぷら一丁ツ！

かん高に叫んでいた桃ももわれの娘。棧さんぼし橋前「しまや」という看か

板ばんをおぼえてかえり、手紙を出してみたが、返事はこなかった。

小学校四年生しか修おさめていない子どもには手紙をかくすべもわからなかったのだろうか。それとも本人の手に渡ったかどうかもある

やしい……。あの夜、うさんくさそうに出てきたおかみさんも、事情がわかるとさすがにあいそよく、

「まあま、それはそれは。ようきておくれましたな。さ、先生、どうぞおかけなさんせ」

中へ招じいれ、せまいたたみの縁えんだい台に小さな座ぶとんを出してすめたりした。しかし話をするのはおかみさんばかりで、松江はだまってつつ立つていた。いつのまにか男の生徒が五、六人やってきて、なわ縄のれんの向こうに顔をならべているのを見ると、大石先生は立ちあがらずにいられなかったのだ。

「じゃあまたね。もうすぐ船がくるでしょうから」

いとまをつげたが、べつに見送りにもこなかった。許されなか

つたのであろう。わざとふりむきもせず、さつさと歩きだすと、ぞろぞろついてきた生徒たちは思い思いのことをいった。

「先生、だれかな、あの子？」

「先生、あのうどんやと一家いっけ（親類）かな？」

本校にはたった一日しか顔を出さなかつた松江を、だれも松江と気づいていないのは、その中に岬みさきの子どもがまじつていなかつたからであらう。へたにさそい出したりしなかつたことを、松江のためによるこびながら、今でも一種のもどかしさで思いだされる松江であつた。同じ年に生まれ、同じ土地に育ち、同じ学校に入学した同い年の子どもが、こんなにせまい輪の中でさえ、もうその境きょうかう遇は格段の差があるのだ。母に死なれたということで、

はかりしれぬ境遇の中にほうり出された松江のゆくすえはどうなるのであろうか。彼女といっしょに巣立すだった早苗たちは、もう未来への羽ばたきを、それぞれの環かんきょう境じょうのなかで支度したくしている。将来への希望について書かせたとき、早苗は教師と書いていた。子どもらしく先生と書かずに、教師と書いたところに早苗の精いつぱいさがあり、甘あまつちよろいあこがれなどではないものを感じさせた。六年生ともなれば、みんなはもうエンゼルのように小さな羽を背中につけて、力いっばいに羽ばたいているのだ。

変わっているのは、マスノの志望であつた。学芸会に「荒城の月」を独唱して全校をうならせたマスノは、ひまさえあれば歌をうたい、ますますうまくなっていた。歌にむかうとき彼女の頭脳ずのう

は特別のはたらきをみせ、楽譜がくふをみてひとりで歌った。田舎いなかの子どもとしては、それはじつに珍らしいことだった。彼女の夢ゆめのゆきつくところは音楽学校であり、そのために彼女は女学校へゆくといった。

女学校組はマスノのほかにもサ子がいた。あまりできのよくな  
いミサ子は、受験のための居残り勉強いのこにいんうつな顔をしていた。  
彼女の頭は算数の原理を理解する力も、うのみにする記憶力にも  
かけていた。しかもそれをじぶんでよく知っていて、無試験の裁さ  
縫いはう学校にゆきたがった。だが彼女の母はそれを承知しょうちせず、毎  
日、彼女にいんうつな顔をさせた。なんとかして県立高女に入れ  
たい彼女の母は、熱心に学校へきていた。その熱意で娘の脳みそ

の構造が変わりでもするようになり。それでもミサ子は平気だった。

「わたしな、数字みただけで頭が痛いとくなるんで。県立の試験やこい、だれがうけりや。その日になったら、わたし、病気になつてやる」

彼女は算数のために落第することを見こしているのだ。そこへゆくと、コトエはまるで反対である。家でだれにみてもらうというでもないのに、数の感覚はマスノの楽譜がくふと同じだった。いつもコトエは満点であつた。その他の学課も早苗についてよくできた。彼女ならば女学校も難なんなく入れるであろうに、コトエは六年きりでやめるといふ。あきらめているのか、うらやましそんでもないコトエに、たずねたことがある。

「どうしても六年でやめるの？」

彼女はこつくりをした。

「学校、すきでしょ」

またうなづく。

「そんなら、高等科へ一年でもきたら？」

だまつてうつむいている。

「先生が、家の人にしたのんであげようか？」

するとコトエははじめて口をひらき、

「でも、もう、きまつとるん。約束やくそくしたん」

さびしそうな微笑びしょうを浮かべていう。

「どんな約束？ だれとしたの？」

「お母さんと。六年でやめるから、修学旅行もやってくれたん」  
「あら、こまつたわね。先生がたのみにいっても、その約束、やぶれん」

コトエはうなずき、

「やぶれん」とつぶやいた。そして、前歯をみせて泣き笑いのよ  
うな顔をし、

「こんどは敏江としえが本校にくるんです。わたしが高等科へきたら、  
晩ごはんたくもんがないから、こんどはわたしが飯たき番になる  
んです」

「まあ、そんなら今ごろは四年生の敏江さんがごはんたき？」

「はい」

「お母さん、やっぱり漁に行くの、まい日？」

「はい、大かた毎日」

いつかコトエは綴つづりかた方に書いていた。

私は女に生まれて残念です。私が男の子でないのも、お父さんはいつともくやみます。私が男の子でないのも、漁についていけませんから、お母さんがかわりにゆきます。だからお母さんは、私のかわりに冬の寒い日も、夏の暑い日も沖おきにはたらきにいきます。私は大きくなったらお母さんに孝行つくしたいと思つています。

これなのだ、大石先生はさっした。まるで女に生まれたことをじぶんの責任でもあるように考えているコトエ。それがコトエを、何ごとにもえんりよぶかくさせているのだ。だれがそう思わせたのかといってみてもまにあわぬ。コトエはもう六年生でやめることを、わが身の運命のようにうけいれているのだ。

「でもねコトエさん——」

それはまちがっているのだといおうとしてやめた。感心ね、といおうとしてそれもやめた。気のどくねというのも口を出なかつた。

「残念ですね」

それはいかにも適<sup>てきせつ</sup>切なことばであつたが、コトエはそれにな

ぐさめられ、氣持が明かるくなったらしい。少し反そつ齒ばの大きな前齒をよけいむきだして、

「そのかわり、えいこともあるん。さらい年敏江が六年を卒業したら、こんどはわたしをお針屋はりやへやってくれるん。そして十八になつたら大阪おおさかへ奉公ほうこうにいつて、月給みんな、じぶんの着物買うん。うちのお母さんもそうしたん」

「そしてお嫁よめにゆくのか？」

コトエは一種のはにかみをみせて、ふふつと笑つた。それはもうわが手では動かすことのできぬ運命でもあるように、彼女はそれに服ふく従じゆうしようとしている。そこにはもう、与えられる運命をさらりとうけようとする女の姿があつた。二十はたちにもなれば、

彼女はある日ハハキトクの偽電報一本で奉公先から呼びかえされ、危篤きとくのはずの母たちの膳立ぜんだてのまま、よくはたらく百ひやく姓しょうか漁師の妻になるかもしれぬ。

彼女の母もそうであつた。そして六人の子を生んだ。五人まで女であつたために、それがじぶんひとりの責任であるかのように夫の前で気がねしていた。その気がねがコトエにもうつつて、彼女もえんりよぶかい女になつていた。夫にしたがつて毎日沖に出ている漁師の妻は、女とは思えぬほど陽にやけた顔をし、潮風しおかぜにさらされて髪かみの毛は赤茶けてぼうぼうとしていた。しかもそれで不平不満はなかつたかのように、じぶんの歩いた道をまた娘に歩かせようとし、娘もそれをあたりまえの女の道とこころえてい

る。そこにはよどんだ水が流れの清冽せいれつさをしらないような、古さだけがあつた。正直いぢずな貧しい漁師の一家にとつては、それが円満具足えんまんぐそくのかぎりなのだろうか、ひとりもどかしがる大石先生だつた。さりとしてコトエを高等科に進学させることで、貧しい漁師一家の考えが一新されるものではないと思うと、空を眺ながめてためいきをするよりなかつた。

教師と生徒の關係が、これでよいのかと疑問をもつと、そこに出てくる答は、『草の実』の稲川先生であつた。国賊こくぞくにされ、刑務所けいむしょにつながれた稲川先生は、ときどき獄ごく中ちゆうから、蟻ありのようにこまかい字の手紙を教え子によせるといふことだつたが、なんの変わったこともないありきたりの手紙も、生徒には読んで

聞かされないという噂うわさだった。そんなものであろうか。教室の中で、国定教科書を通してしか結びつくことをゆるされないそらぞらしい教師と生徒の関係、たとえ生徒のほうでかつてに関をのりこえてこようと、上手じょうずに肩すかしをくわさねば、思いがけない落とし穴があることを知らねばならなかった。みんなの耳と目  
が知らずしらず人の秘密をうかがいさぐるようになっていたのだ。  
しかしまた時には、別のことで思いがけないいたずらに引きずりこまれたりもする。病気のためしばらく休むといったとき、小ツルなど、胸もとに手を入れるような無遠慮ぶえんりよさで、ぬけぬけといった。

「先生の病気、つわりですか？」

思わず赤くなると、やんやとはやすものもいた。子どものくせに、と思つたが、かた肩をすかさずに答えた。

「そうなの。ごめんなさい。ごはん食べれないから、こんなにやせたんだもん、少し元気になつてからくるわ」

そのときからのけつきん欠勤だった。休むとせんげん宣言したとき、だれよ

りも心配そうな顔をしたのがやはり早苗だったことなど思いだし、六年前の写真をとりだしてみた。十三枚焼きましをしておきながら、なんとなく渡しそびれてそのままになっている写真は、ふくろ袋のまま写真ブックのあいだにはさまっていた。あどけない顔をならべている中で、小ツルはやはりいちばん大人おとなっぽかった。このときからずぬけて背も高い小ツルは、今ではみんなより二つほども

年上に見えた。おかつぱか横分けにしている中で、彼女ひとり  
支那しなの少女のように前髪まえがみをさげて、ひとり大人ぶっているのだ。  
マスノが岬みさきの道づれでなくなつてから、彼女はひとりいばつてい  
るふうであつた。高等科をおえると産婆さんば学校にゆくのが目的なの  
も、おませな彼女につわりの興味をもたせたのかもしれない。

岬の女子組では、あとに富士子が一人いるが、彼女の方向だけ  
はきまつていなかつた。いよいよ、こんどこそ家屋敷が人手に渡わた  
るといふ噂うわさも、卒業のさしせまつた富士子の動きをきめられなく  
しているのだらうと思うと、コトエと同様、あなたまかせの運命  
が彼女を待ちうけていそうであわれだつた。やせて血のけのない、  
白く粉このふいたような顔をした富士子は、いつも袖口そでぐちに手をひ

つこめて、ふるえているように見えた。陰いんにこもったような冷たい一重ひとえまぶたの目と、無口さだけが、かろうじて彼女の体面を保つてでもいるようだ。

そこへゆくと、男の子はいかにもはつらつとしている。

「ぼくは、中学だ」

竹一が肩かたをはるようになっていうと、正もまけずに、

「ぼくは高等科で、卒業したら兵隊にいくまで漁師だ。兵隊にいったら、下士官かしかんになって、曹長そうちようぐらいになるから、おぼえとけ」

「あら、下士官……」

不自然にことばを切ったが、先生の気持の動きにはだれも気が

つかなかつた。月夜の蟹かにとやみ夜の蟹をわざわざもつてきたような正が下士官志望は思いがけなかつたのだが、彼にとつては大いにわけがあつた。徴兵ちやうへいの三年を朝鮮の兵營へいえいですごし、除隊じよたにならずにそのまま満州事変に出征しゅっせいした彼の長兄が、最近伍長ごちやうになつて歸つたことが正をそそのかしたのだ。

「下士官を志望したらな、曹長までは平ちやらでなられるいうもん。下士官は月給もらえるんど」

そこに出世しゅっせいの道みちを正は見つけたらしい。すると竹一も、まげずに声をはげまして、

「ぼくは幹部候補生かんぶこうほせいになるもん。タンコに負けるかい。すぐに少尉しょういじゃど」

吉次や磯吉がうらやましげな顔をしていた。竹一や正のように、さしてその日の暮しにはこまらぬ家庭の息子むすことはちがう吉次や磯吉が、戦争について、家でどんなことばをかわしているか知るよしもないが、だまっけていても、やがては彼らも同じように兵隊にとられてゆくのだ。その春（昭和八年）日本が国際連盟を脱退だつたいして、世界の仲間はずれになったということにどんな意味があるか、近くの町の学校の先生が牢獄ろうごくにつながれたことと、それがどんなつながりをもっているのか、それらのいつさいのことは知る自由をうばわれ、そのうばわれている事実さえ知らずに、田舎いなかの隅すみのみまでゆきわたった好戦的な空気に包まれて、少年たちは英雄の夢を見ていた。

「どうしてそんな、軍人になりたいの？」

正にきくと、彼はそつちよくに答えた。

「ぼく、あととりじやないもん。それに漁師よりよっぽど下士官のほうがいもん」

「ふーん。竹一さんは？」

「ぼくはあととりじやけど、ぼくじやって軍人のほうが米屋よりえいもん」

「そうお、そうかな。ま、よく考えなさいね」

うかつにもものいえない窮きゆうくつ 屈まげさを感じ、あとはだまって男

の子の顔を見つめていた。正が、なにか感じたらしく、

「先生、軍人すかんの？」ときいた。

「うん、漁師や米屋のほうがすき」

「へえーん。どうして？」

「死ぬの、おいしいもん」

「よわむしじやなあ」

「そう、よわむし」

そのときのことを思いだすと、今もむしやくしやしてきた。これだけの話をとりかわしたことで、もう教頭に注意されたのである。

「大石先生、あかじやと評判になつとりますよ。気をつけんと」

——ああ、あかとは、いったいどんなことであろうか。この、なんにも知らないじぶんがあかとは——

寢床ねどこの中でいろいろ考えつづけていた大石先生は、茶の間にむかつて呼びかけた。

「おかあ、さん、ちよつと」

「はいよ」

立つてはこずに襖ふすま越こしの返事は、火鉢ひばちのわきにうつむいた声であつた。

「ちよつと相談。きてよ」

足音につづいて襖ふすまがあくと、指ぬきをはめた手を見ながら、  
「わたし、つくづく先生いやんなつた。三月でやめよかしら」

「やめる？　なんでもまた」

「やめて一文菓子屋いちもんかしやでもするほうがましよ。まい日まい日忠君愛

「国……」

「これッ」

「なんでお母さんは、わたしを教師なんぞにならしたの、ほんとに」

「ま、ひとのことにして、おまえだつてすすんでなつたじゃないか。お母さんの二の舞まいふみたくないって。まつたくろうが老眼鏡んきようかけてまで、ひとさまの裁縫さいほうはしたくないよ」

「そのほうがまだましよ。一年から六年まで、わたしはわたしなりに一生けんめいやつたつもりよ。ところがどうでしょう。男の子つたら半分以上軍人志望なんだもの、いやんなつた」

「とき世よ時じ節せつじゃないか。お前が一文菓子屋になつて、戦争が終

るならよかろうがなあ」

「よけい、いやだわたし。しかも、お母さんにこりもせず、ふなの船乗りのお婿さんむこもらつたりして、損した。このごろみたいに防ぼう空くう演えん習しゆうばかりあると、船乗りの嫁さんよめ、いのちちぢめるわ。あらしでもないのに、どかーんとやられて未亡人みぼうじんなんて、ごめんだ。そいつて、今のうちに船乗りやめてもらおかしら。二人で百ひ姓やくしやうでもなんでもしてみせる。せつかく子どもが生まれるのに、わたしはわたしの子にわたしの二の舞いふませたくないもん。やめてもいいわね」

早口にならべたてるのを、にこにこ笑いながらお母さんは聞いていたが、やがて、おさな幼い子どもでもたしなめるようにいった。

「まるで、なんもかもひとのせいのように子だよ、おまえは。すきできてもらった婿むこどのでないか。お母さんこそ、文句いいたかつたのに、あのととき。わたしの二の舞いふんだらどうしようと思つて。でも、久子が気に入りの人なら仕方がないとあきらめた。それを、なんじゃ、今さら」

「すきと船乗りはべつよ。とにかくわたし、先生はもういやですからね」

「ま、すきにしなされ。今は気が立ってるんだから」

「気なんか立っていないわ」

学校ではだいぶちがう先生である。しかしそのわがままないかたのなかには、人の命をいとおしむ気持があふれていた。

やがておちついてふたたび学校へかようようにはなつたが、新学期のふたをあけると大石先生はもう送りだされる人であつた。惜しんだりうらやましがる同僚どうりょうもいたが、とくに引きとめようとしなのは、大石先生のことになんとなく目立ち、問題になつてもいたからだ。それなら、どこに問題があるかときかれたら、だれひとりはずきりいえはしなかつた。大石先生自身はもちろん知らなかつた。しいていえば、生徒がよくなつくというようなことにあつたかもしれぬ。

その朝七百人の全校生徒の前に立つた大石先生は、しばらくだまつてみんなの顔を見まわした。だんだんぼやけてくる目に、新しい六年生の一ばんうしろに立つて、一心にこちらを見ている、

背の高い仁太にたの顔がそれとわかると、思わず涙なみだがあふれ、用意していた別れのあいさつが出てこなかった。まるで仁太が総代でもあるように、仁太の顔にむかっておじぎをしたようなかたちで、壇だんをおりた。高等科の列の中から正や吉次や、小ツルや早苗さなえのうるんだまなざしが一心にこちらをみつめているのを知ったのは、壇をおりてからだった。お昼の休みに別棟べつむねにある早苗たちの教室のほうへゆくと、いち早く小ツルが見つけて走ってきた。

「せんせ、どうしてやめたん？」

めずらしく泣きそうにいう小ツルのうしろから、早苗の目がぬれて立っていた。あんなに女学校女学校と、まっさきになつてさわいでいたマスノが、結局は高等科へ残ったというのに、その姿

が見えないことについて、小ツルは例によつて尾ひれをつけていた。

「マアちゃんな先生、おばあさんとお父さんが反対して女学校いくの、やめたん。料理屋の娘が三味線しやみせんというならきこえる（わかる）が、学校の歌うたいになつてもはじまらないわれて。マアちゃんやけおこして、ごはんも食わずに泣きよる。——それから先生、ミサ子さんの学校は女学校とちがうんで。学園で。ミドリ学園ゆうたら、生徒は三十人ぐらいで、仕立屋に毛がはえたよな学校じゃと。そんなら高等科のほうがよかつたのにな、先生」

思わず笑わせられた先生は、笑つたあとでたしなめた。

「そんなふうにもんじゃないわ、小ツヤん。それより、マア

ちやんどうしたの？」

「ふがわるいゆうて、休んどん」

「ふなんかわるないいうて、なぐさめてあげなさい、小ツやんも早苗さんも。それより、富士子ふじこさんどうした？」

「あ、それがなア、先生、びつくりぎようてん、たぬきのちようちんじゃ」

小ツルは声を大きくし、見ひらいても大きくなりつこのない細い目を、無理にひらこうとして眉まゆをつりあげ、

「兵庫ひょうこへ行つたんで。試験休みのとき、うちの船で荷物といつしよに親子五人つんでいったん。ふとんと、あとは鍋なべや釜かまやばつかりの荷物。たんすも大昔のぬりのはげたん一つだけで、あとは

行李こうりじゃった。富士子さんとこの人、みんな荒働あらいきしたことないさかい、いまに乞食こじしきにでもならにやよかろがつて、みな心配しよつた。いんま、富士子さんらも芸者ぐらいに売られにやよかろがつて——」

じぶんとこの運賃うんちん、半分は売れのこりの道具ではらつたことまでしやべりつづける小ツルの肩かたをかるくたたいて、

「小ツルさん、あんたはね、いらんことを、すこし、しやべりすぎない？ あんた産婆さんばさんになるんでしょ。いい産婆さんは、あんまり人のことをいわないほうが、いいことよ、きつと。これね、先生のせんべつのことば。いい産婆さんになつてね」

さすがに小ツルはちよこんと肩をすくめ、

「はい、わかりました」

三日月の目で笑った。

「早苗さんも、いい先生になってね。早苗さんはもつと、おしやべりのほうがいいな。これも先生のおせんべつ」

肩をたたくと、早苗はこっくりしてだまって笑った。

「コトやんにあつたら、よろしくいつてね。からだ大事にして、いい嫁よめさんになりなさいつて。これおせんべつだつて」

小ツルはすかさず、

「先生も、よいお母さんになりますように、これおせんべつです」  
ふざけて先生の肩をたたいた。小ツルはもうほとんど先生と同じ背の高さになっていた。

「はい、ありがとう」

思いきり声をあげて笑った。

高等科になって、はじめて男女別組になった教室には、正たちはいなかった。男の子のほうへいって、とくべつに岬みさきの生徒だけに別れのあいさつをするのも気がすすまず、帰ることにした。

「タンコさんソンキさん、キッチンくんらに、よろしくね。気がむいたら、遊びにきなさいっていつてね」

「先生、わたしらは？」

小ツルはすぐあげ足をとる。

「もちろん、きてちようだい。こいつていわなくても、昔からあんたたちくるでしょう。あ、そうそう」

写真を出して一枚ずつ渡すと、小ツルはきやつきやつとひびきわたる声で笑い、とびとびしてよろこんだ。

その翌日、解ときはなたれたよろこびよりも、大事なものをぬきとられたようなさびしきにがっかりして、昼寝ひるねをしているところへ、思いがけず竹たけいち一と磯いそぎち吉がつれだつてやつてきた。あまりに早いことづけの効目ききめにおどろきながら、みだれた髪かみを結いもせずむかに迎えた。

「ま、よくきてくれたわね。さ、おあがんなさい」

二人は顔を見あわせ、やがて竹一がいった。

「つぎのバスで帰るんです。あと十分か十五分ぐらいだから、あがられんです」

「あらそう。そのつぎにしたら？」

「そしたら、みさき岬へつくのがくろ暗くなる」

磯吉がきつぱりいった。どうやら道々そういう相談をしたらしい。

「あ、そうか。じゃあまって。先生おくつていくから、歩きながら話しましょう」

いそいで髪をなおしながら、

「竹一さん、中学いつから？」

「あさつてです」

その態度はもう、中学生だぞといわんばかりで、手には新らしいぼうし帽子をもっていた。磯吉のほうも見なれぬとりうちぼうし鳥打帽を右手にも

ち、手織り縞しまの着物の膝ひざのところを行儀ぎようぎよくおさえていた。

「磯吉さん、きのう学校休んだの？」

「いいえ、ぼくもう、学校へいかんです」

そして磯吉はきゆうにしやちこぼり、

「先生、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゆ」

膝ひざをまげておじぎをした。

「あら、まだよ。いまいつしよにいきますよ」

泣き笑いしそうになるのをこらえながら、つれだつて出かけた。バスの乗場までは六分かかる。まん中になつて歩きだすと、磯吉はすっぽりと頭を包んだ大きな烏打帽の下から小さな顔をあおの

け、

「先生、ぼく、あしたの晩、大阪へ奉公ほうこうにいけます。学校は主人が夜学へやってくれます」

「あらま、ちつとも知らなかった。きゆうにきまつたの?」

「はい」

「何屋さん?」

「質屋しちやです」

「おやまあ、あんた質屋さんになるの?」

「いえ、質屋の番頭です。兵隊までつとめたら、番頭になれるといいました」

さつきから磯吉はずっと、よそゆきのことばで固くなっている。

それをほぐすように、

「いい番頭さんになりなさいね。ときどき先生にお手紙くださいね。きのう、小ツやんに写真ことづけたでしょ。あのときのこと思いだして」

竹一も磯吉も笑った。

「これ、おせんべつ、はがきと切手なの」

もらいものの切手帖きってちようとはがきを新らしいタオルにそえて包ん

だのを磯吉に渡し、竹一にはノート二冊と鉛筆一ダースを祝った。

「藪入りやぶいなんかでもどったときには、きつといらつしやいね。先

生、みんなの大きくなるのが見たいんだから。なんしろ、あんたたちは先生の教えはじめの、そして教えじまいの生徒だもん。仲

よくしましうね」

「はい」

磯吉だけが返事をした。

「竹一さんもよ」

「はい」

村のはずれの曲がり角にバスの姿が見えると、磯吉はもういちど帽子をとっていった。

「せんせ、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゆ」

いかにも、それは鸚鵡おうむのようなぎごちなさだった。いいおわる  
とすぐ帽子をかぶった。大人おとなものらしい鳥打帽は漫画まんがのこどもの

ようではあったが、似合っていた。新らしい学生帽と二つならんで、バスのうしろの窓から手をふっていた二人を、見えなくなるまでおくと、ゆつくりと海べにおりてみた。静かな内海うちうみをへだてて、細長い岬みさきの村はいつものとおり横たわっている。そこに人の子は育ち、羽ばたいている。

——ながながお世話になりました。そんならごきげんよろしゆ  
……

岬にむかってつぶやいてみた。それはおかしきとかなしきと、あたたかさが同時にこみあげてくるような、そしてもつと含蓄がんちくのあることばであった。

## 八 七重八重

春とはいえ、寒さはまだ朝の空気の中に、鎌かまいたちのようなす  
るどきでひそんでいて、日かげにいと足もとからふるえあがつ  
てくる。

K町のバスの停ていりゆうじよ留所には、この早いのもう用たしをすま  
してきた客が二人、下りバスをまくだつていた。六十を二つ三つすぎ  
たらしく見えるおじいさんと、三十前後の女客と。

「ううつ、さぶい！」

思わず出たうめき声のようにつぶやくおじいさんに、

「ほんとに」

と、女客は話しかけられもしないのに同意した。寒さは人間の心を寄りあわせるらしく、どちらからとなく親しさをみせあつた。

「ほんとに、いつまでも寒いことですか」

「そうです。もう彼岸ひがんじゃというのに」

話しかけた若い女は、四角い包みを胸にかかえこむようにしながら、おじいさんの、むき出しのまま片かたうで腕うでにひっかけている粗そ末まつなランドセルに、親しいまなざしをおくり、

「お孫さんのですか？」

「はいな」

「わたしも、息子のを買こうてきました」

胸の包みを見やりながら、

「今日売りだすというのを聞いて一番のバスで出かけたんですけど、昔のような品はもう一つもありません。こんな紙のじゃあ、一年こつきりでしょう」

おたがいの品物をなげくようにいうと、そうだというようにおじいさんは首をふり、

「ヤミなら、なんぼでもあるといな」

そして、はっはつと笑った。奥歯おくばのないらしい口の中がまっくらに見えた。女は目をそらしながら、

「きょう日びのように、なんでもかでもヤミヤミと、学校のカバンまでヤミじゃあ、こまりますな」

「ぜに銭さえありやあなんでもかでもあるそう。甘いぜんぎいでも、

ようかんでも、あるとこにや山のようにあるそうな」

そういつて齒のない口もとから、ほんとによだれをこぼしかけたところは、甘あまとう党らしい。口もとを手のひらでなでながら、てれかくしのように、向こう側をあごでしやくり、

「ねえさん、あつちで待とうじやないか。日向ひなただけはタダじや」

そういつてさつさと反対側乗場の方へ道を横ぎつた。ねえさんと呼ばれて思わずにやりとしながら、女客もあとを追つた。——  
ねえさん、か。と、女客は心の中でいつてみて、背の高いおじいさんをふりあおぎ、笑いながらたずねた。

「おじいさん、どちらですか」

「わしか。わしや岩いわが鼻はなでさ」

「そうですか。わたしは一本松」

「ああ一本松なあ。あつこにや、わしの船乗り朋輩ほうばいがあつてな。もうとうの昔に死んだけど、大石嘉吉おおいしかきちという名前じゃが、あんたらもう、知るまい」

それをきいたとたん、女客はとびあがるほどおどろいて、

「あら、それ、わたしの父ですが」

こんどは、おじいさんが、ひらきなおるようなかっこうで、

「ほう、こいつはめずらしい。そうかいな。今ごろ嘉吉つあんの娘さんにあうとはなあ。そういや似たところがある」

「そうですか。父はわたしが三つおじのとき死にましたから、なんにもおぼえとりませんけど、小父さん、いつごろ父といっしよでし

たの」

おじいさんを小父さんとあらためて呼んだのも、生きていれば父もこのぐらいの年配かと思つたからだ。

いうまでもなく、大石先生の、あれから八年目の姿である。船乗りの妻としてすごした八年間には、腹をたてて教職をひいたあの時とはくらべることもできないほど、世の中はいっそうはげしく変わっていた。日華事変につかじへんがおこり、日独伊防共協定にちどくいぼうきようきようていがむすばれ、国民精神総動員という名でおこなわれた運動は、寝言ねごとにも国の政治に口を出してはならぬことを感じさせた。戦争だけを見つめ、戦争だけを信じ、身も心も戦争の中へ投げこめと教えた。そしてそのように従わされた。不平や不満は腹の底へかくして、

そしらぬ顔をしていないかぎり、世渡り<sup>よわた</sup>はできなかつた。そんななかで大石先生は三人の子の母となつていた。長男の大吉<sup>だいきち</sup>、二男の並木<sup>なみき</sup>、末っ子の八津<sup>やっつ</sup>。すっかり世の常の母親になつている証<sup>しょう</sup>ようこ  
拠<sup>よこ</sup>に、ねえさんとよばれた。だがよく見ると、目のかがやきの奥<sup>おく</sup>に、ただのねえさんでないものがかくれている。

「小父さん、もしよろしかつたら、お茶でものみませんか」

停留所のわきの茶店をさしていった。この年よりから、父親をかぎだそうとしたのである。しかし年よりは、がんこに首をふり、「いや、もうすぐにバスがきまつそ。ここでよろしいわい」

年よりのほうもなんとなく、あらたまつた態度を見せていた。

「それで、嘉吉<sup>かきつ</sup>つあんの嫁<sup>よめ</sup>さんは、おたっしやかな」

「はあ、おかげさまで」

と、いったが、年とつた母が、嫁さんと呼ばれたことと思わず笑顔になった。帰ればまずそれを母にいおうと思つた。ちようどのほ上りバスが警笛けいてきとともに近づいてきた。上り客でないことをしめすように、急いで標識ひょうしきからはなれたが、バスは止とまった。茶店の軒下に立って、おりる客の顔を、見るともなく見ていた。バスはすし詰づめの満員で、おりてくるのは若い男ばかりだった。ほとんどみな、ここでおりるかと思うばかり、つぎからつぎへと出口にあらわれる若い顔をみているうち、ふと思いだしたのは、今日この町の公会堂で徴兵ちようへい検査がとりおこなわれることだった。ああ、それかと思ひながら、若さにみちた個々の顔につぎか

らつぎへと目をうつしていた。

「あつ、小石先生！」

思わずとびあがるほどの大声だった。ほとんど同時に先生も叫んだ。さそわれるような大声で、

「あらつ、仁太にたさん！」

そして、あとからあとからとつづいて出てくる顔に向かって、

「あら あら あら みんないるの、まあ」

仁太につづいて磯吉いそきち、竹一、正、吉次と、かつての岬みさきの少年

たちはみんなそろった。

「先生、しばらくです」

東京の大学をあと一年という竹一は、細長くなった顔を、いか

にも都会の風に吹かれてきたというようなようすで、まつさきにあいさつした。つづいて神戸こうべの造船所ではたらいっている正が、これはいかにも労働者らしく鍛きたえられた面つらだましい魂たましいながら、人のよい笑顔で頭をさげ、きまりわるげに耳のうしろをかいた。まつていたように磯吉が前に出てきて、

「先生、ごぶさたいたしまして」

少し心配なほど青白い顔に、じよさいない笑いを浮かべた。どこへもゆかずやまきに岬の村で山伐りや漁師りようしをしている吉次は、あいかわらず借かり猫ねこのようなおとなしきで、みんなのうしろに控ひかえ、水ばなをすすりあげながらだまつて頭をさげた。仁太ばかりはれいのおりの無遠慮ぶえんりよさで、あいさつぬきだった。彼は父親を手

つだつて石けん製造をしているという。経済的けいぎいてきには一ばんゆとりがあるらしい仁太は、新調の国民服をきていた。

「先生、こないだ富士子に会った、富士子に」

じまんらしく富士子をかさねていう。しかし先生はわざとそれに乗らず、とりかこまれた青年の姿をあおぐようにして眺めながまわした。八年の歳さいげつ月は、小さな少年を見あげるばかりのたくましささに育てている。

「そう、検査だったの。もうね」

なみだ

涙のしぜんとにじみだす目に五人の姿はぼやけた。いつまでそ

うもしておられぬと気づくと、きゆうに昔むかしの先生ぶりにもどり、

「さ、いつてらっしやい。そのうち、みんなで一度、先生とこへ

きてくれない」

それでいかにも男の子らしくあつさりはなと離れてゆくうしろ姿を、さまざまの思いで見おくりながら、久しぶりにじぶんの口で「先生」といったのが、なんとなく新鮮な感じで、うれしかった。

ふりかえると、年よりは茶店の横の日だまりに塵ちりをよけてまっていた。日あたりのよい生垣いけがきのつぼみ一か所に蕾をつけた山吹やまぶきがむらがり、細い枝は蕾つぼみの重さでしなっている。その一枝を無造作むぞうさに折りとり、年よりもまた若者たちを見おくりながら、小さい声で、「えらいこつちや。あやつてにこにこしよる若いもんを、わざわざ鉄砲てつぱうの玉たまのま的とにするんじやもんなあ」

「ほんとに」

「こんなこと、大きい声じやいうこともできん。ゆうたらこれじや」

ランドセルをもったまま両手をうしろにまわし、さらに小声で、  
「ほれ、治安維持法じや、ぶちこまれる」

歯のない口いきゆうに奥歯がはえたような気がするほど若がえ

った口調だった。治安維持法というものを、彼女はよく知らな

い。ただ『草の実』の稲川先生が、その治安維持法という法律

に違反した行動のために、牢獄につながれ、まもなく出てきて

からも復職はおろか、正当なあつかいもうけていないとい

うことだけが、その法律とつないで考えられた。稲川先生の母親

は、まるで気持ちがいのように息子をかばい、今では彼が前非を悔

いあらためてみると、会う人ごとに 吹聴ふいちようしてまわるのにいそがしいという噂うわさを聞いた。どこまでがほんとうなのか、ただ稲川先生はひとり養鶏ようけいをしながら世間ばなれの生活をしていた。彼が世間をはなれたのではなく、世間が彼をよせつけないのだ。彼の卵は、毒でもはいつているかのようにきらわれ、ひところは買手もなかった。時代は人を三匹の猿さるにならえと強しいるのだ。口をふさぎ、目をつむり、耳をおさえていればよいというのだ。ところが今、目の前にいる年よりは目や耳をふたした猿の手をはぎとるようなことをいう。朋輩ほうばいの娘むすめだとはいえ、はじめて会った女に、なぜ心の奥を見せるようなことをいうのだろうか。

半分は警戒心けいかいしんもおきて、彼女は、それとなく話題をそらせた。

「ところで小父おじさん、わたしの父とは、いつごろの朋輩ほうばいでしたの？」

にこつと笑つた年よりはまた奥歯のないもとの表情にもどり、

「そうよなあ、十八か、九かな。二人とも大望たいもうをもつてな。あ

わよくば外国船に乗りこんで、メリケンへ渡ろうというんじや。

シアトルにでも行つたとき、海にとびこんで泳ぎ渡ろうという算ざん

段んだんよ」

「まあ。でも、昔はよくあつたそうですね」

「あつたとも。メリケンで一もうけしてというんじやが、じつを

いうと、徴兵ちようへいがいやでなあ。——今ならこれじや」

また手をうしろにまわして笑つた。

「とうとう目的成就もくてきじょうじゆしなかつたわけですか？」

「そういうわけじゃ。もつともそのころは、船に乗つとりさえしたら兵隊には行かいてもすんだからな。そのうち二人とも船乗りがすきになつてな。同じ船乗りなら免めん状じやうもちになろうというんで、これでも勉強したもんじゃ。学校へ行つとらんもんで、わしらは五年がかりでやつと乙一の運転手になつたあ。嘉吉つあんのほうが、一年はよう試験に通つてな、わしも、なにくそと思つて、あくる年にとつたのに——」

そのとき朋輩ほうばいは難船なんせんして行方不明ゆくえふめいとなり、ついによるこんでもらえなかつたというのだ。父の妻としての母からきくのはちがった父の姿、涙なみだどころか微笑びしょうさえ浮かんで想像される若い

日の父の姿、語る人の親愛感からであろうか、父ははつらつとした好ましい青年であつたと知つた。その父が徴<sup>ちようへい</sup>兵<sup>へい</sup>をきらつたということとは初<sup>はつみみ</sup>耳である。それについて一言もしない母は、父からそれをきかなかつたのであろうか。それとも例の猿になつていたのか、「嫁さん」と呼ばれたこととともに母にきいてみようと考えながら、話はずきなかつた。

「そして小父さん、いつごろまで船に乗つておいでたん？」

「十年ほどまえよ。ようやつとこんまい船の船長になつてな。――

――息子は学校へやつて苦労させずに船乗りにしてやろうと思つたら、船乗りはいやじやときやがる。商業学校にやつて、銀行の支店に出とつたけれど、とられて、死んだ」

「とられてって、戦争ですか？」

「そういな」

「まあ」

「ノモハンさあ。これは、そいつのせがれので」

ランドセルは年よりの手で強くふられ、中のボール紙がかさこそと音をたてた。

——おたがいに、せがれをもつのは心配の種ですね。といおうとしてのみこんだ。

バスでは客がたてこんでいて並ぶことはできなかつた。うしろの正面に席をとった大石先生は、じつと目をつぶっていた。思いだすのは、いまのさつき別れた教え子のうしろ姿である。けもの

のように素すつ裸ばだかにされて検査官の前に立つ若者たち。兵隊墓に白木ぼひょうの墓標がふえるばかりのこのごろ、若者たちはそれを、じじやばばの墓よりも関心をもつてはならない。いや、そうではない。大きな関心をよせてほめたたえ、そこへつづくことを名譽めいよとせねばならないのだ。なんのために竹一は勉強し、だれのために磯吉は商人になろうとしているのか。子どもどころ下士官を志望した正は、軍艦と墓場をむすびつけて考えているだろうか。にこやかな表情の裏がわを見せてはならぬ心ゆるせぬ時世を、仁太ばかりはのんきそうに大声をあげていたが、仁太だとて、その心の奥に何も無いとはいえない。

あんな小さな岬みさきの村から出た今年ちよう徴兵適齡へいてきれいの五人の男の子、

おそらくみんな兵隊となつてどこかの果てへやられることだけは  
まちがいないのだ。無事帰つてくるものは幾いくにん人あるだろう。――  
――もう一人人的資源をつくつてこい……そういつて一週間の休きゆう  
暇かを出す軍隊というところ。生まされる女も、子どもの将来が、  
たとえば白木しらぎの墓標ぼひようにつづこうとも、あんじてはならないのだ。  
男も女もナムアミダブツで暮せということだろうか。どうしても  
のがれることのできない男のたどる道。そして女はどうなるのか。  
あの組の七人の女の子の中で、ミサ子はなよめひとりは苦勞をしていなか  
った。ミドリ学園から東京の花嫁はなよめ学校にはいり、在学中に養子  
をむかえてすぐ子どもをうんだ。苦勞の多い時代に、これは別格  
である。風の強い冬の日に、ひとり日光室ひなたで日向ぼっこをしてい

るような存在である。

そこへゆくと歌のすきなマスノは、きりきり舞まいをするような苦勞をした。ただ歌いたいために有頂天うちようてんになり、親にそむいて幾度いくどか家出をした。無断で応じた地方新聞のコンクールに一等入選し、それが新聞に出たときが家出のはじめだった。そのたびにさがしだされ、連れもどされては、また出る。いつも歌がもとだった。歌をうたいたい歌のじょうずな娘が、なぜ歌をうたつてはいけないのだろう。三度目の家出のとき、彼女は芸者げいしやになつて出ようとしていたという。つれにいった母親に彼女は泣いてしがみつみつき、

「三味線しやみせんなら、きこえるというたじやないかあ」

彼女の音楽へのはけ口はいつのまにか三味線のほうへ流れていっていたのだ。しかし、彼女の親たちは、そのよしあしはともかくとして、わが身は料理屋で芸者と近づきながら、娘を芸者にするわけにはゆかなかつた。マスノは今、その家出中に知りあつた年とつた男と結婚し、ようやく落ちつきをみせていた。今ではもう、年とつた母にかわつて、料理屋をきりもりしているという。

たまに道で出あうと、なつかしがつてとびついてき、

「せんせ、わたし、いつも先生のこと、あいたくてエ」

涙までためてよろこぶ子どももつぽいしぐさなのに、じみ作りな彼女は二十歳はたちやそこらとは見えなかつた。

高等科へもすすめず、嫁よめにもらわれることを将来の目的として

女中奉公に出たコトエはどうなったであろうか。彼女は嫁にもらい手がつくまえに、病氣になつて歸つてきた。肺病はいびょうであつた。骨と皮にやせて、ただひとり物置きに寝ていると聞いてから、だ**いぶ**たつ。

高等科に進めなかつたもうひとりの富士子については、いやな噂うわさがたつていた。仁太が、富士子に会うた、というのは、遊び女としての富士子との出あいにはないなかつた。仁太の顔にあらわれたものでそうとさとして、わざとさきかえさなかつたが、噂うわさはどうの昔に小ツルから聞いていた。富士子は親に売られたというのだ。家具や衣類と同じように、今日きょうの一家のいのちをつなぐために、富士子は売りはらわれたのだ。はたらくということ知ら

ずに育そだった彼女が、たとえいやしい商売女にしろ、売られてそこではじめて人生というものを知ったとしたら、それは富士子のためによるこぼねばなるまい。しかし人は富士子をさげすみ、おもしろおかしく噂をした。

今ではもう人の記憶きおくから消えさったかに見える松江といい、今また富士子といい、どうして彼女たちがわらわれねばならないのか。しかし、大石先生の心の中でだけは、彼女たちも昔どおりいたわられ、あたためられていた。

——マツちゃんどうしてる？ 富士さんどうしてる？ ほんとにどうしてる？……

ときどき先生は呼びかけていた。

まつとうな道とはどうしても思えぬ富士子たちにくらべると、小ツルや早苗は健康そのものにみえた。優秀な成績で師範しはんを出た早苗は、母校にのこる栄誉えいよを得てその瞳ひとみはますますかがやき、大阪の産婆さんぼ学校を、これも優等で卒業した小ツルとは、大石先生をまん中にして仲よしになっていた。実地の勉強をかさねたうえで、小ツルは郷里に帰るのが目的であつた。わざとかうっかりか、手紙の宛名あてなを大石小石先生と書いてきたりするのだが、人間の成長かたていの過程かたていのおもしろさは、母の予言どおりおしやべりの小ツルを幾いくぶんくぶんか分控ぶんくわえ目に、無口な早苗をてきばき屋に育てていた。

二人はすくなくも年に二度、さそいあつておとずれてくる。たいてい夏の休きゆう暇かと正月で、もってくる土産みやげも同じだつた。二人

とも同じものというのではない。大阪の小ツルは粟<sup>あわ</sup>おこしだし、早苗は高松で瓦<sup>かわら</sup>せんべいときまっていた。年ごろで、ますます太<sup>ふと</sup>る一方の小ツルの目は、全く糸のように細くなっていた。どちらかといえばきつい彼女の性格は、この目でやわらげられ、えへ、と笑うと、こちらもいっしよに声をあげて笑いたくなくなった。えへ、というとき、あとヘドサン（土産）<sup>みやげ</sup>といって土産をおくのが小ツルのくせであった。

あるとき小ツルはいった。

「いつも同じドサンで芸がなさすぎると思うことありますけどね、じぶんの子どものときのことを思うと、このドサンでとびとびするほどうれしかったから」

早苗も同じように瓦せんべいの包みをさし出し、

「阿呆あほうの一つおぼえということがありますからね」

大吉は、ドサンの姉ちゃんとよんで歓迎かんげいし、その日は、一日笑いくらして別れるのがおきまりになっていた。それらのドサンも戦争がながびくにつれ、手に入りにくくなったらしく、昨今は商売物らしいガーズをくれたり、早苗のほうはノートや鉛筆を、まだ学校でもない大吉のためにもつてきたりするようになった。ようやく学がくれい齡いにたつした大吉のためにランドセルを買いにいつての帰り、はからずも出あつた教え子に刺激しげきされてか、もろもろの思い出は胸にあふれた。

一本松でございます。お降りのかたは……。

車しゃ掌しょうの声に思わず立ちあがり、あわてて車内を走った。例の年よりに会え釈しゃくもそこそこ、ステップに足をおろすと、いきなり大吉の声だった。

「母ちゃん」

濁にごりにそのままぬかん高いその声は、すべての雑念をあなたに押おしやうてしまおうとする。

「母ちゃん、ぼくもう、さつきからむかえにきとったん」

いつもならば、ひとりでに笑えてくる、きれいにすんだその声  
が、今日は少しかなしかつた。笑ってみせると大吉はすぐ甘あまえか  
かり、

「母ちゃん、なかなか、もどらんさかい、ぼく泣きそうになった」

「そうかい」

「もう泣くかと思つたら、ブブーって鳴つて、みたら母ちゃんが  
見えたん。手えふつたのに、母ちゃんこつち見ないんだもん」

「そうかい。ごめん。母ちゃんうっかりしとつた。大方、一本  
松忘れて、つつ走るとこじやつた」

「ふーん。なにうっかりしとつたん？」

それには答えず包みを渡すと、それが目的だといわぬばかりに、

「わあ、これ、ランドセルウ？　ちつちやいな」

「ちつちやくないよ。しよつてごらん」

ちようどよかった。むしろ大きいぐらいだった。大吉はひとり  
でかけた。

「おばあ、ちやーん、ランド セルウ」

すつとんでゆきながら足もとのもどかしさを口に助けてもらおうかのように、ゆく手のわが家へむかつて叫んだ。

肩をふつて走つてゆくそのうしろ姿には、無心に明日へのびようとするけんめいさが感じられる。その可憐なうしろ姿の行く手にまちうけているものが、やはり戦争でしかないとすれば、人はなんのために子をうみ、愛し、育てるのだろう。砲弾にうたれ、裂けてくだけて散る人の命というものを、惜しみ悲しみ止どめることが、どうして、してはならないことなのだろう。治安を維持するとは、人の命を惜しみまもることではなく、人間の精神の自由をさえ、しばるといふのか……。

走り去る大吉のうしろ姿は、竹一や仁太や、正や吉次や、そしてあのとき同じバスをおりて公会堂へと歩いていった大ぜいの若者たちのうしろ姿にかさなりひろがつてゆくように思えて、めいっした。今年小学校にあがるばかりの子の母でさえそれなのにと思ふと、何十万何百万の日本の母たちの心というものが、どこかのはきだめに、ちりあくたのように捨てられ、マツチ一本で灰にされていくような思いがした。

お馬にのつたへいたいさん

てつぽうかついであるいてる

トットコ トットコあるいてる

へいたいさんは 大すきだ

気ばりすぎて調子つばずれになった歌が家の中から聞こえてくる。敷居しきいをまたぐと、ランドセルの大吉を先頭に、並木と八津がしたがって、家の中をぐるぐるまわっていた。孫のそんな姿を、ただうれしそうに見ている母に、なんとなくあてつけがましく、大石先生はふきげんにいった。

「ああ、ああ、みんな兵隊すきなんだね。ほんとに。おばあちやんにはわからないのかしら。男の子がないから。——でもそんなこつちやないと思う……」

そして

「大吉イ！」と、きつい声で呼んだ。口の中をかかわかしたような顔をして大吉は突つ立ち、きよとんとしている。ハタキと羽子板はごいたを鉄砲てっぽうにしている並木と八津がやめずに歌いつづけ、走りまわっているなかで、大吉のふしんがっている気持をしずめてやるように、いきなり背中に手をまわすと、ランドセルはロボットのような感かん触しよくで、しかし急きゆうげき激げきなよろこびで動いた。長男のゆえにめつたにうけることのない母の愛撫あいぶは、満六歳の男の子を勝利感に酔よわせた。にこつと笑つて何かいおうとすると、並木と八津に見つかった。

「わあつ」

押しよせてくるのを、同じようにわあつと叫おびかえしながら、

ひつくるめてかかえこみ、

「こんな、かわいい やつどもを、どうして ころして よいものか わあつ わあつ」

調子をとってゆさぶると、三つの口は同じようにして、わあつ わああ と合わせた。そこにどんな気持がひそんでいるかを知るにはあまりに幼い子どもたちだった。

春の徴兵適齢者たちは、報告書と照らしあわされて、品評会の菜っ葉や大根のようにその場で兵種がきめられ、やがて年の瀬がせまるころ、カンコの声におくられて入営するのが古いころからの慣わしであった。しかし、日ごとに広がってゆく戦

線の逼迫ひつぱくは、そのわずかな時間的ゆとりさえもなくなくなり、入営はすぐに戦線につながっていた。船着き場の棧橋さんばしに建てられたアーチは、歓送迎かんそうげいもん門かの額がくをかかげたまま、緑の杉すぎの葉は焦こげち茶色やに変わってしまった。歓送迎のどよめきは年中たえまなく、そのすきまを声なき「凱旋がいせん兵士」の四角な、白い姿もまた潮風とともにこのアーチをくぐってもどつてきた。

日本じゆう、いたるところに建てられたこの緑の門を、数えきれぬほどたくさんの若者たちがくぐりつづけて、やむことを知らぬような昭和十六年、戦線が太平洋にひろがったことで、カンコの声はいつそうはげしくなるばかりだった。天皇の名によつて宣せ戦布告せんぷこくされた十二月八日のそのずつとまえに、その年の入営者

である仁太や吉次や磯吉たちは、もうすでに村にはいなかった。出発の日、いくばくかの餞別せんべつにそえて大石先生は、かつての日の写真をハガキ大に再製してもらっておくった。もう原板げんばんはなくなっていた。竹一のほかはみななくしていたので、よろこばれた。

「からだを、大事にしてね」

そして、いちだんと声をひそめ、

「名譽めいよの戦死など、しなさんな。生きてもどつてくるのよ」

すると、聞いたものはまるで写真の昔にもどつたような素直さになり、磯吉などひそかに涙なみだぐんでいた。竹一はそつと横を向いて頭をさげた。吉次はだまってうつむいた。正はかげのある笑顔

をみせてうなずいた。仁太がひとり声に出して、

「先生だいじょうぶ、勝つてもどつてくる」

それとて、仁太としてはひそめた声で「もどつてくる」というのをあたりをはばかりるようにいった。もどるなどということとは、もう考えてはならなくなっていたのだ。仁太はしかし、ほんとうにそう思っていたのだろうか。まっ正直な彼には、おていさいや、ことばのふくみは通用しなかったからだ。仁太だとして命の惜しおさについて、人後におちるはずがない。それを仁太ほど正直にいったものは、なかったかもしれぬ。彼はかつての日、徴兵ちようへいけん検査けんさの係かかり官かんの前で、甲種合格！と宣言されたせつな、思わさけず叫さけんだという。

「しもたア！」

みんなが吹きだし、噂はその日のうちにひろまった。しかし仁太は、ふしぎとビンタもくわなかつたという。仁太のその間髪をいれぬことばは、あまりにも非常識だつたために、係官に正當に聞こえなかつたとしたら、思つたことをそのとおりに仁太はよほどの果報者だ。みんなにかわつて溜飲をさげたよ。うなこの事件は、近ごろの珍談として大石先生の耳にもはいつた。

その仁太は、ほんとうに勝つてもどれると思つたのだろうか。ともあれ、出ていったまま一本のたよりもなく、その翌年も半ばすぎた。ミッドウエーの海戦は、海ぞいの村の人たちをことば

のない不安とあきらめのうちに追いこんで、ひそかに「お百度」をふむ母などを出した。仁太や正は海軍に配置はいちされていた。平時へいじならば微笑びしょうでしか思いだせない仁太の水兵も、いったまたよま便りがなかつた。

仁太はいま、どこであの愛すべき大声をあげているだろうか――。

ひとりを思うとき、かならずつづいて思いだすのは、いつもあのK町のバスの停留所で見た若者たちである。笑うと口の奥おくがくらく見えた年よりのことである。春寒はるさむの道ばたに、ただの日光をうけた蓄つぼみをふくらませていた山吹である。そうして、さらにさらに大きなかげで包つつんでしまうのは、いつのまにか軍用船となつ

て、どこの海を走っているかさえ分からぬ大吉たちの父親のことである。その不安を語りあうさえゆるされぬ軍国の妻や母たち、じぶんだけではないということ、人間の生活はこわされてもよいというのだろうか。じぶんだけではないことで、発言権を投げすてさせられているたくさんの人たちが、もしも声をそろえたら。ああ、そんなことができるものか。たったひとりで口に出しても、あの奥歯のない年よりがいったように、うしろに手がまわる。

ただの日光をうけて、春寒むはるさの道ばたにふくらむ山吹は、それでも、花だけは咲かせたろうに。……

## 九 泣きみそ先生

海も空も地の上も戦火から解放された終戦翌年の四月四日、この日朝はやく、一本松の村をこぎだした一隻の伝馬船は、紺がすりのモンペ姿のひとりのやせて年とつた小さな女を乗せて、岬みさきの村の方へ進んでいった。静かな海に靄もやはふかくたちこめていて、岬の村は夢のなかに浮うかんでいるようにみえたが、やがてのぼりはじめた太陽に醒さまされるように、その細長い姿を、しだいにくつきりと、あらわしはじめた。

「あ、ようやつと晴れでした」

まだ十二、三と見える船頭せんとうは、小さなからだ全体を動かして櫓ろを押しすすめながら、まだ遠い岬の村に眺ながめいった。目ばかり

かがやいているようなその男の子に、同じように岬の村に目を見はつていた女は、いとおしむような声で話しかけた。

「岬、はじめてかい、大吉？」

みかけによらず、若い声である。

「うん、<sup>みさき</sup>岬なんぞ、用がなかつたもん」

ふりかえりもせずに答えた。

「そうじゃな。お母さんでさえ、ずつとくることなかつたもんなあ。岬というところは、そんなとこじゃ。あれから十八年！ ほう、ふた昔になる。お母さんも年よせたはずかいな」

なんとそれは、大石先生の、ひさしぶりの声と姿である。今日、彼女は十三年ぶりの教職きょうしよくにかえり、しかも今、ふたたび岬の

村へ赴任ふにんするところなのだ。まえには自転車に乗ってさっそうとかよつていた先生も、今ではそんな若さがなくなつたのであろうか。ところが、そうばかりではなかつたのだ。戦争は自転車までも国民の生活からうばいさつて、敗戦後半年のいま、自転車は買うに買えなかつた。岬へ赴任ふにんときまつたとき、はたと当惑とうわくしたのはそれだつた。途とちゆう中まであつたバスさえも、戦争中になくなつたまま、いまだに開通していない。昔でさえも、自転車でかよつた八キロの道は、歩いてかようしかなかつた。とうてい、からだのつづくはずがないと考えて、母子三人岬へ移ろうかといひだしたとき、一言で反対したのが大吉だつた。船でおくり迎えをするというのだ。船だとして借りるとすれば、相当の礼もしなければ

ならない。

「雨がふったら、どうする？」

「そしたら、お父さんの合羽かっぱきる」

「風の強い日は、こまるでないか」

「……………」

「あ、心配しなさんな。風の日はずいていくよ」

返事につまった大吉を、いそいで助けたものだ。あしたはあしたの風がふく。あしたのことまで考えてはいられなかった永い年なが月は、雨や風ぐらいでへこたれぬことだけは、教えてくれた。戦争は六人の家族を三人にしてしまったけれど、だからなお、残った三人はどうでも生きねばならないのだ。大吉は六年生になって

いる。並木は四年だった。出がけに渚なぎさに立って母の初出勤はつしゅつぎんを見おくつてくれた並木も、もうそろそろ学校へ出かける時分だと思つて一本松をふりかえつた。久しぶりに沖おきからながめる一本松も、昔のままに見える。なんの変化も見られぬその村にさえ、大きな変化をきたした戦争の果ての敗戦。

「大吉、つかれないかい。手に豆ができるかもしれんな」

「豆ができたつて、すぐにかたまらア ぼく、平気だ」

「ありがたいな。でも、明日からもっと早目に出かけようか」

「どうして？」

「先生の息子が、毎日ちこくじやあ、なにがなんでもふがわるい。そのうちお母さんも、また自転車を手にいれる算段さんだんするけども」

「へっちやらだあ。ちやんと理由があると、叱しかられんもん。船で、おくつたげる」

ゆつくりと、櫓ろについてからだを前後に動かしながら、得意の顔で笑った。

「うまいな、櫓お押すの。やっぱり海べの子じやな。いつのまにおぼえたん」

「ひとりで、おぼえるもん。六年生なら、だれじやつて押おせる」

「そうかね。お母さんもおぼえよかな」

「そんなこと、ぼくがおくつてあげる」

「そうそう、森岡正という子がいてな、一年生なのに、お母さんを舟でおくつてあげるつていったことがあつた。昔むかし——。もう戦

死したけんど」

「ふーん。教え子？」

「そう」

ふつと涙なみだが出た。生きていれば、もうよい若者になつたらうと、五年前、棧橋さんばしで別れたきりの正を思いだし、それが幼い日のおもかげとかさなつて浮うかんできた。あれきりついに会うことのかつた正。そしてもう永久に会うことのできなくなつた教え子たち。はげしい戦いにたおれた今、幾いくにん人がふたたび故郷の土をふみ、ふたたび会えるかと思うと、心は暗くしずむ。

悪夢あくむのように過ぎたここ五年間は、大石先生をも人なみのいたでと苦痛のすえに、小さな息子にいたわられながら、このへんぴ

な村へ赴任ふにんしてこなければならぬ境遇きょうぐうに追いこんでいた。わが身に職のあることを、はじめて彼女は身にしみてありがたがつた。教え子の早苗にすすめられて願書は出してみたものの、着てゆく着物さえもないほど、生活は窮迫きゆうぱくの底をついていた。不如意にょいな日々の暮しは人を老いさせ、彼女もまた四十という年よりも七八つもふけている。五十といつても、だれが疑がおう。

いっさいの人間らしさを犠牲ぎせいにして人びとは生き、そして死んでいった。おどろきに見はつた目はなかなか閉じられず、閉じればまなじりを流れてやまぬ涙なみだをかくして、何ものかに追いまわされていくような毎日だった。しかも人間はそのことにさえいつしか慣れてしまつて、立ちどまり、ふりかえることを忘れ、心の

奥までざらざらに荒<sup>あ</sup>らされたのだ。荒れまいとすれば、それは生きることをごぼむことにさえなつた。そのあわただしさは、戦いの終つた今日からまだ明日へもつづいてゐることを思わせた。戦争はけつして終つたとは思えぬことが多かつた。

原爆<sup>げんぱく</sup>の残<sup>ざん</sup>虐<sup>ぎやく</sup>さが、そのことばとしての意味だけで伝えら

れてはいたが、まだほんとうの惨<sup>さん</sup>状<sup>じやう</sup>を知らされていなかつた

あの年の八月十五日、ラジオの放送を聞くために学校へ召<sup>しやう</sup>集<sup>しゆう</sup>

された国民学校五年生の大吉は、敗戦の責任を小さなじぶんの肩<sup>かた</sup>にしよわされでもしたように、しよげかえつて、うつむきがちに帰つてきた。

あれからたつた半年、今日の前に櫓<sup>ろ</sup>をこぐ可憐<sup>かれん</sup>な姿は、深い感<sup>か</sup>

概んがいをそそるものがある。時代に順じゆんのう応する子どもというもの。半年前の彼のことを、いえば今は恥ずかしがる大吉なのを知っている。口には出さず、ひとり思いだすだけである。あの日、しよげている大吉の心を引つたててやるように笑顔で肩かたをだいてやり、「なにをしょげてるんだよ。これからこそ子どもは子どもらしく勉強できるんじゃないか。さ、ごはんにしよ」

だが、いつもなら大きわぎの食事を見向きせず大吉はいつたのだ。

「お母さん、戦争、まけたんで。ラジオ聞かなんだん？」  
彼は声まで悲壮ひそうにくもらしていった。

「聞いたよ。でも、とにかく戦争がすんでよかったじゃないの」

「まけても」

「うん、まけても。もうこれからは戦死する人はないもの。生きてる人はもどつてくる」

「一億玉ぎよくさい 砕でなかった！」

「そう。なかって、よかったな」

「お母さん、泣かんの、まけても？」

「うん」

「お母さんはうれしいん？」

なじるようにいった。

「バカいわんと！ 大吉はどうなんじやい。うちのお父さんは戦死したんじゃないか。もうもどつてこんのよ、大吉」

そのはげしい声にとびあがり、はじめて気がついたように大吉はまともに母を見つめた。しかし彼の心の目もそれでさめたわけではなかった。彼としては、この一大事のときに、なおかつ、ごはんを食べようといった母をなじりたかつたのだ。平和の日を知らぬ大吉、生まれたその夜も防空演習でまっくらだったと聞いている。燈火管制とうかかんせいのなかで育ち、サイレンの音になれて育ち、真夏に綿入れの頭巾ずきんをもつて通学した彼には、母がどうしてこうまで戦争を憎まねばならないのか、よくのみこめていなかった。どこの家にも、だれかが戦争にいつていて、若い者という若い者はほとんどいない村、それをあたりまえのことと考えていたのだ。学徒は動員され、女子どもも勤労奉仕きんろうほうしに出る。あらゆる神社の

境内けいだいは枯葉一枚ものこさず清掃せいそうされていた。それが国民生活だと大吉たちは信じた。しかし、山へどんぐりを拾いにゆき、にがいパンを食べたことだけは、いやだった。小さな大吉の村からも幾いくにん人かの少年航空兵が出た。

——航空兵になったら、ぜんざいが腹いっぱい食える。

かわいそうに、年端としはもいかぬ少年の心を、腹いっぱいのぜんざいでとらえ、航空兵をこころざした貧しい家の少年もいた。しかもそれで少年はもう英雄えいゆうなのだ。貧しかろうと、そうでなからうと、そこへ心を傾けないものは非国民でさえあつた時世じせいの動きは、親に無断で学徒兵をこころざせば、そしてそれがひとり息子であつたりすれば英雄の価値かちはいつそう高くなつた。町の中学で

は、たくさんの少年志願兵のなかに親に無断のひとり息子が三人も出て、それが学校の榮譽えいよとなり、親たちの心を寒がらせた。そのとき、小さかった大吉は、じぶんの年の幼なさをなげくように、「ああ、早くぼく、中学生になりたいな」

そして歌った。

ナーナツ　ボータンハ　サクラニイカーリ……

人のいのちを花になぞらえて、散ることだけが若人わこうどの究きゆうき  
よく、もくてき極の目的であり、つきぬ名誉であると教えられ、信じさせら

れていた子どもたちである。日本じゅうの男の子を、すくなくもその考えに近づけ、信じさせようと方向づけられた教育であつた。校庭すみの隅で本を読むにのみやきんじろう二宮金次郎までが、カンコの声でおくりだ

されてしまった。何百年來、朝夕を知らせ、非常を告げたお寺の鐘かねさえ鐘しょうろう楼からおろされて戦争にいった。大吉たちがやたら悲壯ひそうがり、いのちを惜おしまなくなったこともやむをえなかったのかもしれぬ。しかし大吉の母は、一度もそれにさんせいしなかつた。

「なああ大吉、お母さんはやつぱり大吉をただの人間になつてもらいたいと思うな。名誉の戦死なんて、一軒にひとりでたくさんじゃないか。死んだら、もとも子もありやしないもん。お母さんが一生けんめいに育ててきたのに、大吉アそない戦死したいの。お母さんが毎日なきの涙なみだでくらししてもえいの？」

のぼせた顔にぬれ手ぬぐいをあててもやるようにいったが、

熱のはげしきはぬれ手ぬぐいではききめがなかった。かえつて大吉は母をさとしでもするようにな、

「そしたらお母さん、靖国やすくにの母になれんじやないか」

これこそ君に忠であり親には孝だと信じているのだ。それでは話にならなかつた。

「あああ、このうえまだ靖国の母にしたいの、このお母さんを。『靖国』は妻だけでたくさんでないか」

しかし大吉は、そういう母をひそかに恥じてさえたのだ。軍国の少年には面子めんつがあつた。彼は、母のことを極力世間にかくした。大吉にすれば、母の言動はなんとなく気になつた。ずっとまえにもこんなことがあつた。病気休きゆうか暇でかえつていた父に、ふ

たたび乗船命令が出たとき、大吉がまつさきにいきおいづいて、並木たちとさわぎたてると、母は眉根まゆねをよせて、おさええた声でいった。

「なんでしよう、この子。馬鹿かしら、ひとの気もしらずに」  
そういつて額ひたいをつんと指さきで押おした。ひよろひよると倒たおれかかった大吉は、腹を立ててむしやぶりついてきた。しかし、母の目に涙なみだがこぼれそうなのを見ると、さすがにしゅんとしてしまった。父は笑つて大吉をなぐさめた。

「いいよ、なあ大吉。まだ八つや九つのおまえらまでがめそめそしたら、お父さんも助からんよ。さわげさわげ」

しかしそういわれるともう騒げなかつた。すると、父は三人の

子どもをいっしょくたに抱かかえて、

「みんな元気で、大きくなれよ。大吉も並木も八津も、大きくなつて、おばあさんやお母さんを大事にしてあげるんだよ。それまでには戦争もすむだろうさ」

「えっ、戦争すむの。どうして？」

「こんな、病人まで引っぱりださにやならんところみると——」

だが、大吉たちにはその意味はわからなかった。ただ、じぶんの家でも父が戦争にゆくということかたみで肩身がひろかったのだ。一家そろっているということが、子どもに肩身のせまい思いをさせるほど、どこの家庭も破壊はかいされていたわけである。

戦死の公報がはいったのは、サイパンを失う少しまえだった。

さすがの大吉もそのときは泣いた。肘ひじを胸のほうにまげて、手首のところまで涙をふいている大吉の肩を、母は抱きよせるようにして、

「しっかりしようね大吉、ほんとにしっかりしてよ大吉」

じぶんをもはげますようにいい、そのあと、小さな声で、どんなに父が家にいたがったかを語った。

「行ったら最後まで帰れないこと、分かってたんだもん。それなのに大吉たち、大きわぎしたろう。気のどくで、つらくてお母さん……」

しかし大吉はそのときでさえ、なぜ母はそんなことをいうのだろうと思った。父はよろこび勇んで出ていったのだといってもら

いたかった。戦死は悲しいけれど、それだとして、父のない子はじぶんだけではないのにと、そのことのほうをあたりまえに考えていた。となり村のある家などでは、四人あつた息子が四人とも戦死して、四つの名譽めいよのしるしはその家の門にずらりとならんではない。大吉たちは、どんなにか尊敬そんけいの目でそれをあおぎ見たことだろう。それは一種の羨望せんぼうでさえあつた。

その「戦死」の二字を浮かした細長く小さな門もんびよう標ひょうは、やがて大吉の家へもとどけられてきた。小さな二本の釘くぎといっしよに状じようぶくろ袋ぶくろに入れてあるのを手のひらにあげて、しばらくながめていた母は、そのまま状袋にもどして、火鉢ひばちの引出ひきだしにしまった。

「こんなもの、門にぶちつけて、なんのまじないになる。あほら

しい」

怒おこったような顔をしてつぶやき、しよきしよきと米を搗つきはじめた。米はビール瓶びんの中で搗つくのである。病気で寝ていたおばあさんのおかゆのためで、大吉たちの口には入らなかつた。防空演習でころんで、それが病みつきになつたおばあさんは、もうどうていなおる見こみもなく、寝ているだけだつた。ころんだのがもとで病みついたのでなく、病みついていたからころんだのだらう、と医者はいつた。八十すぎて、髪かみもひげもまつ白となり村の医者は、なおる見こみのない病人のところへは、なかなかきてくれなかつた。ほかにたのむ医者はなく、せめてうまいものでもと心がけたが、なかなか手にはいらなかつた。海べにいて、魚さ

え手に入らないのだ。魚はありませんか、卵はありませんかと、一ぴきのめばる、一つの卵に三度も五度も頭をさげねば手に入らなかった。そのために母がひとりでかけまわった。

そしてある日、名誉の門標はいつのまにか火鉢ひばちの引出ひきだしから、門の鴨居かもいの正面に移っていた。母の留子るすに大吉がそこへ打ちつけたのである。小さな「名誉の門標」は、しかるべき位置に光っていた。「門標」の妻は、しばし立ちどまってそれを眺ながめた。ひとりの男の命とすりかえられた小さな「名誉」を。その名誉はどこどこの家の門かどぐち口くちをもかざって、恥をしらぬようにふえていった。それをもつともほしがっていたのは、幼い子どもだったのであろうか。

そうして、ついに迎むかえた八月十五日である。濁だくりゆう流が、どんな田舎いなかの隅すみずみまでも押おしよせたような騒さわぎの中で、大吉たちの目がようやくやくさめかけたとしても、どうしてそれを笑うことができよう。笑われる毛ほどの原因も子どもにはない。

戦争の残ざん飯ばんをあさる人たちも多おほいなかへ、生きのこつた兵隊が毎日のようにもどつてきた。生きてはいてももどれぬ兵隊、永久もとに戻ることのない父や夫や息子や兄弟たちの、かつての名誉の門標は家々の門から、いつせいに姿を消し、ふたたび行方不明になつた。それで戦争の責任をのがれでもしたかのように。

同じようにそれのなくなつた家で、思いがけなく大吉は、妹の八津のとつぜんの死をむかえねばならなかつた。おばあさんがな

くなつてから一年目のことである。わずか一年そこそこのうちに、三人の死を迎えたわけだった。父のように大海の泡沫ほうまつのなかに消えて姿を見せない死、おばあさんのように病やみほうけて枯木かれきのようになつてたおれた生しょうがい涯き、昨日きのうまで元気だったのが一夜のうち夢のように消えてしまった、はかない八津の死。そのなかで八津の死はいちばんみんなを悲しませた。急性腸カタルちようだった。家のものにだまつて、八津は青い柿かきの実をたべたのである。もうひと月もすればうれるのに、渋しぶくはないということ、八津はそれを食べたのである。いつしよに食べた子もあるのに、八津だけが命をうばわれた。

戦争はすんでいるけれど、八津はやっぱり戦争で殺されたのだ。

母がそういつたとき、大吉はきゆうには意味がのみこめなかつたが、だんだんわかつてきた。近年、村の柿の木も、栗くりの木も、熟うれるまで実みがなっていたことがなかつた。みんな待ちきれなかつたのだ。

子どもらはいつも野に出て、茅花つばなをたべ、いたどりをたべ、すいばをかじつた。土のついたさつまをなまで食べた。みんな回かいち虫ゆうがいらしく、顔色がわるかつた。そんななかで病氣になつても村に医者いしやはいなかつた。よくきく薬もなかつた。医者も薬も戦争にいつていたのだ。おばあさんの亡なくなつたときには、村の善法寺ぜんぽうじさんまでが出征して留守るすだつた。近村の寺の坊さんは、

戦死者でいそがしかった。終戦のちよつとまえに帰った善法寺さんは、帰るとすぐ供養くようにきてくれたが、今また、つづけて八津のためにお経ききょうをあげてもらふことになるなど、どうして考えられたろう。

おばあさんは死ぬまえ、菩提寺ぼだいじにお坊さんもないことをくやんだが、小さな八津は坊さんのことなど考えたこともなかったろうと思うと、大吉は、声はりあげて経をよむ坊さんまでがうらめしかった。お母さんの話では、八津が生まれたときにお父さんはもう、からだのぐあいが少し悪くなりかけていて、船をおりて養よ生うじょうするつもりだったという。永年、世界の七つの海を渡りあわたるいたお父さんは、今はもう家に帰って休みたいといい、八つ目

の港をわが家にたとえて、そのとき生まれた女の子に八津という名をつけた。しかし、病気のお父さんもわが家の港に病気をやしなうことができず、希望をかけた八津もまた死んでしまった。：

：

ものがとぼしく、八津のなきがらをおさめる箱も、材料をもつてゆかねば作れないといわれ、少しこわれかけていた昔のたんすでつくることにした。花までが人間の生活のなかから追いだされていた。大吉は並木と二人で墓場<sup>はかば</sup>へゆき、ジャノメ草やおしろい花をとってきて八津をまつた。もとは花もたくさん作っていたという庭は、大吉たちの記憶<sup>きおく</sup>のかぎり、大根やかぼちや畑で、せまい軒先<sup>のきさき</sup>にまでかぼちやは植えられて、屋根にはわせていた。

八津がなくなるとお母さんは、泣きながら軒のかぼちやをひきちぎるようにしてぬきとった。うらなりの実が三つ四つ、長い蔓つるに引きずられて落ちてきた。そのなかの丸いのを盆ぼんにのせて仏壇ぶつだんに供えたのだったが、疫痢えきりという噂うわさが立って、だれもきてくれぬ通夜つやの枕まくらもとにすわって、いつもの停電がすんだあと、お母さんはふと気がついたように、枕まくらにした小さなゾーリングンの庖ほうちょう丁ちょうをとりあげ、いきなり、ぐさりとかぼちやの横腹につき立てて、大吉たちをおどろかした。ゾーリングンはお父さんが買ってきたものだった。もしも、お母さんが笑っていなかったなら、日ごろ、こわいと教えられているゾーリングンである。大吉たちは悲鳴ひめいをあげたかもしれぬ。しかしお母さんは笑っていたのだ。

泣きはらした顔の笑顔は、ちがった人のように見えたが、なんでもない、なんでもないという目の色は大吉たちを瞬しゅんかん間で安心させた。

「いいもの、八津にこしらえてやろう。こんなこと、お前たち、知らないだろ。八津はどうとう知らずじまいじゃ。かぼちやはうらなりでも食べるものと、大吉ら、そう思ってるだろう。お母さんらの子どもときは、かぼちやのうらなりは、子どものおもちや。ほら、これが窓——」

かぼちやの横腹は四角にきりぬかれた。

「こつちは、丸まるまど窓まどといたしましょう。少々むつかしいな。手てしお塩皿ざいらもつてきて大吉、型をとるから。それとお盆ぼんもな。わた出

すから」

大吉と並木は目を丸くしてみていた。できたのは提灯ちようちんだつた。窓に紙をはり、底に釘くぎをさすとうろうそくの座もできた。配給のろうそくをともすと、いかにもそれは、八津のよろこびそうな提灯であつた。悲しみを忘れて大吉はいった。

「お母さん、工作、満点じや」

小さな棺かんができてくると、提灯ちようちんは八津の顔のそばに入れて

やった。八津がもつて遊んでいた貝がらや紙人形もそばにおいた。悲しみがきゆうにおしよせてきて、大吉も並木も声をあげて泣いた。おんおん泣きながら大吉は、八津がいつもほしがっていたチエノワを思いだし、かしてやらなかつたじぶんの不親切をじぶん

でせめながら、いまあらためて、それを八津にやろうと思った。胸むねに組みあわせた手にもたせようとしたが、冷たい手はもうそれをうけとってはくれず、チエノワはすべつて棺かんの底に落ちた。並木も泣きながら、彼もまた八津の目にふれぬようにしまいこんであつた大事な色紙をもつてきて、鶴つるや奴やつこや風船ふうせんを折つて入れた。そんなものをもつて、八津は死出しでの旅路たびじについたのである。

こういうことがあつて、大石先生はきゆうにふけたのである。白髪しらがさえもふえた。小さなからだはやせるとよけい小さくなり、腰こしでもまげると、おばあさんそっくりになつた。小さいながらも大吉はどきんとし、こんどはお母さんが、どうかなるかとあんじた。人のいのちの尊とうとさを、しみじみと味わえる年になつてきた。

お母さんを大事にしてあげるんだぞ——

お父さんのことばが生きてきた。

「お母さん、薪まきはぼくがとつてくる」

そういつて並木といっしよに山へゆく。

「お母さん、配給は、ぼく、学校の帰りにとつてくるから」

遠い配給所へゆくのも彼の役になった。並木もまけてはいられなかった。

「お母さん、水やこい、みんなぼくがくんであげる」

涙なみだもろくなつたお母さんは、

「きゆうにまあ、二人とも親孝行になつたなあ」

これほどよわり、いたわられている彼女が、ふたたび教職にも

どれたのは、かげに早苗さなえの尽じんり力があつたのだ。早苗はいま、岬みさきの本村の母校にいた。

「四十じゃあね。現職げんしきにいても老ろう朽きゆうでやめてもらうところじやないか」

首をかしげる校長へ、再三頼たのんで、ようやく、岬ならばということでは話わがきまつた。しかもそれは大石先生のもっている教員としての資格しきかくではなく、校長いちぞんで採決さいけつできる助教じよきょうであつた。臨時教師りんじなのだ。かわりがあれば、いつやめさせられるかもしれないのだ。早苗は、気のどくさにしおれて、それを報告した。大石先生の目は、異様にかがやいたのである。

「岬なら、願ねがつたり、かなつたりよ。まえの借りがあるから」

条件の悪さなど気にもかけず、心の底からつきあげてくるような笑顔をした。そのとき大石先生の心には、忘れていた記憶きおくが、いまひらく花のような新鮮さでよみがえっていたのだ。

せんせえ またおいでエ……

足がなおつたら またおいでエ……

やくそく したぞオ……

あのとき、じぶんのあとへ赴任ふにんしていった老朽ろうきゆうの後藤先生

と同じように、じぶんもまた人にあわれまれているとも知らず、

いや、大石先生がそれを知らぬはずはなかった。しかし幼い二人おきな

の子をかかえた未亡人の彼女もまた、やはり後藤先生と同じく、

よろこんで岬へゆかねばならなかったのだ。しかし彼女はいま、

近づいてくる岬の村の山々の、夜気に洗われた緑のつややかさを  
見ると、じぶんもまた若がえつてくるような気がした。昔、洋服  
も自転車も人にさきがけた彼女も、今では白髪まじりの髪の毛を  
無造作にひつつめ、夫の着物の紺がすりで作ったモンペをつけ、  
小さな息子に舟でおくられている。昔のおもかげを強いてさがせ  
ば、きゆうにかがやきだした瞳の色と、若々しい声であるかもし  
れぬ。なまいきといわれてけなされた彼女の洋服や自転車は、そ  
れがきつかけになつてはやりだし、いまでは村に自転車に乗れぬ  
女はないほどだ。だが二十年近い歲月は、もうだれも若い日の  
彼女をおぼえてはいまい。

陸地がすうつとすべるように近づいたと思うと、船はもう渚ち

かく寄っていた。ふなれな手つきで水棹みずさおを押す大吉と、見なれぬ大石先生に、昔どおり村の子どもはぞろぞろ集まつてきた。しかし、そのどの顔にもおぼえはなかった。永い年月の衣料の不足は、質素しつそな岬の子どもらもうえにいっそう哀れあわれにあらわれていて、若布わかめのようにさけたパンツをはき、そのすきまから皮膚ひふの見える男の子もいた。笑いかけるとおびえたような目をしたり、無感動な表情のまま深い関心を見せて道をひらいた。珍めづらしげにじろじろ見るのは昔のままであつた。その好奇の目にとりかこまれながら、大石先生ははずみをつけてとびおりた。石ころ一つにさえ昔のおもかけが残っているようなつかしき。少し船に酔よつたらしく、頭がふらついた。ゆっくり歩いていると、うしろにささやく

声がした。

「たいがい、せんせど、あれ」

「ほんな、おじぎしてみるか、そしたらわかる」

思わずにつとした顔の前へ、ばたばたと三、四人の小さな子どもが立ちふさがり、ぴよこんと頭をさげた。新学期に近づいて新入生におじぎがとり入れられたのをしおに、まだ学校ではないらしい小さな子らも、まねているのである。会えしやく釈をかえしながら、大石先生は涙なみだぐんでいた。まず、幼い子らに歡かんげい迎むかえされたような気がしてうれしかったのだ。そつと目がしらをお押さえ、笑顔を見せた。あらためて見たが、すぐに思いだす顔はなかった。道ゆく人もそうだった。昔ながらの村の道を、なんと変わった人の

姿であろう。とはいえ、そのなかでもっとも変わっているのがじぶんだとは、気がつかなかった。その大石先生を追いぬき追いつき、三々五々と走ってゆく生徒たちもたえなかった。ちらりちらりと、こちらをぬすみ見しては走りさってゆく。それらの姿から、わざと目をそらしたのは、見られたくないものが光ってこぼれそうだったからだ。

ひとり帰ってゆく大吉のほうへ手をふってみせてから校門をくぐった。古びてしまった枚舎の、八分どおりこわれたガラス窓をみたとき、しゅんかん瞬間、絶望的なものが満ち潮しおのように押しよせてきたが、昔のままの教室に、昔どおりに机つくえと椅子いすを窓べりにおき、外を見ているうちに、背骨せぼねはしゃんとしてきた。なにもかも古い

この学校へ、新らしいものがやってきはじめたからだ。古い帯おびし 芯んらしい白い布で作った新らしいかばん。まん中に一本縫ぬい目のあるらしい銘めい仙せんのふろしき、そのなかには、新聞紙を折りたたんだだけのような、表紙のないそまつな教科書がはいっているだけでも、子どもたちは希望にもえる顔をしていた。昔どおりの岬みさきの子の表情である。十八年という歳さい月げつを昨日きのうのことのように思い、昨日につづく今日のような錯さつ覚かくにさえとらわれた。大げさな始業式もなく教室にはいると、さすがにかあつと顔に血がのぼるのを感じた。それでも、なれた態度で出席をとった。若く、はりのある声で、「名前をよべば、大きな声でハイと返事をするのよ」と前おきをして、

「川崎覚さん<sup>かわさきかく</sup>」

「ハイ」

「加部芳男さん<sup>かべよしお</sup>」

「ハイ」

「元気ね。みんな、はつきりお返事ができそうですね。加部芳男さんは、加部小ツルさんのきょうだい？」

いま、返事をほめたばかりなのに、もう加部芳男はだまつてかぶりをふる。名前をよばれたときでなければ、ハイとはいえないもののように。しかし先生は笑顔をくずさずに、

「岡田文吉さん<sup>おかだぶんきち</sup>」

それは明らかに磯吉の兄の子どもとさっしられたが、盲目<sup>めくら</sup>にな

つて除隊された磯吉につらい兄である聞いて、ふれずにつきに  
移つた。

「山本克彦さん」  
やまもとかつひこ

「ハイ」

「森岡五郎さん」  
もりおかごろう

「ハイ」

「正の顔が大きく浮かんで消えた。」  
ただし

「片桐マコトさん」  
かたぎり

「ハイ」

「あんた、コトエさんの家の子」

マコトはぽかんとしていた。彼女は小さいときなくなった姉の

ことなどおぼえていなかったのだ。それでもう、古いことはきくのはやめた。西口ミサ子の娘は、勝子かつこといった。そのほか三人の女の子のなかに、赤い新しい洋服をきた川本千里かわもとちさとという子どもがいた。がまんできず、休み時間のとき、それとなくきいてみた。

「ちさとさんのお父さん、大工だいくさんね」

すると千里は、松江そっくりの黒い目を見はつて、

「ううん、大工さんは、おじいさん」

「あら、そうだったの」

しかし彼女の学籍簿がくせきぼには、彼女の父は大工とあった。

「松江さんて、だあれ、姉さん？」

「ううん、お母さん。大阪におるん。洋服おくつてくれたん」

どきんとした。そして、この組に仁太にたやマスノがいないことにほつとし、またそれで、さびしくもなつた。仁太がいれば今ごろはもう、十人の新入生の家庭事情はさらけだされ、めいめいのよび名やあだ名までがわかつているだろう。その仁太や竹一や正は、そして、磯吉や松江や富士子は、と思うと、彼らのときと同様、いちずな信頼しんらいをみせて今日新らしい門をくぐつてきた十人の一年生の顔が、一本松の下に集まつたことのある十二人の子どもの姿にかわつた。思わず窓の外を見ると、一本松は、昔のままの姿で立っている。そのそばに、二人の男の子が、じつと岬みさきを見ているかもしれない。そんなことも知らぬげな姿である。

大石先生はそつと運動場の隅すみにゆき、ひそかに顔をとのえねばならなかった。そういう彼女に、早くもあだ名ができていたのを、彼女はまだ知らずにいた。岬の村に仁太はやつぱりいたのである。だれが先生の指一本の動きから目をはなそう。

彼女のあだ名は、泣きみそ先生であつた。

## 十 ある晴れた日に

四月とはいつてもまだ寒さの名残りなごりは午後の浜べにみちていた。砂の上に足をなげだしていた大石先生は、思わず立ちあがつて、はたはたとモンペのひざをはたいた。そのうしろ姿へ呼びかける

者があつた。

「先生、そんなところで、なにしておいでますか？」

西口ミサ子であつた。

「まあ、ミサ子さん」

はでな花模様はなもようの銘仙めいせんの袷あわせにきちんと帯つきで、ミサ子はこ

れからどこかへ出かけそうなかつこうに見えた。あらたまつたあ  
いさつのあと、きゆうに親しさをみせて、

「先生にお目にかかりたくて、いま、学校へゆくところでしたの  
そういつてから、もう一度あらためて腰こしをごごめ、

「先生、このたびはまた、ふしぎな御縁ごえんで勝子がお世話になるこ  
とになりました、どうぞよろしくお願いもうします」

そのゆつくりとしたものいいぶりや、ていねいなものごしは、二十年前の彼女の母親にそっくりであった。しかしミサ子のほうは、さすがにあっさりとし地きじをみせ、なつかしそうにいった。

「先生がまた岬みさきへおいでるといふのを聞いて、わたし、うれしく涙なみだが出ましたの。母子おやこ二代ですもの。こんなこと、めずらしいですわ、ほんとに。でも先生、お達たっしゃ者で、よろしかったこと」

「おかげさまで。でも、みんな、いろんな苦勞をくぐりましたね」  
それには答えず、あたりを見まわしながら、ミサ子は、

「先生が怪我けがをしたところ、ここらへんでしたかしらん？」  
なつかしそうな目をしていった。

「そう、でしたね。よく思いだしてくれましたこと」

「そりやあ忘れませんわ。ときどき思いだしては早苗さなえさんと話していたんですもの。わたしらわたしらのクラスは、岬さかに学校がひらかれていらいの変わりものの寄り集まりらしいって。ほら、あのとき、先生とこまで歩いていたりして」

そういいながら、はるかな一本松に目をやり、ちようど近づいてきた大吉の舟を、げん顔でながめた。舟はもう目の前にその姿を見せていたのだ。そのほうを、顔をふつてしめしながら、大石先生は笑顔でいった。

「ミサ子さん、あれ、わたしの息子むすこですよ。ああして毎日、わたしを迎えむかにきてくれますの」

それを聞くとミサ子は驚おどろきを声に出し、

「まあ、そうですね。それで先生、浜においでたんですか」

もう三日つづいていいる大吉の出迎えを、ミサ子はまだしらなかつたのだらうか。昔からあまり人とまじわらない家風をミサ子もうけついでいるようにみえた。しかし時代の風はミサ子の家の高い土塀どべいをも忘れずにのりこえて、彼女の夫をもさらっていったま、まだ帰らぬ兵隊のひとりに加えていた。だが目の前に見るミサ子は、くつたくのない娘むすめのように大らかに、昔ながらの人のよい顔つきでにこにこしていた。そまつなモンペから足をぬくことができないでいる村人のなかで、彼女ひとは大家の若奥さまなのだ。永い年月の昨日から今日につづくさまざまな苦勞を、どのようにしてミサ子はくぐってきたのであろうか。終戦のときには、

西口家の倉庫そうこにも、軍の物資ぶつしが天井てんじようまで積みあげてあるという噂うわさもあつたが、ほんとうかうそかさえも分からずにすぎている。その物資でミサ子の家はふとつていいるという噂も聞いたが、ミサ子の顔つきには、そんな悪のかげりはみえなかつた。

今も彼女は大石先生と肩かたをならべ、大吉の舟のひとゆれごとに本気な心配をみせた。

「この風では、子どもには少し無理ですわ、先生。あ、あぶない！」

大吉の小さなからだは櫓ろといつしよに、海にのめりこみそうに見えたりする。そのけんめいさは、小舟とともに大吉の小さなからだにあふれていて、見ているこちらもしぜんりきに力りきんできた。お

かでは寒くさえあるのに、大吉は汗あせみずくにちがいがなかった。

「自転車は、もうお乗りにならないんですか、先生」

ミサ子から声をかけられてもそれに耳をかすゆとりもなく、大石先生は、波にもまれる大吉を小舟もろともたぐりよせたい気持ちで見ていた。ミサ子はかさねて、

「雨や風の日には、舟はむりでしょう。自転車のほうが、かえって早いでしょうに」

「ええ、でもねミサ子さん、自転車なんて、きょう日はび、買うに買えないでしょ。もしも買えるとしても、ふところが承知しょうちしない」

舟から目をはなさずにいいながら、以前でさえも月賦げつぷで買った

ことを思いだした。それをしてくれた富子という自転車屋の娘は、そのあと結婚して東京でくらししていたのだが、はがきさえも品切れがちの戦争中に消<sup>しょうそく</sup>息もたえ、そのままになっている。東京の本所<sup>ほんじよ</sup>で、やはり自転車屋をしていた彼女一家が、今どこにどうしているか、おそらくは三月九日の空<sup>くう</sup>襲<sup>しゆう</sup>で一家全滅<sup>ぜんめつ</sup>したのではなからうかと考えだしたのは、戦争も終るところだった。わが身のあわたましい転<sup>てん</sup>変<sup>ぺん</sup>に心をうばわれ、人のことどころではなかったのだ。

K町の富子の父たちの住んでいた家はいまも自転車屋であるが、どんないきさつからか戦争中に店主がかわつて、今では、いつ見ても貧<sup>ひん</sup>相<sup>そう</sup>な感じの年とつた男が一人、きたない古自転車をいじ

くつているだけだった。そこでも、あととり息子が戦死したのだ。新らしい自転車など、どこにあるのだろう。だのにミサ子は、しごくかんたんに行った。

「先生、もしも自転車をお買いになるんでしたら、ご相談にのりますから」

それがどういう意味なのか問いかえすひまもなく、大吉の舟はきゆうに速力をまして近よつてきた。陸地のかげにはいつて、風がなくなつたのであろう。大吉は母親にだけにとつと笑つて、そつぽをむいてすましていた。水<sup>みず</sup>棹<sup>さお</sup>を押<sup>お</sup>していつもするように舳<sup>へさき</sup>を砂浜によせ、母親の乗りこむのをまつている大吉の横顔に、いつもとちがったことばがいち早くとんできた。

「ぎ、坊ちゃん、つかまえてますから、あがつてらっしゃい」

おどろいてふりかえる大吉に、こんどは大石先生が笑いかけ、

「大吉、ひと休みしたら？」

だまってかぶりをふる大吉へ、かさねて、

「ちよつとお母さん、この方に、お話があるの。だから、そのあいだけ待って」

大吉はおこつたような顔をして、だまって浜にとびおりた。大きな石にとも綱づなをとるのをまっつて、

「大吉も、ここへおいで」

大吉もいる前で、ミサ子に自転車の話をききたいと考えたのだが、もうそのことは忘れたような顔をしているミサ子と、大人おとなっ

ぼく膝ひざをだいて沖おきを見ている大吉きちにはさまれて坐すわると、どうしたのか自転車のことは口に出したくなくなつた。どんな方法がミサ子にあるというのか。いずれは、おたがいの心をよごすほかに道がないことがわかるように思えたからだ。重くるしくだまつていると、それをほごすように、ミサ子は氣がるに話しだした。

「早苗さんと、こないだ話したんですけど、わたしらのクラスだけで、先生の歡迎かんげい会かいをしようかつて」

「まあうれしいこと。でも、歡迎かんげいしていただくほど、わたしは役だちますかどうか。ここへくるまでは、昔むかしのまま元氣なつもりでしたのね、きてみると泣けて泣けて。泣けることばかりが思いだされましてね……」

そういつてもう涙ぐなみだんでいる先生だった。それをいそいでぬぐい、思いさだめたようすを声のひびきにこめて、

「しかしまあ、うれしいことですよ。クラスの人、何人いますの」  
「男が二人、女が三人。でも女のほうは小ツルさんやマツちゃんも呼ぼうと、いつてますの」

「マツちゃんて、川本松ちゃん？」

「え、ながいこと、どこにいたやらわからなかったのが、戦争中にひよっこり、もどつてきたんですの。ほんのちよつと居ただけで、またどこかへ出てゆきましたけど、マスノさんが所を知ってるそうです。マツちゃん、きれいになって先生、みちがえそうでしたわ」

そういいながら、ミサ子の顔に異様な表情が走つたのを、わざと気づかぬ顔で大石先生は、おとといの教室を思いだしていた。

——ちさとさんは、お父さんもおじいさんも大工さん？

——ううん、大工さんは、おじいさん。

——松江さんて、お姉さんでしょ？

——ううん、お母さん。大阪におるん。洋服おくつてくれたん。松江そつくりの黒い目をかがやかせた川本千里であつた。それについて、ミサ子に聞く気はおこらなかつた。しかし、別のことできかずにいられないことがあつた。

「それよりか、富士子さんはどうしてるか、わかんないの？」

ミサ子は松江のときの表情をいつそう強めていった。

「あの人こそ先生、かいもく行方不明ですわ。なんでも戦時中、なりきん成金さんにうけだされて出世したという噂うわさもありましたけど、どうせ軍需会社ぐんじゆでしょうから、今はどうなりましたか……」

知らずしらず顔色に出たミサ子の優越感ゆうえつかんにも、人生の裏道を歩いているらしい松江や富士子のことにも、わざと目をそらすかのように大石先生はうつむいて、じぶんにでもいつて聞かせるように小声でつぶやいた。

「生きていれば、また会うこともあるけれど、死んでしまつちやあね」

ミサ子もしんみりと声をおとし、

「ほんとですわ。死んで花実はなみが咲くものか……。コトやんが死ん

だのは、ごぞんじですか？」

だまつてうなずく先生に、ミサ子は立てつつけて、

「ソンキさんのことは？」

おなじようにうなずく先生の目に、またも涙はあふれていた。

磯吉が失明して除隊になったと早苗から聞かされたとき、早苗と  
いっしよに声をあげて泣いた先生であったが、あのときの悲しみ  
は今も心の底に沈しずもっている。早苗が見舞みまいにゆくと、磯吉は眼が  
帯たいをした顔を膝ひざにつくほどうつむきこんで、いつそ死んだほう

がよかったとしよげきっていたという。質屋の番頭をこころざし  
ていた彼が、貧しい実家にかえつての立場を思うと死にたかった  
磯吉の気持もさっしられて、泣いたのだが、今はもうちがってき

ている。その後の磯吉が、町のあんまの弟子入りでしをしたと聞いて、彼のそのおそがけの出発にほつとしていたからだ。たった一つの生きる道、その暗黒の世界を磯吉はどのように生きぬくであろうか。しかしミサ子は、じぶんの心の貧しさをさらけだすようなことをいった。

「生きてもどつても、めくらではこまりますわ。いつそ死ねばよかつたのに」

だれが磯吉をめくらにしたか、そんなことはちつとも考えてはいないようなミサ子のことばに、もう逃にげてはいられないとばかりに、大石先生はいった。

「そんなこと、ミサ子さん、そんなことどうしていえるの。せつ

かく立ちあがろうとしているのに。ことにあなたは同級生よ」

叱しかられた生徒のようにミサ子はあわてて、

「でも、でも、ソンキさんは、人にあうと死んだほうが、ましじや、ましじやというそうですもの」

じぶんの考えの浅さに目がさめたように、あかい顔をしてミサ子はいった。

「それを、気のどくだと思わないの。死にたいということは、生きる道がほかにないということよ。かわいそうに。そう思わないの」

「そりや、思いますとも。かわいそうですわ。なんといったって同級生ですもの。でも、だいたい、わたしたちの組はふしあわせ

ものが多いですね、先生。五人の男子のうち三人も戦死なんて、あるでしょうか」

ならんでいる大吉に肘をつつかれて、大石先生はきゆうに気がついてふりかえった。六、七人の子どもが、三人のすぐうしろを、みだれた半円形にとりまき、珍らしそうにながめていた。きゆうにふりむかれて子どもらは、飛びたつ鳥のように走りだしたが、走りながら叫んだ。

泣きみそ せんせ

泣きみそ せんせ

すぐうしろの丘の共同墓地のほうへ逃げてゆくを見ると、

「ちよつと、お墓へまいりましたようか、ミサ子さん」

「え、水もらっていきましよう」

ミサ子はすばやく立って小走りに、道ばたの家へはいつていった。まもなく手桶ておけをもって出てくるのを見ると、大石先生はあごをしゃくつて墓地のほうをしめしながら、

「すぐそこ、ほんの十じゅっぶん分ぶんかそこらだから、まっつてね。お母さんの教え子の墓まいりなんだから。いっしょに、きてもいいけど」

なんとなく不眠らしい大吉を残して、二人はならんで歩きだした。

「まあ、ノツポになったことミサ子さん。あんた一ばんちっちゃかったでしょう」

「いいえ、コトやんです。そのつぎがわたしでしたわ。……先生、コトやんの墓」

道ばたから二足三足はいったところに、そのコトエの墓はあった。雨風にさらされ、黒くなった小さな板屋根の下に、やはり黒つぽくよごれた小さな位牌いはいが一つ、まるで横になって寝ねているように倒たおれていた。生前のコトエが使っていたのであろうか、浅い茶碗ちやわんに茶色の水が半ば干ひからびていた。それになみなみと水をそそぐそのわきで、大石先生は位牌いはいをとって胸にだいた。これだけが、かつてのコトエの存在を証明するものなのだ。俗名コトエ行年二十二歳さい ああ、ここにこうして消えたいのちもある。医者も薬も、肉親にくしんのみとりさえもあきらめきつて、たったひとり

物置きすみの隅で、いつのまにか死んでいたというコトエ。——もしもわたしが男の子だったら役にたつのにというて、お父さんがくやむんです。わたしが男の子でなかったから、お母さんは苦勞するん……

男に生まれなかったことをまるでじぶんや母親の責任であるかのようにいった六年生のコトエの顔が浮うかんでくる。希望どおり彼女が男に生まれていたとしても、今ごろは兵隊墓うぼにいるかもしれないこの若いのちを、遠慮えんりよもなく奪うばつたのはだれだ。また涙である。

「去いに。めずらしげにつきまわらんと」

そういったミサ子の叱しかり声で、子どもたちに見られていること

に気がついた。

「ほんとに、いよいよ泣きみそ先生と、思うでしょう」

そういつて笑うと、ミサ子もいつしよに笑いながら、うながすように柄杓ひしやくをさしだし、

「先生、さ、お水」

いつのまにまつたのか、摘つみ花のマユミの葉が茶碗に青くもりあがっていた。兵隊墓は丘のてっぺんにあつた。日清にっしん 日露にちろ

日華にっか と順じゆんをおつて古びた石碑せきひにつづいて、新らしいのはほと

んど白木しらぎのままの朽くちたり、倒たおれているのもあつた。そのなかで

仁太や竹一や正のはまだ新らしくならんでいた。混乱こんらんした世相

はここにもあらわれて、罪つみもなく若い生命いのちをうばわれた彼らの墓ぼ

前に、花をまつるさえ忘れていたことがわかった。花立ての椿は  
がらがらに枯れて午後の陽をうけている。きちんと区画した墓地  
に、墓碑だけがならんでいる新らしい兵隊墓。人びとの暮しは  
そこへ石の墓を作つて、せめてものなぐさめとする力も今はなく  
なつてゐることを、墓地は語つていた。

それは大石先生の心にもひびくことであつた。同じような夫の  
墓を思いながら、あちこちと春草の萌えだした中からタンポポや  
スマレをつんで供えると、二人はだまつて墓地を出た。もう泣い  
てはいなかつたが、うしろからぞろぞろついてくる子どもたちは、  
あいかわらずよびかけた。

「泣きみそ せんせえ」

すると、うてばひびくように、大石先生はふりかえりざま答えた。

「はアいい」

おどろいたのはミサ子だけではなかった。子どもたちのやんやと笑う声をうしろに、先生も笑いながら、まだ知らぬらしいミサ子にいった。

「どうも、へんなあだ名よ。こんどは泣きみそ先生らしい」

若葉の匂うにおような五月はじめのある朝、大石先生は校門をくぐるなり、一年生の西村勝子の待ちかまえていたらしい姿に出あった。

「せんせ、ゆうびん」

ほこらしげに勝子は、一通の手紙をつきだした。

——たまの日曜日、先生も御用の多いこととおさっしいたしますが、どうぞどうぞお出かけくださいませ。一度御相談してか  
らと思つていますうちに、だんだん<sup>むぎ</sup>麦も色づきだしましたし、  
麦刈りが近づくにつれ、しだいにむつかしくなりそうでしたの  
で、大いそぎ私たちでとりきめました。この日ですと、たいて  
いの顔がそろはずですから、どうぞお出かけくださいますよ  
う……

例の歓迎会かんげいかいの案内あんないである。ミサ子やマスノの名も書いてあったが、早苗の字なのは、はじめからわかっていた。読み終わった先生は、勝子にむかつて、

「お母さんに、先生が、ハイっていつてたといつてね。わかつた。ただね、ハイっていえばいいの」

だが、ひとりじぶんの机つくえの前に腰こしかけると、さて困つた、とつぶやいた。というのは、ちようどその日にあたるあさつての日曜日には、少し早い八津の年忌ねんきをしようと、昨夜大吉たちと約やくそく束くをしたばかりなのであつた。いなりずしでも作ろうというのと、

「わあつ！」

と、並木はからだごと歓声かんせいをあげ、大吉は大吉で冗らしい思し

慮りよをめぐらしていたのである。

「お母さんお母さん。八津の墓はかにもいなりずしもつてつてやろう。

ぼく、明日あした学校の帰りにK町のやみ市であぶらげ買ってきとく。

お母さんお母さん、あぶらげ何なんまい枚たのむん？ お母さんお母さ

ん、やみ市でも大豆だいず持つていくん？ 何なんごう合もつていくん？ お

母さんお母さん、ぼくたち、今日から瓶びんで米つこうか——」

こんなときやたらお母さんお母さんとかさねてというのが大吉の

くせであった。よほどうれしかったのだ。それをのぼすといつた

ら、どんなにかがっかりするだろう。年忌ねんきとはいつても、時節じせつが

ら客をまねいたり、坊さんをよんだりするのではない。いわば、

いつも留守番るすばんをしたり、送り迎えむかをしてくれる二人の息子をなく

さめるための計画であり、久しぶりに月給をもらったひそかな心祝いでもあった。それを八津に結びつけたのは、八津と同じ年の一年生を見るにつけ、八津が思いだされたのもあったし、ミサ子といっしょに仁太や竹一たちの墓へまいったりしたことからの思いつきでもあったろう。

その日先生は家へ帰ってから、二人の子どもの前で話しだした。

「なあ、君たち、こまったことができたんだけど、あさつての日曜日、お母さん用事ができたの。八津の年忌ねんき、一週間のぼさうよ」

「いやっ」

「いやだっ」

二人はま正面から反対した。

「そう。こまったな。お母さんの昔の教え子<sup>むかし</sup>がね、歓迎会<sup>かんげいかい</sup>をしてくれるというのよ。歓迎会<sup>かんげいかい</sup>つて、よろこんでむかえてくれる会よ。それをことわるわけには、いかんだろ」

「いやっ。やくそくしたもん」

いつも留守番の時間の多い並木はひるまずそうだったが、大吉はさすがにだまっていた。しかしその顔には、失望の色がはつきりあらわれていた。

「そうよ。おまえたちと約束したから、お母さんこまったのよ。いっしょに考えてよ、並木も大吉も。お母さん、歓迎会にいかないで、家にいたほうがいい？」

そして、手紙をよんで聞かせた。二人ともだまりこんで、顔を

見あわしていたが、やがて並木は、ぶつぶつとつぶやいた。

「やくそくしたもん。ぼくらのやくそくのほうが、さきだもん。

民主主義だもん」

民主主義に思わずふきだしたお母さんは、それと同時に一つの考えがうかんだ。

「じゃあね、これはどう。八津の年忌ねんきはのぼすのよ。そして、あ

さつては本村へピクニックとしようや。お母さんの会は水月楼すいげつろう

よ。ほら、香川マスノつて生徒のやつてる料理屋りょうりや。そこで、歓

迎会がすむまで、おまえたち、本村の八幡さまや観音さんで遊ぶ

といい。お弁当べんとうは、波止場はとばでも食べなさいよ。そうだ、釣つりざ

竿おもってって波止場で釣りしたっておもしろいよ。どう？」

「わあつ、うまい、うまい」

並木がまたさきに歓かんせい声をあげ、大吉もさんせいらしい笑顔でうなずいた。

日曜日は朝から曇くもっていた。ふりさえしなれば、一本松から一里の道を歩くにはかえって都合がよかつた。歓迎会は一時からというので、十二時にはもう家を出た。以前ならば十五分ほどバスにのればゆけた道を母子はてくてくと歩きだした。珍めずらしいことなので、出あう人がきいた。

「おそろいで、どちらへ？」

返事をするのは並木ときまつていた。並木は少しふざけて、

「ぴくにいくんだよ」

それはピクニックというのをわざとそういつたのであるが、だれにも通じなかつた。ききかえすものもなかつた。それがまた、二人にはおもしろくてたまらなかつた。向こうから知つた人の姿があらわれるたびに、

おそろいでどちらへ、

と二人は、母子三人だけに聞こえる声でいう。すると、かならずそれはあつた。

「おそろいでどちらへ？」

「ぴくにいくんです」

並木はすぐ早口でいって、とつとゆきすぎた。大吉がおつかけていって、二人はしやがみこんで笑う。こんなことは生まれ

てはじめてなので、二人はうきうきしていた。何度も同じことをくりかえしているうち、もうたずねる人もなくなつたころには、隣りの村にさしかかつていた。とな本村にさしかかり、お母さんと別れねばならぬ場所が近づくと、さすがのきょうだいも少し不安になつたらしく、かわるがわるきいた。

「お母さん、ぼくらのピクニツクのほうが早くすんだらどうしよう」

「そしたら水月の下の浜で、石でも投げてあそんどればいい」

「本村の子が、いじめにきたら」

「ふん、並木もいじめかえしてやりやあい」

「ぼくらより強かったら」

「かいしようのない、大きな声でわあわあ泣くといい」

「笑われらア」

「そうだ、笑われらア。泣き声がきこえたら、お母さんも水月の二階から手たたいて笑ってやらア」

「お母さんの歓迎会、かんげいかい浜の見える部屋？」

「たぶんそうだろう？」

「そんならときどき顔出して見てなあ」

「よしよし、見て、手をふってあげる」

「そしたら、大石先生とこの子じゃと  
思うて、いじめんかもしれ  
ん」

並木に大石先生といわれたことで、大石先生は思わずにやりと

なり、

「へえ、大石先生か、このお母さんが……」

みさき

岬では泣きみそ先生といわれているといおうとしてやめた。別れ道へきていた。そこから二人は八幡山へ登るのだった。十間じっけんほどもいってから、大吉が叫さけんだ。

「お母さん、もしも、雨降ってきたら、どうしようか？」

「あんぽんたん。二人で考えなさい」

水月まではもうあと十分たらずだった。まっすぐに歩いてゆくと、向こうから早苗とミサ子が子どものように走ってきた。

「せんせえ」

ろくにあいさつもしないで、両側からとびついてきた。

「先生、めずらしい顔、だれだと思えます?」

早苗がいった。

「めずらしい顔?」

「一ぺんにあてたら、先生を信用するわ。な、ミサ子さん」

二人はいたずらっぽくうなずきあつて笑つた。

「ああこわい。信用されるかされないか、二つに一つのわかれ道ね。さてと、めずらしいといわれると、さしずめ、ああ、ふたりでしょう、富士子さんに松ちやん?」

「わあ、どうしよう!」

早苗は子どものように大声をあげた。

「あつたの? 二人ともきたの?」

「いいえ、ひとりです。ひとり。あてて？　わあ、もうわかったわ。いるんだもん」

三人はもう水月の前にきていた。見ていたのかげんかん関には小ツルやマスノをまん中にして、ずらりとならんでいたのだ。黒めがねの磯吉にどきんとしている大石先生の肩かたへ、いきなりしがみついて泣きだしたのは、マスノの横に立っていた、どことなくいきなつくりの着物をきた女だった。

「せんせ、わたし、松江です」

名のられるまえに、先生もすぐ気がついた。

「まあ、ほんとにめず珍らしい顔。よくきたわねマツちゃん、ほんとに、よく。ありがとうマツちゃん」

松江はしやくりあげながら、

「マスノさんから手紙もらいましたな、こんなときをはずしたら、もう一生仲間はずれじやと思つて、恥はじも外聞がいぶんもかなぐりすててとんできました。先生、かんにんしてください」

それこそ恥も外聞もなく泣きだすのをみると、マスノはわざと衿えりがみをつかんでひきもどしながら、

「これ、マツちゃんひとりの先生じゃありませんぞ。さ、いいかげんで、上へ行こう、行こう」

やっぱり海に向かった座敷ざしきだった。

「ソンキさん、こんにちは」

先生は磯吉の手をとつて、いっしよに階段かいだんをあがろうとした。

「あ、先生、しばらくでした」

「七年ぶりよ」

「そうですね。こんなさまになりましたな」

磯吉は、ちよつと立ちどまってうつつむいたが、ひかれるままに先生とならんで階段をあがった。曇くもっていた空は少しづつ晴れまを見せ、ま昼の太陽は海の上にきらきらしていた。二階はまぶしいほどのあかるさなのに、山に面した北窓のほうは今にも降つきそうきな、奇き妙みょうな空模様である。しかし、八畳じょうを二つぶつとおした部屋に、さわやかな風はみちわたり、肌はだにこころよくしみとおるようだった。

「ああら、眺ながめのいいこと、ちよつとオ……」

てすりのそばからだれにともなくふりかえった小ツルは、きゆうに口をおさえてあとをいわなかつた。磯吉を見たからだ。そのまの悪さをすぐに、ふつ消すように、マスノはれいのゆたかな声で、

「さ、先生はここ。ソンキさんとならんでください。こつちがわがマツちゃん。ふたりで先生をはさんで、たんのう堪能するだけしやべりなさい。あとはめいめい勝手にすわって」

投げだすようにいつてはいるが、それはじつに思いやりのあるマスノのはからいであることを、先生はひそかに感じた。

「先生を、一年生みんなでおむかえしたつもりですの。ですから

……」

ちらりと磯吉を見て、マスノもやはりあとをいわずに床とこの間まを指した。そこにはハガキ型の小さな額縁がくぶちにいられた一本松の下の写真が、木彫きぼりの牛の置物おきものにもたせかけてあつた。早苗がかんたんではあるが、あらたまつた挨拶あいさつをすますと、マスノはまたまを置かずにいつた。

「さ、あとは無礼講ぶれいこうでいきましょうや。昔の一年生になつたつもりで、なあ、ソンキ」

きちんとかしこまつた磯吉はにこにこしながら膝ひざをさすつた。さつきから、きつかけをつかもうとあせつていた松江は、先生にすりよつていつて、その顔をのぞきこむようにしながら、

「せんせ、千里ちさとがお世話になりました。それ聞いたときわたし、

うれしいでうれしいで。わたしはもう先生の前に出られるような人間ではありませんけど、でも、たとえどんなにけいべつされても、わたしは先生のこと忘れませんでしたの。あの弁当箱、今だつて持つてますから、大事に」

そういつて、ハンカチーフを目にあてるのを見ると、マスノはなぜかえすような調子で、

「なーにをマツちゃんがまた、酒ものまんうちにひとりでくだまいてるの。やめた、やめたそんなぐち。先生の前でいうこつちやないわ。むかし昔にかえつて！」

ほんと松江の肩をたたくと、松江はむきになり、しかし陽気さをくわえていった。

「だから昔話してんのに。なあ先生、わたし、あの弁当箱、戦争中は防空壕ぼうくうごうにまで入れて守ったんですよ。あの弁当箱だけは、娘にもやりたくないんです。わたしの宝たからでしたの。今日もお米入れて持ってきたんですよ、先生」

それを聞くと吉次が、あ、そうじゃ、といいながら、国民服の脇わきポケットから小さな布ぬのぶくろ袋をとりだし、

「はい、うら（私）の食いぶに」と、マスノのほうへさしだした。

「ええじゃないかキッチン、おまえ、魚もつてきてくれたもん」  
「どうやら今日の会はもちよりであるらしいと思いつながら、大石先生はしきりに松江の話の聞きことうとした。松江のいう弁当箱とは

いつたいたなんだろうと思つたからだ。防空壕ぼうくうごうにまで入れた宝の弁当箱とは。

先生はあの百合ゆりの花の弁当箱のことをすっかり忘れていたのだつた。

「マツちゃん、弁当箱つて、なあに？」

小声できくと、松江はとんきような声を出し、

「あら、先生、忘れたんですか。そんならもつてくる」

とんとん音立てて階段を走りおりていつたと思うと、やがてまたとんとんかけあがつてきた松江は、みんなの前に、からの弁当箱を、赤ん坊のするあるまいあるまいでしてみせ、

「どうぞすこれ、わたしが五年生になったとき先生にもらつたん

ですよ皆みなさん。どうです、どうです」

わあと歓かんせい声せいがあがり、

「先生、見そこないました。先生がマツちやんだけにそんなひいきをしたの、知らなんだ、しらなんだ」

マスノの抗議こうぎにまた笑声があがった。しかし、先生は涙なみだぐんでそれを見ていた。

見せられて思いましたその弁当箱べんとうばこに、いちども弁当をつめて学校へはこなかった松江のことが、修学しゅうがく旅行りょこうのとき、棧橋さんぼしまえ前の小料理屋で、てんぷらうどんいっちよう一丁さけツと叫んでいた松江の姿が、久しぶりに生きて動いて、いま目の前にいる松江とむすびつこうとしている。かわいそうだった松江、そのかわいそうさをく

ぐつてきたことをじぶんの恥のように卑下ひげしているような松江……。

ぼつぼつ料理が運ばれ出すと、松江はいち早く立ちあがった。ビールとサイダーを両手にもって、なれた手つきでついでまわる。それを見さだめてからマスノがいった。

「さ、先生のために、乾杯かんぱい！」

マスノはまつさきにコップを干ほした。松江がつぐのをつづけて干ほしてから、大きなためいきをし、

「ああ、ここに仁太やタンコがおつたらなあ。そしたらもういうことないですな先生。ソソキにタンコにキツチンに仁太と、人の好いのがそろとつたのに。竹一じゃとて、上の学校へいきだして

からは少しすましとつたけど、人間はよかった。わたしらの組、お人好しばかりじゃありませんか。それが、男はみんなろくでもない目にあい、女は海<sup>うみせんやません</sup>千山千になつてしもた。小ツやんや早苗さんじゃとて、やつぱり海千山千よ。ただその筆<sup>ひつとう</sup>頭が、わたしとマツちゃんかな。でもやつぱり、人はわるうないですよ。苦労しただけ、もの分かりもええつもりです。ミイさんのような賢<sup>けん</sup>夫人<sup>ふじん</sup>や、小ツやんや早苗さんのオールド・ミスのおえら方にはできんことも、わたしらはするもん。なあマツちゃん、大いにやろう」

そういつて松江のコップにビールをついだ。ビールをのんでいるのは二人だけなのだ。小ツルははじめから磯吉のそばにすわり

こんで、いちいち食べるものの世話役をしているし、松江は松江で、ここがじぶんの持場だというように、小まめに立ったりすわったりして料理をはこんでいた。むかし昔ながらのおとなしきで、だまつてのんだり食ったりしている吉次とならんで、早苗はふきだしながら、先生のほうを見、

「な先生、そう思いませんか。こういうところに出ると一ばん役に立たんのは学校の先生だと」

かた肩をすくめて笑うと、

「わたしこそ」

と、ミサ子がかもじもじしたので、そこで笑いが渦うずまいた。だいぶ酔よってきたマスノは、磯吉のそばによってきて、コップを手に

にぎらせ、

「さあ、ソンキ、あんまになるおまえのために、も一ぱいいこう」  
気がつくと、磯吉ははじめから膝ひざもくずさず、きちようめんに  
かしこまっていた。

「ソンキさん、みんな行儀ぎようぎわるいのよ。あんたももつとらしくに  
すわったら」

大石先生にそういわれると、磯吉は少しななめにまげた首のう  
しろに手をやり、

「いやあ先生、このほうがじつは、らくなんです」

質屋の番頭が目的だった彼の十代の日の膝ひざの苦行くぎようはもう身  
についてしまっているというのだ。彼はいま、三十に近くなって、

こんどは腕うでをかためねばならないのだ。もうすでにかたまつた彼の腕がどこまで、あんまとして成じょうじゆ就じゆできるか。しかもそれよりほかに生きる道はないのである。あんまの師匠ししやうは、そういう弟子でしをとりたがらないのだが、マスノの骨折りしゆびで、彼のばあいは首尾しゆびよく住みこめたという。その磯吉いそきちに、マスノはまるで弟あつかいの口をきき、

「おまえがめくらになんぞなつて、もどつてくるから、みんなが哀あわれがつて、見えないおまえの目に気がねしとるんだぞ、ソソキ。そんなことにおまえ、まけたらいかんで、ソソキ。めくらめくらといわれても、平氣ひらぎの平ひらぎでおられるようになれえよ、ソソキ」

ビールは磯吉いそきちの膝ひざにこぼれた。それを手早く磯吉いそきちはのみほし、

マスノにかえしながら、

「マアちゃんよ、そないめくらめくらいうないや。うらア、ちゃんと知つとるで。みな気がねせんと、写真の話でもめくらのことでも、大つぴらにしておくれ」

思わず一座は目を見あわせて、そして笑った。ソソキにそういわれると、今さら写真にふれぬわけにもゆかなくなつたように、写真ははじめて手から手へ渡つていった。ひとりひとりがめいめに批評ひひょうしながら小ツルの手に渡つたあと、小ツルは迷うことなくそれを磯吉にまわした。

「はい、一本松の写真！」

酔いも手つだつてか、いかにも見えそうなかっこうで写真に顔

を向けている磯吉の姿に、となりの吉次は新らしい発見でもしたような驚ろきでいった。

「ちつとは見えるんかいや、ソンキ」

磯吉は笑いだし、

「目玉がないんじやで、キッチン。それでもな、この写真は見えるんじや。な、ほら、まん中のこれが先生じやろ。その前にうらと竹一と仁太が並んどる。先生の右のこれがマアちゃんで、こつちが富士子じや。マツちゃんが左の小指を一本にぎり残して、手をくんどる。それから——」

磯吉は確信をもつて、そのならんでいる級友のひとりひとりを、人さし指でおさえてみせるのだったが、少しずつそれは、ずれた

ところをさしていた。相槌あいづちのうてない吉次にかわって大石先生は答えた。

「そう、そう、そうだわ、そうだ」

あかるい声でいきをあわせている先生の頬ほおを、涙なみだの筋すじが走った。みんなしんとしたなかで、早苗はつと立ち上った。酔よったマスノはひとり手すりによりかかって歌っていた。

はるこうろうのはなのえん

めぐるさかずきかげさして

じぶんの美声に聞きほれているかのようにマスノは目をつぶっ

て歌った。それは、六年生のときの学芸会に、最後の番組として彼女が独唱し、それによって彼女の人気をあげた唱歌だった。早苗はいきなり、マスノの背せにしがみついてむせび泣いた。

## 青空文庫情報

底本：「二十四の瞳」角川文庫、角川書店

1961（昭和36）年9月30日初版発行

1989（平成元）年7月10日66版発行

初出：「ニューエイジ」

1952（昭和27）年2月1日～11月1日

※誤植を疑った箇所を、「二十四の瞳」角川文庫、角川書店、2007（平成19）年6月25日改版初版発行の表記にそって、あらためました。

入力・・・sogo

校正：みきた

2018年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二十四の瞳

壺井栄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>